

---

# アリスと不思議なティータイム

苅谷冬希

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アリスと不思議なティータイム

### 【Nコード】

N1648H

### 【作者名】

苅谷冬希

### 【あらすじ】

アリス……それはこの世で最も高貴で優雅な少女に与えられる名前。事情もよくわからないまま私は新しいアリスに選ばれ、ハートの城へと招かれた。そこには一癖も二癖もある人達が住んでいて……不思議の国で巻き起こる私とどこか物騒で危ない住民達の物語。

## プロローグ

かちかち、かちかち。

何だかどこかで聞いたことがある音が聞こえる。どこだっけな？

ああ、時計だ。秒針が時を刻む音が静かに淡々と聞こえてくる。それは狂うことなく、乱れることもなく、正確にただただ刻み続ける。

視界が開けるとそこは暗い森の中だった。すぐそばにはお城と思われるような立派な建物が見え、その城壁のすぐそばに男が1人たたずんでいた。黒い外套に黒い服。靴や手袋に至ってまで黒一色に統一されている。どうしてそんなに黒と言う色が好きなのだろうかと思わず考えてしまった。異常にも思える黒尽くめの格好。そのくせ男の髪は目が覚めるような白銀で、黒一色の中でそれが異様に際立って見える。

先ほどからかちかちと音をたてているのは男の首にかけられている古い懐中時計だった。普通の物より二周りくらい大きいそれは黄金のように輝く金色のボディで作られ、細部に渡って美しい装飾がなされていた。

一目でそれがどこでも売っているような安い物ではなく、特注品で作られた高価な品物だとわかる。それほどに手のこんだ立派な物だった。

白銀の髪の中の両手には長い剣が一本ずつ握られており、異様に長い刀身は闇の中できらきらと輝き、何か赤いものがべっとり染み付いていた。血だ。しかもかなり生々しい。今まさに何かを切ったばかりなのか血が刀身から地面へと滴り落ちている。まさにホラーだ。

よくよく見れば男の服には帰り血がとびちり、赤いしみがところどころに見える。さらに男の足下には、おそらくその剣で切ったと思われる数体の人の死体が転がっていた。あまりおぞましい光景に思わず言葉を失う。死体の周りには小さな赤い血だまりが出来、ばらばらにされた四肢が散らばっている。

男が何をしたかは言わずともわかる。そのわりに男は罪のかけらなど全く感じていないのか平然とそこに立っていた。

かちかち、かちかち。

規則正しい秒針が進む音。時計をぼおつとして見ていた白銀の髪がふと周りに違和感を感じたのか、突然顔を上げる。冷たい空気が風もないのに震える。しばらくして突如闇の中からまたしても黒一色に統一された服をきた男が登場した。全く、何故そんなにみんな黒が好きなのだろう。こんな真夜中でそんな服を着ていては全く目立ったのではないか。白銀の髪の方もそうとう変な奴だと思っただが現れた男はそれ以上に奇妙に感じられた。男は黒い大きなシル

クハットをかぶっており、それが目元まで男の顔を隠している。そんな姿を見てしまえば、どうしてそんなサイズの合わない帽子をかぶっているのだろうかと疑問に思わずにはいられない。わずかに見える顎の部分には中途半端にそられた無精ひげが見えた。

現れた男は白銀の男と向かい合うように立つ。その手にはやはりと言うべきか白銀の髪のものより一回り大きな剣が一つ握られている。

「そんな恐い顔してどうしたんだい、帽子屋」

帽子屋と呼ばれた男は剣が握られた方とは別の方の手でシルクハットのつばを軽く持ち上げた。隠されていた目がちらりつと見える。顔はいたって普通だ。思ったより年齢が若く、顔が整えられているがそれほど目をひく顔じゃない。顎に生えてる中途半端な無精ひげをそればきつともつとカツコ良く見えるのだろう。だが男の茶色みがかかった瞳には今、やや影が落ち、そうとう怒っているのがわかる。その目を見ただけで何か冷たいものを感じ、背筋が寒くなった。明確な殺意。この男もまた、何かする気なのだろうか。救いがあるとしたら帽子屋の剣にはまだ血がついていないことだ。しかしそれも時間の問題かもしれない。

「お前、自分のしたことがわかっていいのか？ 白ウサギ！」

白ウサギと呼ばれた白銀の髪の方はわざとらしく首を傾げて、帽子屋を挑発する。その表情にはうつすらと余裕の笑みが浮かべられている。どうしてあんなな目で睨まれて笑っていられるのだろうか？ 度

胸がすわっていると云うか、無謀と云うか……

「しょうがないだろ？ あれはどうしようもなかったんだ。私のせいじゃない」

「お前……」

「だいち、あのままだったら私のはじかなくなかったって勝手にはじかれていたさ」

白ウサギは笑う。目は冷たく、握られた剣がまるで獲物を求めているかのように光る。

「あの子はもうこの世界にいるべき人間じゃない。この世界があの子に必要なものと判断したんだよ」

白ウサギは淡々とした口調でさらに言う。

「君だって本当は彼女がいなくなってほっとしているんだろう？」

帽子屋は何も言わない。しかし反論しないと言うことは白ウサギの推測はあながちはずれていないのを認めることになる。白ウサギは少し嬉しそうな笑みを浮かべた。

「大丈夫、変わりならすぐ来るよ。私達にもこの世界にもアリスが必要なんだから」

そう言って白ウサギは赤い瞳を細めた。

## 第一章 白ウサギに連れられて その1 (前書き)

更新のスピードが大変、のんびりしていますが気長にお付き合を  
お願いします。



## 第一章 白ウサギに連れられて その1

「  
×××、  
×××」

心地のよい眠りについていてると突然誰かが私の名前を呼び、その眠りを妨げようとしてきた。

声の主が誰かはわかっていった。まるで母親のような優しい柔らかかな声。こんな声を出せるのは死んだ母の他に1人しかいない。

私は目覚めることに苦痛を感じつつもそれに抗う訳にもいかず、眠りから目覚める。

目を開ければそこはいつもの家の庭だった。ぼおつと見慣れた庭を見つめ、それから声が出た方を向く。

そこには予想通りの人がいた。さらさらとした母親ゆずりのキャラメル色の髪に思わず見とれてしまうほど綺麗に整えられた顔、そしてそこに浮かべられている優雅な微笑み。

「もう、×××ったら。話の途中で寝むってしまっなんて、しょうがない子ね」

姉さんはそう言い母親によく似た笑顔を見せる。私はそんな優しい眼差しから逃れるようにうつむき、小さな声で素直に謝った。

「いいのよ。×××だって疲れているものね」

「ううん、そんなことないよ。それより何の話をしてたっんだっけ」  
「？」

「学校のことよ。最近どうなのかしら？」

「どづつて特に何も変わったことはないよ」

「もう、×××ったらいつ聞いてもそうなんだから」

「だって……」

私は口ごもる。正直言って本当に何も話すことはない。困ったように笑うと姉さんはあきらめたように小さくため息をついて、話題を

かえた。

「ねえ、×××。どんな夢を見ていたの？」

「夢？」

「そう、さっき眠っていたじゃない。どんな夢を見たの？」

どんなつてどう言えはいいのだろうか？ 訳のわからない二人の男  
が出てきて、何やら言い争ってた気がする。ちよつと考え込んでか  
ら私はこつ答えることにした。

「忘れちゃった。でもいい夢だった気がする」

「あら、そう。いい夢なら良かったわね」

「うん」

姉さんはそう言い優しく微笑む。もちろんあの夢のことなら細部に  
わたつてよく覚えてるし、あれがいい夢のはずなどないこともわ  
かっている。それでも私はそれを姉さんに言う気はなかった。

私は姉さんが思っているような素直で可愛い妹ではない。

だから平気で嘘をつくし、姉さんに合わせて楽しくなくても嫌な顔一つせず付き合う。

休みの日に姉さんと同じくして庭の木陰で読書をするのは幼い頃からの決まりごとのようなもので、それは私が16になった今でもおこなわれていた。

でも本当のことを言えば私は姉さんのように優雅に木の下で読書とかより、もっと快活的なスポーツとか遊びとかの方がしたいのだが、そんなこと言えば姉さんは「どうしたの×××。いつからそんな子になってしまったの」と言って騒ぎだすだろうから私はそのことに関しては何も言わないことにしている。

姉さんは私が楽しかろが退屈そうだろうが隣にさえいればそれだけで満足そうなので、私はいつも姉さんが読書をしている間、隣でのんびりと庭を眺めていた。

たかが半日のこと。別に苦痛に思うほど暇でも嫌でもなかった。

「あ、そうだ。そろそろお茶にしましょう？ さっき美味しいケーキをもらってきたの。一緒に食べましょう」

そう言っつて、姉さんは立ち上がり、ゆったりとした動作で家の方へと向かう。

「ほら、×××も早く」

私は小さくため息をつきながら姉さんの後へとついて行こうと立ち上がったその時、ふんわりと薔薇の花のような強くて甘い香りがあった。

ゆっくりと香りのした方へと振り返り、そして自分でも間抜けだと思いつつ、ぱかんと口を開けそれを見てしまった。

振り返ると庭の奥の方に1人の男が立っていた。赤い服に赤いリボン。格好だけ見れば単なる変な人だ。確かに自分の家の庭にそんな人が立っていれば不審には思うがさほど驚きはしない。しかしその髪の色と顔を見て私はただ呆然とその場に立ち尽くすことしかできなかった。

嘘でしょう？ 目が覚めるような白い髪に整った顔。夢の中に出てきたあの男に間違いなかった。

血まみれで死体の中に立っていた男。確か白ウサギとか呼ばれてい

た気がする。

呆然とする私をよそに男はにっこりと笑い、小さく手をふってくる。

どうやら私を呼んでいるようだ。夢の中で姿を見たというものの、もちろんその男と面識などは全くない。かと言って無視するのも恐い気がする。どうしようかと悩んでいると男はふいっと背を向け、すたすたと庭のさらに奥へと入って行ってしまふ。

「×××？ どうしたの？」

家に戻りかけていた姉さんが私がないことに気づき心配そうに声をかけてくる。

迷うことなかなかった。私は姉さんのその言葉に答えずに走り出し、男を追いかけた。

おかしい……絶対におかしい……。確かにうちは他の所に比べれば家が少し大きく、庭もそれなりに広いかもしれない。だけどいくらなんでもこんな広いはずはない。ずっと走っていると言うのに庭の端はいまだに見えない。いつからこの庭はこんなに広くなったのだろうか？

おかしいのはそれだけじゃない。男は急ぐ様子もなく、ゆっくりゆ

つくり歩いているように見える。にも関わらず、どんなに必死に走っても男に追いつけない。

何で？ 何で追いつけないの？ それどころかその距離は徐々に広がっているようにさえ思えた。やがて男の姿が視界から完全に消える。

「待つて！」

何で私、こんなに必死になって知らない男を追いかけてるんだろう……。ばかばかしく思うと同時に見失ったことに対し焦りがうまれる。

「あつ……」

ようやく庭の端につく。慌てて辺りを見るがそこにあの男の姿はない。代わりに見慣れない大きな穴が一つ、庭の端の地面に何故だかあけられていた。

何で庭に穴が……。当然だがつい最近までこんなものは庭にはなかった。そおつと中を覗いてみる。

こんな穴1日やそこらで掘れるようなものではない。だいぶ深いのか、底の方はまったく見えない。

穴の中にはただただ何も無い闇だけが広がっている。怖い……。背中にぞくりとした感覚が走り、私は後ずさる。

すると、誰かが私の肩に手を置き、それを止めた。驚いて振り返るとそこには追いかけていたはずの男が立っている。

にっこりと男は私を見て笑う。気のせいか、何だか嫌な予感がする。

「見つけましたよ、アリス」

「アリス？」

気持ち悪いほどにこにことする男を困惑ぎみに見つめる。

「アリスって私のことですか？」

「貴方以外に誰がアリス何ですか？ さあ、私と一緒に不思議の国へ行きましょう」



はい？ 口元がひきつる。男はあいかわらずにここにどここちらを見つめている。

「不思議の国？ 何ですかそれ……」

そんな名前の場所など聞いたこともないし、行きたいとも思わない。

「不思議の国は不思議の国ですよ。ほらほら見てください、もうこんな時間。急がなきゃお茶会の時間に間に合わせんよ？」

そう言つて男は懐からあの懐中時計を取り出す。夢でも見たがよく見れば見るほど立派な時計だ。すごく高価な物なのだろう。いや、このさい時計のことなんかどうでもいい。重要なところを教えてもらわないと。このままでは本当に訳のわからないままどこかに連れていかれてしまいそうだ。

「あの〜、まったく話がわからないですけど……」

「ああ、大変だ。急がなきゃお茶会に遅れちゃう」

聞いてない。この人、全く人の話を聞いてないよ。しかも大変だとか急がなきゃとか言ってるわりに何ともものんびりしている。急ぐ気など、全くなさそうだ。

「と言うわけで行きましょうか、アリス」

どこがと言うわけなのだろうか？ そんな疑問を抱く私をよそに男は私の手をひき、止める間もなく抱え上げた。

「ギャー！？ 何やってるんですか!？」

「さあ、行きますよ。アリス」

行きません。行きたくありません。首を必死に振り、男に訴えるが男はそんなのお構いなしに穴のふちに立ち、穴を見つめる。非常に嫌な予感がする。

「あ、あの、貴方、私を誰かと勘違いしてますよ。私の名前は……」

「口を閉じないと舌をかみますよ?。」

男はそう言つと何のためらいもなく穴へと飛び込む。

視界がぐらりと揺れ、闇に飲み込まれる。風のうなり声だけが耳に響き、重力に従い体が下へ下へと落ちていく。

名前も知らない男の手によって、今まさに私の人生は終わりを迎えようとしている。こんな最後になるなんて誰も思っていなかっただろう。私も思っていなかった。

白ウサギに連れられて その2 (前書き)

やっと舞台が不思議の国へと移動します。

白ウサギに連れられて その2

どンドンどンドン落ちていく。

「キヤー！ 落ちてるー！？ 本当に落ちてるよー！？」

「アリスったらいくら嬉しいからって、そんなに騒がなくなっただって」

「嬉しくない！ 全然嬉しくないから！」

「またまた。アリスって意外と照れ屋なんですね」

人生最後の瞬間だと言うのに何故見知らぬ男とこんなトンチンカンな会話をしなければいけないんだ。

「あなた、頭が狂ってるんじゃないの！？ 何でこんな状況で落ちていられるのよ！？」

「狂ってるだなんて失礼だなあ。帽子屋じゃあるまいし、私は正気ですよ」

「どごがよ!?!」

うん? 帽子屋って確か夢の中で言い争ってたもう1人の男の人?

男はため息をつき、さらに続ける。

「あの男は真面目と言うか……本当に石頭で融通が利かないと言うか……まあ、だからからかうと面白いんですが」

そう言っつて男は笑う。その笑みは微笑ましく友達のことを語るような暖かな笑みではない。いじめっ子の笑みだ。

「あなた、いったい何者なのよ!?!」

「あ、そう言えばまだ名乗っていませんでしたね。私の呼び名は白ウサギです」

「呼び名って……」

偽名!?! 何者かって聞かれて普通、偽名を答えないでしょう?

「呼び名って、それ……あなたの名前ではないわよね?」

「ええ、呼び名ですから」

「私はあなたの名前を知りたいの！」

「アリスだったらそんな……いきなり出会ったばかりなのに名前を知りたいなんて……」

そう言って何故か白ウサギは顔を赤らめる。異様なほどに寒気を感じるのは何故だろうか？

「でも、アリスが知りたいって言うなら特別に……」

「いいです！                   結構です！                   白ウサギさんですね？                   それでいいです！」

「もう、アリスったらやっぱり照れ屋さんなんだから」

そう言って無邪気に笑う白ウサギに私はもう何も言えなかった。と言つより、ここまでできてしまっただけはもうどうしようもない。落ち始めてからだいたいぶたつのに一向に穴の底は見えてこない。それでも穴

である以上底は絶対にあるだろうし、底にたどりつけば私の体は一気に地面に叩きつけられ、粉々に碎けるだろう。

それを防ぐ手だてなど、私も白ウサギも持っていない。

「アリス、そろそろ着きますよ」

「まっ、待って！ まだ心の準備が……」

そんなこと言っただって落下が止まるはずもなく、体は私の意志とは関係なく、ついに底へとおちていった……

「アリス……」

どこかで誰かが私を呼んでいる。あれ？ いつの間にか私、アリスって名前に慣れちゃってない？ 本当は名前違うんだよね？ 確か私の名前は……



「起きてくださいよ、アリス。いつまでそんなところで寝てるんですか？」

白ウサギの声にはっとして私は閉じられていた目を開けた。

「生きてる！？ 私、生きてるの！？」

「何言ってるんですか？ あれぐらいで死ぬ訳ないじゃないですか」

「あれぐらい……」

普通は死ぬだろう。死ななかったとしても全身を強打し、重傷をおうはずだ。それなのに白ウサギの言うとおり、私の体にはどこにも傷やあざはなく、痛みさえ感じない。地面に倒れていたことを除けばいたってどこも普だ。

やや困惑しつつも白ウサギに聞いたってどうせトンチンカンな答えしか言わないだろうから何も言わないでおいた。

「さあ、アリス。遂に私達の国。ワンダーランドへようこそ」

「ふじ」そして……」

そう言われても辺りには森しか広がっていない。国にはとてもじやないが見えない。

「ここが不思議の国？」

「ええ、もう少し歩けばお城がありますよ。街はそのさらに先です」

「お城？ あなたお城の主なの？」

そう言われれば顔も格好も貴族っぽい感じもしないような……

「いえ、私のお城ではなく、あなたのお城なんですよ」

はい？ 　いつから私はお城の主になったんだ？ 　全く身に覚えがない。

「待って、いったいこれはどうゆうことなのよ！？」

「どういふ言われますと？」

呑気にそう問い返す白ウサギに私は苛立ちを覚えながら、それでも辛抱強く話しかける。

「この状況よ！ 言うておくけど私はアリスって名前じゃないし、こんなどこだかわからないような所に来たくなんてなかったの！」

半端やけくそでそう怒鳴ってみても白ウサギは全く気にした様子はない。

「あなたがアリスという名前かどうかは別に関係ないんですよ。あなたがこの世界の新しいアリスに選ばれたということが大事なんです」

新しいアリス？ 全く理解できない。

「ねえ、説明する気が少しでもあるならもう少しわかりやすく説明してくれない？」

「ええー！？ まだわかんないんですか？ 全く、あなたみたいな頭の悪いアリスは初めてですよ」

この野郎。人がわからないのをいいことにバカにして……。だいた  
いあんな断片的な説明じゃわかるはずがない！

私のそんな思いと裏腹に白ウサギは楽しげに笑う。

「あ、でもそんなところもかわいいですけどね」

無性にこの男を殴りたいと思うのは何でだろう。

「そうですね、とりあえずここはあなたがいた世界とは違う世界に  
ある不思議の国です。私の呼び名は白ウサギ。この世界の案内人  
です」

白ウサギはそう言うと丁寧に頭を下げた。

「別世界からアリスを迎えに行き、この世界に連れてくるのが私の  
役目です。そしてアリス、あなたはこの世界の新しいアリスに選ば  
れたという訳なんです」

「選ばれたって……勝手に選んで、勝手に連れて来ちゃうなんて少  
し強引すぎじゃないの？　せめて私の意見ぐらい聞いてくれても

いいんじゃない……」

「何言ってるんですか？ アリスになると決めたのはあなた自身ですよ？」

「は、はい!？」

全く身に覚えがない。私は穴でも空いてしまつのではと思うほど白ウサギを見つめる。

「だってあの時、私を追いかけて来てくれたでしょう?」

確かに追いかけた。あの時、私は姉に名前を呼ばれているにも関わらず、姉のもとではなく見知らぬ男のもとへと自分の足を進めたのだ。

私はあの時、無意識に選んでしまったのだ。あの人といえるくらいなら……いつそのままどこか知らない所へ行ってしまうらしい思ってしまったのだ。

「帰らなきゃ……」

私の言葉に白ウサギは目を丸くする。

「どこへ帰るんですか？」

「どこって私がいた所へよ！　だって姉さんに何も言わずに来ちゃったし、このまま消えたらきつと大騒ぎになるもの！」

「別にいいじゃないですか。そのうちみんな黙りますよ。永遠に騒ぎ続けることなんて誰にもできませんって」

「そうだけど……」

わかってる。私なんか消えたって誰も気にもとめないし、悲しまない。

姉さんは悲しんではくれると思うけどそれだってそのうち綺麗さっぱりと忘れてしまっただろう。それでも……

「帰らなきゃ……」

その言葉に白ウサギはびくりと反応し、私の方をじいっと見つめる。

血のように赤い瞳。雪のように白い髪。こつやってみると呼び名のとおり、白兔に見えなくもない。

「アリス、あなたは帰りたいたいんですか？」

「そう……帰りたい」

心からそう思っているはずなのにどこか弱々しくなってしまうのは何故だろうか？

白ウサギは私の方をしばらく無表情で見つめていたが、やがて赤い瞳を細め、笑った。

「帰りたいならアリスはアリスの役割をしなければいけません」

「私の役割？」

「そう。役割を無事に終えることができたならあなたは元の世界に自然と帰れるでしょう」

白ウサギの言い方は優しくかった。それはまるで迷子になってしまいう途方にくれる子供をあやすかのように、とてもとても優しくかった。

にも関わらず、私はその言葉に恐怖を覚えずにはいらなかった。

もしも白ウサギの言う事が正しいというなら、それはつまり無事に役割を果たせなければ私は元の世界へ帰れないということだった。



白ウサギに連れられて その3 (前書き)

ついに白ウサギ以外のキャラが登場です。

白ウサギに連れられて その3

「ねえ、どこまで行くの？」

薄暗い森の中。私は白ウサギの後に続いて歩いて行く。もうだいぶ歩き続けているはずだが一向に景色は変わらない。ずっと森の中のままだ。

「もう少しでお城につきますからね」

そう言って白ウサギは笑う。しかしこのやりとりはすでに3回目だ。私はため息をつく。こんな奴の道案内を信じてついてきた私がバカだったのかもしれない。

「ねえ、白ウサギ」

「何です？」

慣れとは恐ろしい。私はあんなに不審に思っていたにも関わらず、白ウサギと普通に会話できるほどになっていた。

「私、お城に着いたらどうすればいいの？」

「何って……そうですね。まずはお茶会にでも出席して……」

そこで白ウサギは言葉を止めた。紅い瞳が見る見る間に細くなり、眉がしかめっ面になる。

「ちょっと……どっしたのよ。白ウサギ？」

「どっやらいたずら好きの猫に見つかってしまったようですわね」

いたずら好きの猫？

白ウサギに問い返そうとしたその時、がさりと後ろの茂みから音が聞こえた。振り返る間もなく、何か小さなものがすぐそばで破裂したような音が聞こえ、私は白ウサギによって地面に押し倒された。

痛い……。ちらりと白ウサギの方を見ればその目は冷たいものへと変わっていた。

「アリスに向かって発砲するなんて少しいたずらがすぎるぞ、チエ  
シャ猫」

白ウサギはそう言つと憎々しげに茂みに立つ少年を見た。

年齢は自分より少しだけ年上だろうか？ サイズが合わない大きめな服をだらしなく着込み、へらへらとした笑みを口元に浮かべている。長めの前髪によつて目元はほぼ隠されているものの、その隙間からわずかに目が覗く。ざらりと光る目、その目はまさに猫のようだ。

つて待つて……発砲？

よく見れば少年の手には黒い拳銃のようなものが握られている。さっきの音はあれか！？ もしも白ウサギが庇ってくれなかったら今頃……。一気に血の気が全身からひく。

「別にいいじゃん。当たんなかっただし」

「当たらなかつたんじゃないだろう？ 私が当たらせなかつたんだ」

「どつちもいっしょじゃない？」

「いや、違つてしょ……」

やや呆れながら私がそう言うとチエシヤ猫はその目を嬉しそうに光らせ、好奇心な眼差しを私に向けた。

「へえ、それが新しいアリス？　いいね、可愛い。襲いたくなっちゃうよ」

襲うって……ええっ！？　こいつも変態かよ！！

「チエシヤ猫！　お前は何てことを言うんだ！？　私より先にアリスを襲うなんてことが許される訳ないだろうっ！！」

ああ……変態が2人もいる。

「ふーん、今度のアリスにはえらく執着してるんだ？」

「当たり前だ。私が選んできたアリスだぞ？　前のとは比べものにならないほど可愛いだろうっ！」

自慢気に胸を張る白ウサギ。何て奴だ……。やっぱり一度思いつきりその自慢気な顔を殴りたい。

「私は別に可愛くなんかないの！ そんな大きな声で誤解を招くよ  
うなこと言わないで！」

「可愛くない！？ 私の選んだアリスが可愛くないなんて事あり  
えませんよ！ アリス、あなたはかなり可愛いんですよ？」

「どづゆづ理屈よ！ どづゆづ！？」

白ウサギは立ち上がって自らの服についた泥を払い、それから私の  
手をつかみ、引き上げ、立たせてくれた。

「ありがとう……」

「いえいえ、アリスのためならこれぐらいどづつてことないですよ」

白ウサギはそう言って私に笑いかけたと思ったたらすぐに恐い顔をし、  
チエシヤ猫の方を睨む。

「だいたい執着してるのはお前の方だろう？ 出会いがしらにい

きなりアリスを撃ち殺そうとするなんて、前代未聞だ」

チエシヤ猫はそれに声を出して笑う。何がそんなに可笑しいのかその目には涙までうつすらと浮かんでいる。

「あまりの可愛さについつい殺したくなっちゃってさ。でも何も本気で撃ち殺そうなんて思っていないよ？ どうせ白ウサギがきつちり守っちゃうだろうし」

「もちろん。私はお前と違って真面目な人間なんでね」

その点に関しては全く賛成できない。

「ねえ、久しぶりに会ったんだから遊んでよ」

「何故、私がお前の相手をする必要があるんだ？」

「え、ケチ」

「何とでも言え。あんな奴ほっといて行きましょう、アリス」

「うん。あ、それとも俺とやり合つのが怖い？」

チエシャ猫のその一言に白ウサギの目が変わる。静かで、冷たいその瞳は殺人鬼のものへと変わる。あの夢で見た目だ。その目を見ただけで私の体は無意識に震える。今の白ウサギは今まで一緒にいた白ウサギではない。やはり彼は単なる変態ではなく、恐ろしい人物だったのだ。

「今日は機嫌がよかったからやりすぎたいたずらも見逃してあげようと思っていたのに、気が変わってしまったよ」

白ウサギはゆっくりと手を振る。するとまるで何かの手品のようにそこに剣が現れた。両手に一本一本握られた細身の剣。まさに夢のままだ。ただ夢の中と少し違うのはその刀身に今はまだ血が付着していないことだ。まあ、それも時間の問題だろうが。ちらりとチエシャ猫の方を見ればチエシャ猫はにんまりとした笑みを浮かべ、嬉しそうに拳銃を構える。その両手には白ウサギと同じように一丁ずつ握られていた。

「そう言えば白ウサギも二個だけ？　　あはは、おそろいだ」

「お前とおそろいなんて冗談じゃない。二度と両手が使えなくして



やるっ」

けんかなんかではない。2人とも本気だ。私はどうすることもできずに呆然と2人を見つめた。

## 白ウサギに連れられてその4（前書き）

不思議の国のアリスの登場人物の中で一番帽子屋が好きです。

## 白ウサギに連れられてその4

ああ……どうしてこんなことになったんだろう。睨み合う2人を見つめ、私は小さくため息をついた。

両手に一本ずつ剣を持つ男は白ウサギ。何とも変わった名前だがそれは彼の呼び名であって、本来の名前ではないらしい。

それと向かい合うように立ち、拳銃を両手に一丁ずつ握るのがチエシヤ猫と呼ばれる少年。白ウサギとは知り合いらしいのだが、話し方と態度からあまり友好的な仲ではないようだ。ついさつき会ったばかりの私の命を何故か狙い、そのことが原因で今白ウサギと殺し合いの真っ最中である。

最初に動いたのは白ウサギだった。一気にチエシヤ猫に切りかかり、二本の剣を巧みに扱い、チエシヤの心臓を本気で狙う。

チエシヤ猫はそれを拳銃で防いでいく。さすがはけんかをふっかけただけあって、その身のこなしは素晴らしい。だが力に関しては白ウサギの方が有利だ。白ウサギは剣を力任せに振り切り、防いだ拳銃ごとチエシヤ猫を切るうとする。その試みは丈夫すぎる拳銃によって失敗に終わったが力任せに振り切られ、チエシヤ猫はわずかだが体制をくずす。その一瞬を逃さず、白ウサギはチエシヤ猫に切り

かかる。寸前のところでチエシヤ猫は剣をかわす。

ここでチエシヤ猫が反撃を試み、拳銃を白ウサギに向かって構え、撃ち込む。白ウサギはそれをよけたりせず剣で弾き飛ばした。

そのはじかれた銃弾は一瞬宙を舞ったかと思うと私の方めがけてとんできた。

当然私にはその銃弾をよけれるような華麗な運動神経はない。私にできたことと言ったらぎゅっと目を閉じ、覚悟をきめることだけだ。

がんと銃弾が何かに当たった音がして、こわごわと目を開ける。

良かった。とりあえず私の体のどこにも穴は空いていない。ちらりとめをすぐ横の木に向ければそこに銃弾が打ち込まれた後があった。

どうやらセーフだったらしい。私は大きく息をつき、胸に手を当て、早まった鼓動の音を聞く。良かった……と安堵したのつかの間、再びチエシヤ猫が白ウサギに発砲する。

それを白ウサギは当然のようにはじく。

そしてその銃弾は私のもとへと容赦なく飛んでくる。

今度は三発。もう防ぐどころではない。終わった。私は今度こそ覚悟を決めて目を閉じる。

「アリス！」

白ウサギよりもチエシヤ猫よりも低い声で突然私は名前を呼ばれ、そうかと思っただら誰かに後ろから引き寄せられた。

間一髪。その誰かが後ろに引き寄せてくれたことにより、私は三発の銃弾から奇跡的に逃れることができた。

つぶっていた目を開き、恐る恐る振り返る。

「帽子屋さん？」

私を抱きかかえたようにして座り込んでいた男が一瞬怪訝そうな顔をして私の方を見下ろした。

黒い髪に茶がみかかった瞳。さらに目を引きつける大きな大きなシ

ルクハット。間違いない。白ウサギと夢の中で言い争っていた彼だ。帽子屋は何か言いたげに私の方をしばらく見ていたが、結局何も言わず、視線を争っている2人へと向ける。

私もつられてそちらを見れば、さっきまで争っていたはずの2人が顔を見合わせてそこに立っていた。まるで親にいたずらがばれてしまった子供みたいな表情をどちらもしている。

もう戦う意志がないのかいつの間にか武器もしまわっていた。もっともどこにしまったのかは謎のままなのだが。

「貴様ら……いったい何を考えているんだ？」

すごみのある低い声が響く。怒鳴っている訳ではないのだがその声はあきらかに怒っている。

「言っておくけど、私は悪くないよ？ その猫がアリスに向かって発砲するからこんなことになったんだ」

「えー、俺のせい？　そうゆうあんたこそ安い挑発に簡単にのったくせに」

「元はと言えばお前がいけないんじゃないか」

「えー、だってアリスに向かって弾いたのは白ウサギだぜ？ 何  
でよりによってアリスの方に銃弾はじくんだよ。俺よか白ウサギの  
方がよっぽどアリスを殺そうとしてたじゃん」

「そんな訳ないだろう。だいたいお前が弾かせるような弾を撃つ  
がいけないんだよ」

「えー、白ウサギが当たれば問題ないじゃん」

「あんな遅い弾。猿でもよけられるだろうが」

「じゃあ、私は猿以下ってこと？ じつと責めるような視線をやれ  
ば白ウサギは慌てていいわけをする。」

「アリスはよける必要なんかないからいいんです。貴方は私が守り  
ますからね」

そう言って爽やかに笑う白ウサギ。さっきそう言う貴方に殺されそ

うになっただんですけど……

「くだらん言い訳はいい。貴様らにアリスを任せた俺がどうかして  
ただ」

帽子屋は吐き捨てるようにそう言うとその言葉にぴくりと白ウサギ  
が反応する。

「どう意味だよ？　帽子屋……」

「そのままの意味だろう？」

睨み合う2人。白ウサギの紅い瞳が冷たく光る。

「だいたい帽子屋。いったいどう言っつもりなんだい？」

「何がだ？」

白ウサギのその目にひるみもせず、帽子屋は問い返す。すると白ウ  
サギは凄まじい形相で帽子屋を睨む。そのあまりの表情に私は呼吸  
するのさえ、忘れ、その目を見つめた。白ウサギは帽子屋を睨みな



がら大きな声で怒鳴る。

「いつまでそうやってアリスにくっついてるんだ！ いい加減離れる！」

一瞬にしてピリピリしていたはずの空気が変わる。全員が啞然とした、またはやや呆れたような顔で白ウサギを見る。

しかし当の本人は未だに帽子屋の方を見て騒ぎ立てる。

「帽子屋！ 早くアリスから離れるんだ！ じゃなきゃ今すぐにもその腕切り落としてやる！」

口調まで変わり、もはやわがままを言う単なる子供のようだ。私はもう何も言えず額を抑えて黙り込む。それは私だけでなく、帽子屋までもが呆れたようにため息をつく。ゆっくりと立ち上がり、私から少し離れた。

「これでいいのか？」

怒鳴り散らしていた白ウサギが黙り込む。じいっと警戒するかのよ

うな目で幟子屋を見てから、後3メートル離れるよつじと言いた  
た。

白ウサギに連れられて      その5 (前書き)

遂に第1章完。 城に行くまでどんだけ時間かかってるんだよ。

白ウサギに連れられて その5

「アリス！ 帽子屋に何かされていませんか？ どこか触られたり、嫌なことを言われたりは？」

「大丈夫よ。それよか貴方は自分の頭を心配したらどう？」

「私の心配をしてくれるんですか？ 嬉しいです」

もう駄目だ。こいつの頭はどうやっても治りそうにない。

呆れる私をしりめに白ウサギはご機嫌な様子で隣にやってきた。さつきまであの機嫌の悪さが嘘みたいだ。チエシヤ猫も帽子屋も完全に呆れたような表情で白ウサギを見ている。

「白ウサギをそこまで虜にするなんて……一体あんた何をしたんだよ」

「言うておくけど私は何もしてないから！ 勝手にこいつが一方的に好意を抱いてるだけだから！」

「そんな一方的だなんて。本当はアリスだって私のことが……」

「ありえない！ 絶対にそれはない！」

「もう、照れ屋なんですから」

気持ち悪い！ なんなのこいつ！？ 一人で勝手に妄想していかないでー！

色んな意味で寒気を感じていると帽子屋が不機嫌そうに眉間にしわをよせる。

「時間はとくに過ぎてるって言うのいつまで遊んでるんだ？」

私に向かってそんなこと言われてもどうしようもない。ちらりと白ウサギの方を見れば帽子屋のその言葉に子供のようにはぐくんでいた。

「さっきからお前は本当につるさいな」

「お前がアリスを惑わせるからいけないんだ。それに急がないとお

茶会が始まる。早くあのバカウサギを止めてくれ……」

そう言つて帽子屋は額を抑える。何だか嫌な気がしてきた。これ以上変態が増えるのはごめんだ。

「待つて……バカウサギつて……白ウサギの他にもバカなウサギがいるわけ？」

「アリス！ 私を三月ウサギなんかと比べないでくださいよ。あいつこそ頭がどうにかなつてゐるんです！！」

チエシヤ猫と帽子屋が黙り込む。否定をしないところ見るとどうやら事実らしい。

また……変なのが1人……。だんだん泣きたくなってきた。

「なあ、アリスつてこれから城に住むの？」

「当たり前だろう？ あそこはもともとからアリスのための城なんだから」

「じゃあさ、俺の部屋に来ない？ 添い寝とかしてやるぜ？」

「冗談じゃない。お前みたいな危ない奴とアリスが部屋を一緒にする？ ありえない。それならいつそ私のところに……」

「いい、遠慮する」

白ウサギと同じ部屋に住んだりしたら何をされるかわかったもんじゃない。断固として拒否だ。

「お前らはバカか？ あそこに部屋なんか掃いて捨てるほどあるだろっが」

ため息をつきながら帽子屋はそう言い、2人を睨む。どうやらこの中で一番まともなのは帽子屋らしい。

私は先ほどチェシャ猫に邪魔されてしまった質問を思い出し、再度白ウサギに尋ねる。

「ねえ、結局私、お城行ってどうすればいいの？」

すると白ウサギがその質問に答える前に帽子屋が答える。

「詳しい事は城についてから話す」

帽子屋はそう言って私を一別するとすぐに目を逸した。

何と言うか……帽子屋に関して言うならあまり私に友好的ではないようだ。まあ、執拗に好かれるよりはマシだが……。そんな事を考えているとチェシヤ猫が隣にやって来た。

「アゝリス」

名前を微妙に伸ばして呼ばないで欲しい。注意しようかと思っただが彼が白ウサギに負けない危険人物だということを思い出し、止めた。

「何……?」

「そんなに露骨に嫌な顔すんなって。俺ただあんたと仲良くしたいだけだからさ」



普通に考えて、自分を撃ち殺そうとした相手と仲良くできるだろうか？ はっきり言おう。無理だ。私の考えてることを感じとったのかチエシヤ猫はにやにやしなから言っ。

「そんなに怒んなよ。ちょっとあんたに興味あっただけなんだ」

「興味本位で私を殺そうとしたの？」

「まあ、でも実際無事なんだからいいじゃん、ね？」

何がねだ！？ 言いかえそうと思ったが相変わらずのにやにや顔に私は言い返す気も失せ、結局何も言えなかった。

「まだちゃんと自己紹介してなかっただろ？ 俺はチエシヤ猫。よろしくな」

そう言ってチエシヤ猫はにんまりと笑っ。

「それって名前じゃないよね……」

どう考えてもチエシヤ猫は名前ではないだろう。白ウサギと同じたぐいのものに違いない。

「呼び名ってやつ？」

「そうだよ。俺の呼び名はチエシヤ猫。あんたかわいいからチエシヤって呼んでいいぜ」

「だから可愛くないって……」

私はため息をつきながらチエシヤを見る。にこにここと笑うチエシヤ。よくよく笑顔の似合う奴である。

仲良くしたいね……。それも悪くないかも。そうよ、不良少年が友達になったと思えばこのぐらいなんてことはない。

例え……相手が二丁の拳銃をいきなりぶっ放すような、危ない奴だとしても。例え興味本位で人を本気で殺そうとしても。

何だかひどい頭痛がしてきた。

アリスとチェシャ猫が2人で並んで先に行くのを確認してから帽子屋は白ウサギのもとへと近寄る。

「おい、白ウサギ。何故、あんな小娘をアリスに選んだんだ？」

「気に入らなかった？」

「理由が知りたいだけだ」

険しい表情で詰め寄る帽子屋を見て、白ウサギは口元にうつつすらと笑みを浮かべる。

「実はね、あつちの世界に行ったらもう面倒くさくなっちゃって。適当にいた子を連れて来ちゃったんだよね」

「……………」

さすがの帽子屋も文句一つ言えず、絶句する。

「お前……………本気で言ってるのか？」

「失礼だな。私はいつだって真面目だよ？」

信じられないとばかりに白ウサギの方を見る帽子屋に白ウサギは笑う。

「大丈夫だよ。彼女にはちゃんとアリスになる資格があるし、この世界に受け入れられている。何しろ私が選んだアリスだ。前のようなことにはならないさ」

白ウサギはそう言って爽やかな笑みを作る。それを帽子屋は険しい顔でただ見つめる。

「その言葉……信じていいんだな？」

「もちろんだよ」

根拠となる理由はともかく帽子屋は何の迷いもなくそう言い切る白ウサギの言葉をもう信じるしかなかった。

## 第二章 奇怪なお茶会 その1（前書き）

ようやくお城に到着。11時間と30分の遅刻。貴方なら待っていられますか？ 私には無理です。

## 第二章 奇怪なお茶会 その1

「これがお城なの？」

私は目の前にあるそれを信じられない思いで見つめながら、誰にと  
いう訳でもなく、そう尋ねた。

「はい、これがアリスのお城。ハートの城です」

白ウサギはそう言い、立派でしょう？ と胸を張って言う。

確かにお城は想像以上に立派だった。まるで昔話に出てくるところか  
の国の王様が住んでいそうな城そのもので、もしかしたら一国の王  
だってこんなお城持っていないのではと思う程である。

高い城壁に囲まれ、赤を基調として作られたその外観は美しく、お  
そらくそこから『ハートの城』何ていう名前がつけられたのだろう。

「何だか……想像以上なんだけど……本当にこれが私の城なの？」

「そうだ。この城はアリスのためにアリスを守るために作られた城  
だ」

「守る……？」

帽子屋の言葉に不吉なものを感じとり、そちらの方を見ると帽子屋は無言で視線をそらした。

教える気は全くないらしい。あきらめて城へと向き直る。

「なあ、こんな所にいつまでも突っ立ってないでさっさと行こうぜ？」

チエシャがしびれを切らして、そう言うとき私の手をひく。するとそれを見た白ウサギが素早く、その手を払いのける。

「チエシャ猫。何、アリスに触ってるんだ？」

「やだな、白ウサギならやきもち？　そんなに器が小さいとアリスに嫌われちゃうよ？」

睨み合う2人。全く、これで何回目だろうか？　もう止める気にもなれず、2人を無視し、私は帽子屋に話しかけた。

「あの2人といると貴方がすっごくまともに見えてくるのよね」

帽子屋はその言葉に目を細める。

「それは光栄だな」

帽子屋はにやりと何だか少し馬鹿にしたような笑みを浮かべ、私を見る。

「だが、忘れるな？ 私は人からイカレた帽子屋と呼ばれる人間なんだ」

「イカレた帽子屋？ 何で？」

ぱっと見たところイカレてるようには見えない。

「じきにわかる」

帽子屋はそう言って、意味ありげに笑った。



外見でさえあれなのに城内はさらにすごかった。煌びやかに光るシヤンデリア。しみ一つない真っ赤な絨毯。美しい装飾品の数々。こんなの今まで一度だって見たことない。

「綺麗……」

思わずそつ呟くとそつでしよう、そつでしようと白ウサギが言う。

「何せ、アリスがいつ訪れてもいいように私達が整備していましたから」

「それはどうも……」

そう言われてもあまり実感がわかない。だいたい未だにどうして私  
がアリスなのかもよくわかってないし……

あまりにもすごい城内に目移りしているとチエシヤがそつと隣にや  
つてくる。

「じゃあ俺行くね」

耳元で囁かれたその一言に私は目を丸くする。

「行くってどこ行くの？」

思わずそう問い返すとチエシヤはちょっと困ったように笑った。

「このままアリスと一緒にお茶会に出るのもそれはそれで楽しそうだけど、そろそろご主人様のもとへ行かなきゃいけないんだよね」

「ご主人様？」

チエシヤの言葉に首を傾げていると白ウサギがそつと隣に来て言う。

「その猫は公爵夫人の飼い猫なんですよ」

飼い猫って……猫じゃないじゃん。

そんな疑問はともかくチエシヤはやっぱり変わらないにやにや顔で私の方を見る。

「ん、そうゆう訳だから残念だけどお別れ。またな、アリス」

そう言ってチェシヤはあっという間に廊下の向こうへ消えてしまった。

「本当に猫みたいな身のこなしね……」

感心していると背後から何だか妙な視線を感じる。嫌な気がして振り向けばそこには満面の笑みの白ウサギが立っていた。

「これで邪魔者はいなくなりましたね、アリス」

そう言って、何故か嬉しそうにやけている白ウサギ。何故だろう……非常に危ない気がする。

それは見事に的中し、白ウサギは突然両腕を上げると私に抱きつこうと飛びついてきた。寸前のところでそれを帽子屋が止める。

「お前まで邪魔するのか!? 帽子屋!？」

「うるさい！ お前がいると話がややこしくなる！ さっさとどこかに行け！」

「そう言って、お前も私がいないうちに私のアリスに手を出す気で……」

「だから、いつから私は貴方のアリスになったのよ……」

「最初からです！ 貴方が私を追いかけたその時から貴方は私の物に」

「貴方に真面目に聞いた私がバカだったわ……」

白ウサギと話しているとどうしてこう頭が痛くなってくるんだろう？ 痛む頭を抑えていると帽子屋が苛々した様子で白ウサギに詰め寄る。

「言っただろう……すでに3時は過ぎている。お茶会はとくに始まっているんだ。これ以上遅れればあのバカに何て言われるか……」

「あんなバカウサギが開いてるお茶会なんかアリスが出ることないんだよ」

白ウサギの目が光る。

「それとも実力行使で止めてみせようか？」

「ふざけるな。言っただろう。既にお茶会の時間は過ぎている。邪魔をするなら……」

な、何？ この物騒な雰囲気。こいつらもしかしていつもこんなことばっかしてるの！？

「ちょっと……ケンカは止めなさいよ」

「そうですね。アリス、もう少し帽子屋から離れて下さい。返り血が飛んでしまいます」

「ねえ……私の話、聞いてたの？」

「もちろんですよ！ 一言一句、貴方の言葉は聞き漏らしません」

「そのわりには全く私の話を聞いてないみたいなんだけど……」

白ウサギを説得するのは無理だと判断し帽子屋の方を見る。

「ねえ、貴方はこんなバカみたいことしないでしょ？　白ウサギと斬り合う、なんてことやらないよね？」

帽子屋は目を細めて私の方を一度見るとすぐに目をそらして言う。

「お前がそう言うなら……」

あ、何か帽子屋って愛想悪いけど意外といい人かもしれない。

「アリス、任せて下さい！　今すぐ帽子屋を始末してあげますから」

少なくとも話をまともに聞かないどこかのウサギよりはずっといい。

「もう、いい……。とりあえずそのお茶会とやらに行きましょう。」

えつと……確か約束の時間は3時よね？　今は何時？」

そう言うと白ウサギは胸ポケットから懐中時計を取り出し、すぐに教えてくれた。

「今、2時半です」

「え？　じゃあ、間に合うじゃない」

良かった。帽子屋があんまりにも言うから心配しちゃったじゃない。

「ああ、昼の3時にはな……」

「そうですね……昼の3時には確かに間に合いそうですね……」

「へっ？」

何だか嫌な気がしてきた。

「お茶会の時間は真夜中の3時だ。私達はすでに11時間と30分遅刻している」

11時間と30分？ 有り得ない。その遅刻、有り得ないでしょう？

「何で真夜中にお茶会なんかするのよ!？」

「あのバカウサギは年がら年中いつだって頭がおめでたいため、朝だろうが昼だろうが夜だろうが起きてるんですよ」

何て人だ……。

「ってことは私達もう11時間と30分もその人を待たせてるの!？」  
「大変じゃない!？」

もはや遅刻どころの騒ぎではない。そんなに待たされたら私だったら、今頃ぶちぎれてる。

「早くお茶会に行きましょう!」

その一言に何故か2人は嫌そうな顔をして私の方見てきた。



奇怪なお茶会      その2（前書き）

3月ウサギは一回しゃべりだすと止まらず、セニフが非常に読みづらくなってしまいました。読む方は大変だと思いますが、頑張って読んで下さい。

## 奇怪なお茶会 その2

真っ白なテーブルクロスに大きな大きなテーブル。そのテーブルに溢れんばかりに並べられたお茶菓子達。かわいいティーポットとティーカップが均等にテーブルに並び、まさにお茶会の雰囲気漂う会場。

ただ一つ気になることがあるとすればテーブルに男がまるで死んだのかのように突っ伏していることとその隣で盛大な笑い声を上げる男がいることだ。

どちらが3月ウサギかは聞くまでもなかった。

「ねえ、あれが3月ウサギよね？      あの笑ってるハイテンションの人の方」

「そっだ、あれが3月ウサギだ。気をつける。あまり関わらない方がいい」

帽子屋は渋い顔をしながらそう言い、笑う男を見る。

「ねえ、あのテーブルに突っ伏してるのは誰？」

「あれはネムリネズミですよ」

「ネズミさん？」

「ええ、バカ真面目な性格のため、3月ウサギに毎回お茶会の準備に付き合わされて一睡も出来ず、いつもああやってお茶会当日に寝込んでるんですよ」

だからネムリネズミ。おかしいでしょと言って笑う白ウサギ。

何だか初対面だがネムリネズミが哀れに思えてきた。

私が2人を遠目から見ていると、ふと3月ウサギが笑つのを止め、私達の方に気づいたのか視線をやる。

視線が合い。私は曖昧にお辞儀する。

「ど、どーも……」

3月ウサギは私の方をじっと見たかと思うと突然、大きな声を上げた。

「アリスじゃないか!?　アリス!　君という奴はその帽子屋の影響を受けて頭がイカれてしまったのかい?　それともその頭は元からかい?　まあ、このさいそんな小さなことはいいとしよう。私は心が広いからね。例え君が11時間とちよつと遅れようと……あ、今12時間になったね。君が12時間遅れようと私は平気だ。なにせ3月ウサギだからね。さあさあ座ってくれたまえ。いや、笑いが止まらないよ。君が新しいアリスか。よろしく、アリス!　そして誕生日おめでとう!」

ああ……どこから突つ込めばいいんだろう。一息で一気にしゃべられたもんだから全くもって話がわからない。

とりあえず立っている訳にもいかず、席に座る。すると帽子屋と白ウサギは両隣に来て座った。

「えつと……遅れたことは申し訳ないと思うけど……私と貴方は初対面だし、そんな約束した覚えもないし……って言うか別に今日は私の誕生日とかじゃないんだけど……」

「何を言ってるんだい?　アリスはお茶会に出るものだし、お茶会が真夜中であろうと昼だろうとそれは私の勝手だ。それに今日が君の誕生日でないとしても私がそう言ったのなら今日は君の誕生日だ」

「何でそうなるのよ……」

全く道理がわからない。

困惑する私をよそに帽子屋と白ウサギは隣で深々とため息をついていた。

「アリス、そのバカの話をもとに聞いてはいけませんよ。そいつの頭はいつだっておめでたいんですから」

「まともに相手にするな……聞きたいことだけをさっさと聞け」

「聞きたいこと？」

「そうだ。アリスにこの国について説明するのがそいつの役割だ」

「役割って……」

役割って何と口にするよりも前に3月ウサギがああと声を上げる。

「そうだな、そうだ。アリス！　君はいい質問をした！　そうだ、まず役割について説明しよう！」

「あ、どーも……」

まだ……質問はしてなかったんだけどな……。

ここまでできたらもう気にしたら負けなのかもしれない。

そう思い勝手に開き直って、3月ウサギの説明を聴くことにする。

「役割と言つのは呼び名と友にアリスが私達に与えたものだ」

「アリスが与えた？」

当然、私はそんなものを与えた記憶はない。と言つことは私以外にもアリスと呼ばれる少女がいるのだろうか？

「アリスって……」

「アリス！ いいところに目をつけたね！ ラズベリーよりブルーベリーの方が紅茶によく合う！」

「はあ？」

「そうだ、そうだ！ 君はチーズケーキが好きだろう！ さあ、どんどんお食べ！」

「えっ……や、そうじゃなくて……」

「チョコレートケーキ？ あんな甘いものは駄目だよ！ 紅茶の風味が消えてしまう！」

「え、だから……その……」

「紅茶のおかわりだね！ いくらでも飲みなさい！ 君のために用意したんだ」

駄目だ……完全に話を聴いてない……。

私がつくりと肩を落とすと白ウサギが心配そうな顔をする。

「大丈夫ですか、アリス？ あんな奴の話なんか聴いても無駄ですよ。それより私と2人つきりで甘いお茶会でもしませんか？」

駄目だ。3月ウサギは全く私の話を聴いてくれないし、隣にいるウサギは妄想の世界へと飛んでいる。

私は継るような思いで帽子屋を見た。

「アリスが与えたって……私以外にもアリスがいたの？」

その疑問に帽子屋は静かに私の方を見返す。

「3月ウサギが言っているアリスとは我々を作り出した少女のことだ」

「作り出したって……」

どついついことが尋ね返そうとした時、3月ウサギの凜とした声が響いた。



「アリスは我々にとって絶対的な存在だ。私達はアリスのために、彼女だけのために作り出された。そもそも我々自体、アリスの夢や想像から作り出された存在にすぎない。アリスがどういった経緯で我々を個として存在させたかは不明だが、我々は間違いなくアリスによってこの世界に作り出された。アリスは我々を作り、そして自分だけの国を作った。それがこの不思議の国だ」

そう言つて3月ウサギは笑う。白ウサギとはまた違つ、淡い赤の瞳が静かに私を見つめてきた。

奇怪なお茶会      その3 (前書き)

ついにアリスがきました。誰にだって我慢の限界はあるものですよ。

奇怪なお茶会 その3

「えっと……じゃあそのアリスさんがこの世界を作ったってこと？」

出されたチーズケーキをフォークで一口サイズに切りながら尋ねると3月ウサギはにっこりと笑って頷いた。

「そつゆつことになるね」

そつゆつことって何だか他人ごとみたい……

胡散臭さそつに3月ウサギの方を見るが彼はそんな視線を気ににもとめず、紅茶を優雅に口に運ぶ。

「ところでアリス、君は紅茶が好きかね？」

「まあ、たしなむ程度なら」

好きだと言つつもりはないが嫌いな訳でもない。出されれば飲むが飲まないとどうにかなるといっほどもない。

むしろ紅茶を好きだったのは私ではなく姉さんの方だ。

姉さんは紅茶をいれるのがうまかった。何でも完璧にこなすことができる姉さん。だから紅茶をいれる、それだけのことでもやはりそれは完璧だった。

学校から帰ってくると姉さんはよく庭に私を呼んで、お茶に誘った。

「美味しい？」

「うん」

姉さんが完璧にいれた紅茶がまずいはずがない。私がそう言っただけと姉さんは嬉しそうに微笑む。

「良かった。今日は新しい茶葉を買ってきたのよ」

「わざわざ私のためなんかに入れてくれなくてもいいのに……」

思わず本音が口から漏れる。あつと思った時には姉さんは神妙な顔で私の方を見ていた。

「もしかして……×××は私とお茶するのは嫌？」

姉さんの言葉に私は慌てて無邪気な笑顔をつくり、首を振る。

「違うよ。そうじゃなくてなんか私なんかにはもったいなと思って……」

すると姉さんは安心したように笑う。

「そんなことないわよ。だって貴方は私の大事な妹だもの」

大事な妹ね。私は何も言わず紅茶を一口飲む。甘いはずの紅茶の味が少しだけ苦く感じられた。

「アリス……」

名前を呼ばれてはっとする。慌てて、視線を声の方に向ければ帽子屋が私の方を訝しむように見ている。

「どうした？　大丈夫か？」

帽子屋はそつと私の顔を覗き込んでくる。どうやら心配してくれているようだ。

「あ、うん。大丈夫」

慌てて3月ウサギの方を見る。話の途中で考え事に浸ってしまったので気分を害してしまっただらうか？

「ああ、そうだね。ミルクティー、あれは紅茶の次にいい飲み物だ」

良かった。全く気にしてない。と言うか全く私の話を聞いてない。

3月ウサギとコミュニケーションをとるのは非常に難しい。

話を聞いてないと思ったら突然話に入ってくるし、かと思えばいきなり会話が飛ぶ。

なるほど。彼がみんなから避けられる理由がなんとなくわかる。

友達にはしたくないタイプだ……。一緒にいるだけすっごく疲れる。

「ミルクティーについてはどうでもいいんだけど……その、そろそろ私の話を聞いてくれない？」

「何かねアリス？ 何でも言ってくれたまえ」

何でも……。ね。そのわりには全く私の話を聞いてくれないんだけど……。何だか頭痛がしてきたな……。

痛みをこらえ、私は平静を装い3月ウサギに質問する。今度こそちゃんと聴いててくれるように祈りながら……。

「何で私、ここに連れて来られたの？ 早く家に帰りたいんだけど……。」

私にとって一番重要な質問。それに3月ウサギはあっさりと答える。

「それは難しいな」

3月ウサギは紅茶を飲みながら、まるで天気の話でもするような軽

さで続ける。

「君は自分でここに来た。ここに来るのは案外簡単だが、帰るのは容易ではない。案内人がいなければね」

「案内人？」

どこかで聞いたことがある気がする……

「いるだろうか？ 君の隣に」

3月ウサギはそう言って茶菓子を一口かじり、視線を私の隣へとやる。

嫌な予感を覚えつつ、私はチラリと隣に座っている男を見た。

にっこりと笑う白ウサギ。その笑顔が物凄くいらっときた。

「貴方……騙したでしょう……」



「騙すなんてとんでもない。私がアリスを騙す訳ないじゃないですか」

「騙したじゃない！ 最初の時に役割がどこのどこの言ってたけど帰そうと思えばいつでも帰せたって事でしょうー！」

「まあ」

白ウサギは悪びれもなくそう言って爽やかに笑う。ああ……その顔本当に殴りたい。今すぐ殴り飛ばしたい。

「でも帰す気なんて全然ありませんでしたから」

白ウサギはそう言って、私の手を握り、にこにこ嬉しそうに笑う。

「今も全く帰す気ないですよ」

もう我慢の限界だった。

気づいたら手が勝手にでていた。右手をぐっと握り、その拳を白ウサギの腹部のあたりに打ち込む。

「ぐはっ！！！？」

肉ののめり込む感触とともに白ウサギはつめき声をあげながら、何とも情けなく椅子から転げ落ちた。

「はあ……はあ……」

乱れた呼吸を整え、何事もなかったように椅子に座り直す。

帽子屋と3月ウサギはぼかんとした顔をし、呆然と私の方を見る。

「どうやら私がこんな行動をとったことが彼らには予想外だったらしい。」

「じんわりと手が痛い。ああ……どうせだったらやっぱり顔にしておけば良かった。そっちの方が同じ痛みでも爽快感があっただろうに……」

信じられないものでも見るかのような2人の視線が私に向けられる。

それに耐えきれず、私はやや不機嫌になりながら2人の方を見返す。

「何よ？　　これでも我慢した方でしょう？」

本当はあの澄ました顔を殴りとばしたかったのだが、さすがにそれではあの綺麗に整っている顔が駄目になると思い、我慢したのだ。

殴っておいて何だが、白ウサギには少し感謝してほしいぐらいである。

そんな私の考えをわかってかどうか、3月ウサギが豪快な笑い声を上げる。

「あはははっ、我慢した方？　　これが？　　さすがは白ウサギが連れてきたアリスだ。実に面白い、実に興味深い。いや、笑える。あの白ウサギがまさか殴られるなんて……あはははっ……！」

お腹を抱えて笑う、3月ウサギ。帽子屋の方を見れば、帽子屋もシルクハットで顔を隠しているものの肩を震わせて笑いかみ殺していた。

「何よ……そんなに笑わなくてもいいじゃない……」

何だか気恥ずかしい気分になり、私は顔を伏せ、やや冷めた紅茶を一口飲んだ。

奇怪なお茶会      その4（前書き）

3月ウサギは本当は眠りネズミの事が大好きなんです。大好きだからこそついついこんな事しちゃうんです。

## 奇怪なお茶会 その4

「その調子でそのバカも殴って、起こしてくれると助かるんだがな」

3月ウサギはここで始めて机に伏せて眠る男に視線をやった。

記憶違いでなければ、確か彼は眠りネズミと呼ばれていたはずだ。

特徴的に跳ねている、短めの金髪。顔はわからないがなかなかの身なりをしている。

「その人……貴方の代わりにお茶会の準備をしてくれたんじゃないの？」

確か、それで寝不足だと聞いたが……

その言葉に3月ウサギは目を細める。

「そうだがそのいかにも私のせいみたいな言い方は気に入らないな。確かに多少の準備はやらせたが何も休憩時間をやらなかった訳じゃない。そのバカが勝手に寝不足になったんだ」

そう言って3月ウサギはわざとらしくため息をつく。

そんな3月ウサギの態度を見て、帽子屋がそつと私にだけささやく。

「実際そこにいるバカは何もしていない。お茶会の準備は全てネズミがやったんだ」

「え？ そうなの？」

「ああ、しかもそのバカに真面目に付き合って十日十晩寝ずにな」

そりゃあ……誰だって眠くなるよ。

私は呆れて3月ウサギの方を見る。自分でお茶会を開いたくせに準備を他人に押し付けるなんて、とんでもない奴だ。

むしろその眠りネズミの努力を讃えてあげたいと思うのは私だけなのか……

そんな事を考えていると、いつの間にか3月ウサギが勝手に話を1

人で進めていた。

「そうか、そうか。アリス、やはり君もそう思うか」

「え？ 何も言っていないんだけど……」

「そうだな、客人を前にして堂々と居眠りはいけないな。だいたい眠るなんて時間ももつたいない。そんな時間があるならもっと有効活用するべきだ。全くもってこいつはなっていない」

3月ウサギはゆっくりと立ち上がるとアリスに、にこやかに笑いかける。

「やはり、こつゆつ奴にはお仕置きが必要だな」

そう言って3月ウサギは手をぱんつと一回叩く。すると手元がぼおつと光り出し、たちまちそれはあるものへと変化した。

「ちよつと!?!? 貴方、何構えてるのよ!?!?」



「何って……見てわからないかい？」

3月ウサギはそう言って可笑しそうに笑う。その両手には大きなライフルが一丁、握られていた。しかもあるところかその銃口はぴつたりと眠りネズミに向けられている。

当然ながら、そんなものは人に向けていいものではないし、そんな至近距離で撃つていいものでもない。

「あ、危ない！　そんな距離で撃つたらその人、確実に死んじやうじゃない！」

「あはははっ、そうだね。おそらく頭がこっぱみじんになるだろうね」

そんなグロテスクな光景は嫌だ！　せっかくのお茶会だがもはやお茶会どころの騒ぎではない。

私は必死に3月ウサギに説得を試みる。

「や、止めて！　落ち着いて！　お願いだからそんなこと止めて！」

「私のお茶会の最中に眠るとはいい度胸だ。2度とその顔を見せられないようにしてやる」

「だめ、だめっ！ そんなことしちゃだめ！ 止めて！ そんなの見たくない！」

「やはり、そうだねアリス！ 君はよくお茶会というものをわかってる。お茶会なんてこんなものさ。気にしなければ何てことない。例え、テーブルクロスがどんなに真っ赤に染まっていようといくら死体が床に転がっていようと気にしなればそれまでさ。何の問題もない」

「問題大有りでしょう！！」

テーブルクロスが真っ赤に染まるのも床に死体が転がるのも絶対に嫌だ！

私は半分泣きながら3月ウサギに縋るように言う。

「お願いだからそんなグロテスクなお茶会にしないで！」

「そうだねアリス。この後は一緒にアップルパイでも食べようか？  
あははっ、全く、笑いが止まらないよ。これだからお茶会はやめられない」

「お願いだから止めて!」

忘れてはいけない。相手は誰もが嫌がる3月ウサギだ。こちらの話などまともに聞くはずがない。

もう駄目だ……。

3月ウサギは嬉しそうにライフルの引き金に指をかける。耐えられず私は耳を塞ぎ、目をきつく閉じる。

「何とかしなさいよ! 帽子屋!」

無意識に口から出た私の一言に帽子屋は笑って答える。

「大丈夫だ、アリス」

少し低い、どこかぶつきらぼつな声。耳を塞いでいるはずなのにその声は鮮明に私の耳に届く。

「眠りネズミは殺気に敏感だ。万が一当たっても頭はそうそう吹っ飛ばないだろう。まあ、体の一部くらいなら飛ぶかもしれないがな」

「そのどこが大丈夫なのよ!!」

全然大丈夫じゃない。

しかしあながち帽子屋の言ったことは間違いではなかった。

まさに引き金が引かれるその瞬間、眠りこんでいたはずの男の体がぴくりと反応し、そのまま一気に後ろに飛び退いた。

紙一重でライフルから発射された銃弾は眠りネズミがついさっきまで伏せていた場所に打ち込まれ、テーブルの一部分に大きな大きな穴が空いた。

間一髪、銃弾から逃れた眠りネズミは床へと転がり、顔をひきつけて3月ウサギの方を見上げる。

なるほど、顔からして真面目そうな人だ。銀色の細身の眼鏡にきりつとした瞳。同級にいた優等生によく似ている。

眠りネズミを見て、3月ウサギはわずかに眉をひそめる。

「ちっ……」

おそらく本心からの舌打ち。こちらまではっきりと聞こえた。

「な、な、なあーっ！！　3月ウサギ！　貴様という奴はまた私を撃ち殺そうとしたな！！」

眠りネズミは顔を真っ赤にさせてそう怒鳴る。それに3月ウサギは悪びれもなく答える。

「あはははっ、本当に君って奴はどうしていつもいつもいいところで起きちゃうんだい？　あともう少し、そのままできてくれたら痛みも感じずに永眠できたのに」

「冗談じゃない！　ライフルなんかで撃ち殺されたら後味最悪じゃないか！」

「安心しろ。顔どころか頭までぐちゃぐちゃに吹っ飛ぶから後味どころの騒ぎではないよ」

「よけいにたちが悪いじゃないか!！」

眠りネズミはそう言ってきつと3月ウサギを睨む。しかし目はすでに涙目で全く威圧感がない。

それに比べ3月ウサギは相変わらずの笑顔を浮かべ、何とも余裕そうに見える。

こんな状況であれだが、私は学校にいたいじめられっ子といじめっ子を思い出した。

奇怪なお茶会      その5（前書き）

三月ウサギと眠りネズミは本当はとっても仲がいいんです。本当です。

「だいたい客人の目の前で寝るなんて、主催者の私の立場がないだろうが」

「そ、それは……」

眠りネズミは困ったような顔をし、帽子屋の方に救いを求めるような視線を投げかける。

ところが帽子屋ときたらその視線に答えるどころか視線をわざとずらし、無視して紅茶を飲み始める。案外、薄情な奴だ。

そんなあからさまな態度をしては、いくらなんでも眠りネズミがかわいそうだ……

私はちらりと責めるような視線を帽子屋にやる。帽子屋はわざとらしく咳払いして私の方を見る。

よほど彼らに関わりたくないのだろう。その目が無言で勘弁してくれと訴えかけている。



ふと眠りネズミが私の方を見て、不思議そうな顔をする。

「見たことない顔だな？ 君が……三月ウサギの特別な客人かい？」

特別な客人……この扱いでそうなのだろうか？

「彼女は新しいアリスだ」

三月ウサギはそう言って私に笑いかける。

「私だけでなく我々にとって特別な客人だよ」

三月ウサギにそう言われ、眠りネズミは私の方をしげしげと見る。

始めて視線が合い、とりあえず小さく会釈する。眠りネズミは私の方を見つめたままゆっくりと歩み寄ってきた。

「君が……新しいアリスか。そうか……アリスが来ていたのなら確かに寝てる場合じゃなかったな」

眠りネズミは私の席まで来ると少し困ったように笑い、自らの手を差し出す。

「始めまして、アリス」

眠りネズミが差し出したその手を見て、私は強い感動を覚えた。

こんなまともな挨拶ができる人がこの世界にいるなんて……。こんなまともな挨拶、ひよっとしたらこの世界に来て始めてかもしれない。

やっぱりこんな世界でもまともな人はまともなのね。

私は笑顔で眠りネズミの手をとろうと手を伸ばす。

手が触れかけたその瞬間、がんと鼓膜が痛くなるほどの大きな銃音がする。私は驚き、差し出しかけた手を引っ込める。

驚いたのは私だけではなく、眠りネズミもで、目を丸くし、銃弾が発射されたと思われる方向を見る。

そこにはライフルを構えた三月ウサギが立っていた。

「な、何で……」

「眠りネズミ。君という奴は何をしようとしているんだ？」

「何って……私はただ挨拶を……」

「私より先にアリスに触れようとはいい度胸だな」

あきらかな誤解だ。どう見ても眠りネズミにはそんな気はない。おそらく本当にただ挨拶をしようとしただけだったのだろう。しかし相手が悪かった。

なにせ相手はあの三月ウサギである。

三月ウサギは爽やかな笑顔を浮かべ、ライフルの銃口を眠りネズミに向ける。

「や、止める！　三月ウサギ！」

「もちろん、安心してくれ。苦しまないように一発で仕留めてやる。あいにく私には人をいたぶって楽しむ趣味はないからね。私はとても優しい人間なんだよ」

「どこが!?!」

思わずそう聞き返さずにはいられない。

このどこが優しいと言っのだろうか？

危ないの間違いだろう……

「くそっ……」

眠りネズミは三月ウサギを必死に睨みつける。無論、相手がそんなもので怯む訳がない。

それを見て、ついに眠りネズミが行動に出た。

やられるならばやられる前にやっちまえ。

その言葉に従い、眠りネズミは懐からナイフを取り出すとそれを三月ウサギに向かって投げた。

すごい。思わず、その華麗なナイフ捌きに目を奪われる。

サーカスのナイフ投げぐらいなら一度くらい見たことがあったが、それだってこれほど鮮やかではなかった。

ナイフは真つすぐ、三月ウサギへと飛んでいく。

しかし刺さるその一歩手前で、三月ウサギは手に持っていたライフルを振って、それを払いのける。

ライフルを振るとは何て命知らずな奴だ。一歩間違えれば死にかけるかもしれないのに。

三月ウサギはにやりと意地の悪い笑みを浮かべ、眠りネズミに再び銃口を向ける。

「私に反撃するとは良い度胸だな、眠りネズミ。君がそのつもりなら私も本気で相手してやろう」

その言葉に眠りネズミは脅えたように後退る。

もはや勝負をする前から勝敗は目に見えている。

「帽子屋！　止めさせて！　このままじゃ、眠りネズミが殺されちゃう！」

「大丈夫だ、アリス。ああ見えて、あいつらは仲がいい。本気で殺しあつたりはしないさ」

三月ウサギはあっさりと引き金を引き、眠りネズミに向かって発砲する。慌てて、それを眠りネズミはよける。

「……………」

「仲がいいはずなんだがな……………」

帽子屋の嘘つき！

どう見たって三月ウサギは本気だ。

「止せ！　止める！　三月ウサギ、止めるんだ！！」

「何？　紅茶に砂糖を入れたいだと！？　このバカが！！  
私はストレート派だ！」

誰もそんな話はしていない。

そうこうしているうちに三月ウサギは眠りネズミに向かって2発目を発砲する。

これにはたまらず、眠りネズミは三月ウサギに背を向けて逃げ出した。

それを三月ウサギは素早く追いかける。

「お茶会の最中にどこに行くんだ！　眠りネズミ！」

「ふざけるな！　これのどこがお茶会なんだ！！」

確かに。少なくともこれは私の知っているお茶会とは全然違つ。

お茶会とは客人をもてなし、作法にのっとり優雅にお茶を楽しむものではなかったのか？

慌てて部屋から飛び出していく眠りネズミとそれを追いかけているライフルを発砲しまくる三月ウサギを見て、私は大きなため息をつく。

どうやらお茶会というものの認識を改めなければいけないようだ。



奇怪なお茶会

その6 (前書き)

遂にあの人が復活。何度殴られたってめげません。かなりのポジティブ思考ですから。明るいいいことです。

奇怪なお茶会 その6

二人が部屋から出て行くとお茶会の会場は一気に静かになった。

寂しいほどの静けさ。帽子屋は無言で紅茶を飲み、私も何も言わずに紅茶を飲む。

主催者のいないお茶会。こんなお茶会、本当あっていいのだろうか？

「帽子屋……」

「何だ？」

「私、全く現状を説明されていないんだけど」

確か説明するのが三月ウサギの役目だったのではなかったのか？

私の言葉に帽子屋はため息をつき、そうだなと同意した。

「あの三月ウサギの説明なんか最初からあてにするもんじゃない」

帽子屋は疲れたような表情をし、三月ウサギ達が出て行った扉の方を見る。

「貴方って本当に三月ウサギが苦手なのね……」

私の言葉に帽子屋はやや苦々しげにつぶやく。

「……あのテンションに俺はついていけないんだ」

なるほど。確かに帽子屋はそう言ったものが苦手そうだ。きっと彼はみんなで騒いだりするよりも一人で家にいたいタイプなのだろう。

「そんな言い方はないんじゃないか、帽子屋。三月ウサギは君の親友だろう？」

懐かしい声とともに床に倒れていたはずの男が立ち上がる。

「白ウサギ……まだ生きてたんだ……」

しばらく床に倒れていたから完全にその存在を忘れていた。

って言うかもうずっと寝ていればいいと思う。

「もちろんです！ あれぐらい全然平気ですよ。ほらほらそんな心配そうな顔しないで下さい」

ごめん。それ、たぶん心配そうな顔じゃなくてもっと強くやれば良かったって後悔している顔。

誰も心配なんかこれっぽっちもしていない。

「アリス、私がいなくて寂しかったですか？ 寂しかったでしょう？　そうですよね心配で心配でたまらなかったですよ。もう大丈夫ですよ、貴方の白ウサギが帰ってきましたよ！」

誰が貴方の白ウサギだ。誰も待つてなかったし、全く嬉しくもない。

「もう一回殴りたいの？　今度は顔にする？」

脅すつもりでそう言うところとか白ウサギは嬉しそうな顔をす

る。

「どうぞ、どうぞ！　アリスになら私は何をされても平気ですよ。さあ、好きなだけ殴って下さい！　貴方のどんな愛でも受け止めてみせますよ」

この、マゾヒスト……。

満面の笑みを浮かべて、そう言う白ウサギ。それが色んな意味ですごく怖い。

うん……？

先ほどの白ウサギの言葉がよぎる。

待つて？　親友つて？　誰と誰が？

「帽子屋って三月ウサギと親友だったの？」

とてもそうには見えなかった。

私がそう尋ねると帽子屋はやや嫌そうな顔をしつつ答える。

「……親友と言つほどのものではない」

嫌そうだが、はっきりとは否定しない。そんな帽子屋に白ウサギがからかうように言う。

「あれ？ 親友でしょう？ だって、三月ウサギの名前知ってるじゃないですか？」

「あれは勝手にあいつが名乗っただけで……」

そう言つて渋い顔をする帽子屋に白ウサギは笑いながら言う。

「でも、呼んでいいと言われたんでしょ？」

「……」

帽子屋は黙り込む。その顔がどこか暗いように見えるのは気のせいだろうか？

「名前って……呼び名じゃなくて本名ってこと？」

「ああ、言ってなかったな。我々は普段呼び名で呼び合うが本名がない訳ではない。呼び名があるからあまり名前では呼ばないが、公爵夫人なんかはよく公爵を名前で呼んでいる」

「公爵？　このお城に公爵様がいるの！？」

「呼び名が公爵なだけだ。まあ、それそうおうの地位もあるがな」

驚く私をよそに帽子屋は何とも気怠そうに言う。

「チエシヤ猫と別れる時に言っただろう？　あいつは公爵夫人の猫だと」

つまり、その公爵夫人とはチエシヤ猫の飼い主ということになるのか。まあ、チエシヤ猫は猫ではないけど……。

「我々にとって自分の名前を教える行為は相手に命を差し出すようなものだ。名前を教えた相手に刃を向けるのはこの世界の最大の禁忌で、破ればどんな制裁が待っているかわからない。だから我々は普段呼び名で呼び合い、自分の名前を名乗ったりはしない」

何だか変わった決まりだ。本名を教えちゃいけないなんて不便だらうに。

「ってことは白ウサギは帽子屋の名前を知らないってことなの？」

仲が常に悪そうな二人だ。お互い、命を差し出すような関係だとはとてもじゃないが思えない。

「知ってますよ」

「ええっ!?!」

完全に予想外だ。まさかそれほど仲がいいとは……。

「あ、違いますよ」

私の考えを読み取ったかのように白ウサギがすぐに否定する。

「名前は知ってますが名乗られたことはありません」



「それって何か違うの？」

どちらも同じに思える。

「名前を名乗るという行動に意味があるんだ。相手に名前を名乗らなければ相手を名前で呼ぶ権利は貰えない」

「何だかひどく複雑なものだね……」

思わず言っちゃったら最後、名前を教えた相手に刃を向けられない。私みたいな刃を向ける気もない奴には大したことではないが、何かと物騒な彼らにとっては重大なことなのだろう。

それにしても何故呼び名なんてものを最初のアリスは作ったのだろうか？

はっきり言って呼び名ってやつはすっごく呼びにくい。

白ウサギとか帽子屋とか……アリスもまた何でそんなよくわからないものばかりを呼び名として彼らに与えたのだろうか？

「あ、アリス！ 私なら喜んでいつでもアリスに名前を教えますよ？ 本名だろうと何だろうと貴方に喜んで捧げます！」

「気持ち悪いからいい。知りたくない」

「またまた、そんなこと言って、本当は知りたくてしょうがないんでしょう？」

本当に知りたくない。やはりもう一度殴り飛ばすべきか？

私は拳を握りしめながら、次こそは顔面を殴ってやろうと心に決めた。

奇怪なお茶会      その7（前書き）

どんどん寂しくなるお茶会の会場。そろそろ第二章も終わりです。

奇怪なお茶会 その7

「ぐはっ!..!」

鈍い音とともに再び白ウサギが倒れる。

今度は宣言通りに容赦なく顔を狙った。顔面ストレートである。

二回目となれば慣れたもので痛む手もあまり気にならなくなったし、今度は帽子屋も何食わぬ顔で紅茶を飲んでいる。

しかしやはりと言うべきか。殴られている方はそうではないようで、白ウサギは顔面を抑えながら床に倒れこみ、痛みのあまりからか、ゴロゴロと床を転がっている。

ちょっと強くやりすぎたかな? でも白ウサギなら大丈夫だよね。

何の根拠もないのだが、叩いても殴っても崖から落としたとしても白ウサギが死にそうには思えない。

「アリス」

「何？」

「前々から思っていたがお前は……何でそんなにケンカ慣れしてるんだ？」

ケンカ慣れ？

きょとんとしてから帽子屋の方を見る。まずい、激しく誤解されている。

「慣れてない！　慣れてないから！」

「いや、しかし……」

帽子屋はじつと握られた私の拳を見る。その目が何だか、すっごく痛い。

「違う、ケンカとかそんなこと本当にやってないから」

これでも元の世界の学校ではずっと大人しい子を演じていたのだ。

表立ってはいこうやって人を殴ることはおろか、ケンカしたことさえなかった。

まあ、だからと言って、完全にそういう場面がなかった訳ではないのだが……

「そうですよ。アリスは私だけを殴ってくれるんです！ 貴方は殴ってなんか貰えませんか？」

そう言って、白ウサギは立ち上がり、私と帽子屋の間に入って入る。

やはり少し強くやりすぎたみたいだ。鼻血が出ている。

「ちょっと白ウサギは黙ってて……って言うか早く鼻血をふきなさいよー！」

白ウサギが入ると大抵の話がややこしくなる。

しかも鼻血を流しながらも私を見て、にこにここと笑うものだから、はつきり言ってかなり怖い。

正直、近づかないでほしい……

「心配してくれるんですか？ やっぱり、アリスは優しいですね」

「そうじゃなくて……ああ、もうどうでもいいから早く鼻血をふいて！」

「アリス……そんなに私のことが心配だなんて……大丈夫ですよこれぐらい。鼻血くらい全然平気ですから。前なんか内臓がちょっとはみ出ちゃったこととかありましたし」

内臓がはみ出たって……ちょっとだろうが何だろうが危ないでしょう！？」

しかも鼻血をふけて言ってるのに全然ふく気ないし……

「ああ、もういい。どうせ気にするだけ、無駄よね。貴方から鼻血がどれだけ出ようと内臓が出ようと私には関係ないし」

「そんなこと言っていていいんですか？ 私が死んだら元の世界には帰れませんよ？」

そうだった……。

「そうよ！ 早く私を元の世界に返してよ！」

自慢じゃないが、もう十分この物騒な世界を楽しんだ。何度も死にかけてし、グロテスクな光景を見せられそうにもなったし……とにかくもう私を元の世界に戻して欲しい。

「帰しなさいよ！ 私は早く帰りたいの！」

「えー、まだ来たばかりじゃないですか」

「もう十分だから！ これ以上何かある前に私は帰りたいの！」

そう怒鳴って白ウサギに詰め寄るが白ウサギは全く動じず、まるで聞き分けのない子供を諭すように私をなだめる。

「落ち着いて下さいよ、アリス。そんなに怒鳴ってたって帰しませんから」

「なっ……」



言葉に詰まる私に白ウサギは笑顔で言う。

「言ったでしょう？　アリスの役割を果たさなきゃ帰れないって」

確かに前に帰りたいたった時、同じような事を彼は言っていた。

「アリスの役割って何なのよ……」

苛々とそう尋ねると僅かな沈黙が流れる。

あれ？　何かいけないことでも聞いたのかな？

そう思っていると、白ウサギがゆっくりと口を開いた。

「それはもちろん女王を……」

女王？　その言葉に目を丸くしたその時、だんつとテーブルを強く叩く音が部屋に響く。

静まり返った室内。音がした方を恐る恐る見るとそこには立ち上つて、白ウサギを睨みつけている帽子屋の姿があった。

だいが怒っているようだ。その目は鋭く、先程までとは雰囲気は全く違う。

「帽子屋……?」

急にどうしたというのだろうか? 驚いて帽子屋を見ると帽子屋は何も言わずに扉に歩み寄り、部屋から出て行った。

「ちょっと……」

慌ててその背を追いかけようとしたら白ウサギに肩を捕まれ、引き止められる。

「止めておいた方がいいですよ。今の彼に近づいたらアリスとはいえ、何をするかわかりませんから」

「なっ……何で?」

何か気をさわるようなことをしてしまったのだろうか？

心配になる私に白ウサギは安心させるように笑う。

「貴方は悪くありませんよ。あの女の話が出たので不機嫌になったんですよ」

「あの女？」

「我らの女王様のことですよ。この城にはもういませんが昔ここに住んでいたんです」

「女王様が？」

「ええ、この不思議の国を統べる、支配者。彼女の命令には私達としてもあまり逆らいたくはありませんね」

「そうなの？」

驚きだ。まだこの人達とは出会ったばかりだが、どう考えたって誰かの命令に従うような人達には見えない。

「まあ、首をはねられるのは嫌ですから」

「はい？」

首をはねられる？

「彼女は命令に従わない奴の首をすぐにはねようとするんです。これがまた、外見に似合わず、なかなか強くて……」

「ま、待って！　何なのその人！？」

そんな女王様、聞いた事がない。

「え？　何って、女王ですよ？」

それはわかったから！　聞きたいのはそこじゃないから！

「そんな女王様でいいの！？」

仮にも一国を治める主だ。そんな暴君でこの国は本当に大丈夫なの

だろうか？

「いって……まあ、それが彼女の役割ですからしょうがないですけどね」

「役割？」

「はい、アリスにとって不要なものを斬り捨てるのが彼女の役目。それに女王とは言っても、それだって呼び名にすぎませんから。だから本当にこの国を治めてる訳ではないんですよ？」

「治めてないって……でも女王様なんでしょ？　だったら普通は

……」

そう言いかけた私の手を白ウサギは無言でとり、その場に跪く。

驚いて固まる私をよそに白ウサギはその手のこつにそっとキスをする。

「……っ！！？」

無意識に顔が赤くなり、その場で硬直する。

「女王なんて所詮、この国では大した価値もありませんよ。この国の本当の支配者はアリスだけですから」

「何して……」

「アリス……私達にもこの国にもアリスこそが必要なんです」

何も言わずに私は白ウサギを静かに見つめる。いつもみたいに皮肉の一つでも言えば良かったのに私は結局何も言えなかった。

何故かはわかっている。

そう私に告げた白ウサギの顔はいつものあのどこか胡散臭さそうな笑顔とは違い、ひどく悲しげなものに見えた。

奇怪なお茶会      その8（前書き）

まさかのミスで直す前の本編を掲載してしまいました。読んでしまった方々はさぞ意味不明でしたでしょう。本当に申し訳ありません。

「白ウサギ……」

「はい？」

「だから……鼻血が出てるって……」

本来ならここはもっと気の利いたセニフを言うべきだろう。しかしもう限界だった。

白ウサギが真面目に話していたその時も鼻血は流れ続け、鼻から顎にかけて一本の赤い線が出来ている。

言わなくてもわかるだろうがその姿はなんとも滑稽で、せっかくのムードも何もかもぶち壊した。

「恐いから、いい加減にふきなさいよ！」

「アリス……やっぱり、何て貴方は優しいんでしょう！ さすがは私のアリスです！」



「だから違っ……もういい！　私がふく！」

テーブルの上に置かれていたナプキンを手にとり、私は有無を言わず、白ウサギの顔にナプキンを押し当てる。

白ウサギがもごもごと何かを言っている気がするが、気にしない。強引にごしごしとナプキンで顔をこする。

「もがつ……ふがつ、ふががつ！？」

全く……手がかかる子供じゃないんだから、これぐらいちゃんと自分でやって貰いたい。

ある程度ふき取り終えてから、私はナプキンを白ウサギに押し付ける。

「もう、後は自分でやりなさいよ。全く、何で私がこんなことしなきゃいけないの……」

責めるように白ウサギに視線をやるが、そんなことを気にするような奴ではない。

にまにまとしたむかつく笑みを浮かべている。

何だか……無性に腹がたってきた。

「だいたい……アリスじゃないって何度言えばわかるのよ……」

今さら言っても仕方ないとは思いつつも言わずにいられない。

「私の名前は……」

「あ、そう言えばアリス。一ついい忘れてました」

「何よ……」

改まって今さら何だと言っのたろう。僅かに不安を感じつつ、白ウサギへと視線をやる。

「簡単に名前を名乗るもんじゃありませんよ」

「何よ……あつ、名前を名乗った相手には刃をむけちゃいけないってやつのことを気にしてるの？ でも、私は少なくとも貴方に刃を向けるつもりはないし……」

いくら白ウサギが変態で気持ち悪くてウザい奴だからと言ってもさすがに殺そうとまでは思わない。

もともと私は剣や銃の扱いなど全く知らないし、例え刃を向けたとしてもあっさり白ウサギに返り討ちにされてしまうのがおちだろ  
うが。

「そうじゃなくて、この世界で名乗ってしまうと貴方は元の世界に帰れなくなってしまうんです」

はい？ 帰れなくなる？

目を見開き、その場に固まる私を見ながら白ウサギはにこにここと笑  
う。

「あれ？ どうしました、アリス？」

「JG……」

「うん？」

「このバカー！！」

「ぐはっ！？」

本日二回目。顔面ど真ん中をまたもや容赦なく殴り飛ばした。

二回目だからか白ウサギももう倒れたりもしなかったが痛そうに顔を歪め、鼻を押さえている。

見れば、せつかく止まりかけていた鼻血が再び流れ出していた。

「……………っ、何するんですか、アリス？」

「バカウサギ！ そんな大事な事何で早く言わないの！？」

そう言って白ウサギを怒鳴りつけると白ウサギは悪びれもなく平然と答える。

「だって聞かれましたし」

だからってそんな大事な事を今さら言うな！

そう言う事は最初のうちに話して貰いたい。幸いにもまだ本名を名乗ってはいないが、そうとも知らずに何度本名を言いかけたことだろう。

もしも言っていたらと思うと……ぞつとする。

「何が案内人よ……全く役にたたないじゃない……」

「そう怒らないで下さいよ。そうだ。これを期に私に本名を名乗ってここに永住する……というのはどうでしょうか？」

「絶対に嫌！」

断固拒否する。

即答した私に白ウサギはええーとわざとらしく叫び、詰め寄って来

る。

「いいじゃないですか？ 絶対に楽しいですよ？」

「こんな危なくて物騒な世界、絶対に嫌！」

「そう言わずに。意外とこの危ない感じが癖になるかもしれないよ。」

「なるわけないでしょう！」

むしろなってしまうたら人間として色々と終わりだと思っ。

「何が気に入らないんですか？ 危ないっていたってたまに銃弾が飛んできたり、争いに巻き込まれたりするだけですよ？ 大丈夫ですよ。多少の切り傷やすり傷はできるかもしれないませんが致命傷だけは私が絶対に負わせませんから」

そう言って白ウサギは自信満々に自らの胸を叩く。

白ウサギには悪いがその説明では全く安心感が持てない。むしろ不

安が上がる気がするのは何故だろう？

だいたい来てそうそうに銃弾が飛んできたり、いきなり撃ち殺されそうになったりしたのに、このどこがたまにだと言っただろうか？

「もうこの世界のことはどうでもいいから私を平穏で普通の世界に早く帰して……」

「平穏と普通なんて退屈なだけですよ？」

「そうね……私もここに来る前まではそう思っていたけど、この状況になってそのありがたみがよくわかったわ」

こんな物騒な世界で1日だって生きていける自信はない。学校の体育はまずまずだったが銃や剣なんかは一度だって持ったことはないし、争いなんかに巻き込まれればそれだけできつと足がすくみ、まともに動けず、どうすることもできないだろう。

かと言って自称私の用心棒の白髪の男を頼ろうにもいまいち信用できないし、変態だし、恐いし、話は聴かないしで頼りがいが全くない。

「アリス、そんな事言わないで下さいよ。ほら慣れですよ、慣れ。そのうちすぐに慣れちゃいますよ」

「慣れたくない。貴方みたいな非常識な人間とは違って私はどこにでもいる、何の変哲もない、非力な女の子なの」

「非力ねえ……私の顔を容赦なく二回も殴って、それで非力ですか？」

「殴りたいの？」

「もう殴られていますよ」

そう言っただけで白ウサギは楽しそうに笑う。前々から思っていたけどこの人、私の前では本当に笑ってばかりだ。いったい何がそんなに楽しいのだろうか？

「何の変哲もない普通の子と貴方は自分の事を言いましたが、はっきり言って、そんな子は私を殴り飛ばしたりはしませんよ」

いつもにまして、優しい笑みを浮かべながら白ウサギは言う。



「貴方は特別ですよ……アリス」

特別？ 私が？ 私なんか特別？

笑い話もいいところだ。私なんか特別なはずがない。私はどこにでもいる、何の変哲もない女の子。それだけだ。

そうはわかっていても何故だろう？ 白ウサギにそう言われた時、何故だか嬉しく感じている自分がいた。

特別になりたい。そう思ったことなんて……一度もないのに……

「白ウサギ……」

「何ですか、アリス？」

「鼻血が垂れてきてる……あといい加減に手を離して」

気づいたらもう白ウサギに私の手は握られていた。

いったいいつの間に握られていたのだろうか？ 自分の手を見ながら首を傾げていると白ウサギは爽やかな笑顔を浮かべて、嫌ですと答えた。

「嫌ってどういう事よ！？ いい加減、離さない！」

「嫌なものは嫌です。何で私が離さなきゃいけないんですか？」

「正直言って、邪魔！ だいたい手を握る必要なんかどこにもないでしょうが!？」

「わかりました。じゃあ、離しますからもつと良いことしましょう？ せつかく二人きりなんですし、ねえ？」

笑顔でそう言い、じりじりと顔を近づける白ウサギ。思わず後退りかけると握られ手を引かれ、引き戻される。

まずい……目がマジだ……。さあと顔から血の気がひく。

こうなったら、白ウサギはもうただの変態でしかない。

「ち、近寄らないでえ!!！」

「アリス〜!!！」

勢いよく手を振り払い、私は素早く身を翻すと全速力で逃げ出した。

### 第三章 迷子の侯爵様 その1（前書き）

ようやく第二章。長かった……。タイトルから誰が出てくるかわかりますね。

奇怪なお茶会その8の訂正版をお読みになっていない方はお手数ですがそちらをお読みになってから本編をお読み下さい。

### 第三章 迷子の侯爵様 その1

鼻をくすぐる甘い香り。暖かに降り注ぐ日差し。チエシヤ猫は城の庭に位置するそこへ来ると足をとめ、浮かべていた笑みをさらに深める。

かつてある男がたった一人の女性に送ったその庭は今もなお美しく、庭に植えられた色とりどりの花々が佳麗に咲き乱れている。

その庭の中央のもっともよいところにテーブルと椅子が置かれており、そこからは花々を一望する事ができた。

そしてそこにいつもどおり彼女はいた。

「どこに行っていたのよ、チエシヤ猫」

チエシヤ猫はにんまりとした笑みを浮かべたまま、ゆっくりと彼女の元へと歩み寄る。

「どこって色んな所になかな？ 森にも行っただし、芋虫の所やカササギの所にも行っただけ？」

チエシヤ猫の曖昧な答えに彼女は僅かに眉をつり上げる。

「怒らないでよ。猫は気ままに自由な生き物なんだ」

「貴方は普通の猫じゃないの。貴方はチエシヤ猫。私の飼い猫だつて事をもっと自覚しなさいよ」

「何言つてんのさ。これでも誠心誠意、ご主人様に仕えているつもりだぜ？」

「そう？　　なら、もう少し私の言つことを素直に聞いたらどうなの？」

「猫は命令されるのが嫌いなんだ。例え大好きなご主人様の言つことだとしてもね」

そう言つてチエシヤ猫はそつと膝をおると、彼女に甘えるようにすり寄る。

彼女は不機嫌そうな顔をしつつもそれを無視したりせず、そつと手を伸ばし、優しくチエシヤ猫の髪をすいてやる。

「そう言えばアリスに会ってきたんだ」

「アリス？　もう新しいのがやってきたの？　前のが来てからまだ少ししかたってないわよ？」

「まあね。まあ、今度のアリスは普通のアリスじゃないから当たり前と言えばそうなんだけど」

「普通のアリスじゃない？」

「うん。白ウサギが勝手にあっちの世界から連れて来ちゃったんだ」

呑気な声でそう言うチェシャ猫に対し、彼女は驚いたように目を見開き、手を止める。

「連れてきた？　アリスを勝手に連れて来ちゃったの!？」

「うん。白ウサギはわがままだから自分で選んだアリスじゃなきゃ、満足できなかったんだよ」

平然とまるで他人事のようにチェシヤ猫はそう言い、笑う。

「いいの？」

「何が？」

「何がって……住人達にそうゆう勝手な行動をとらせないよう監視するのが貴方の役目じゃない」

呆れたようにそう言う彼女にチェシヤ猫は笑顔で答える。

「うん、いいんじゃない？ 別に連れてこようが何しようがこの国にアリスがいればいい話だし……それに」

「それに……？」

「あのアリス、可愛いし」

「はあ？」



チエシヤ猫はにやりとし、啞然とする彼女を見る。

「今度のアリスは可愛いんだよ。さすがは白ウサギだよな。あんな可愛い子を連れて来るだなんて」

「……………」

「ああゆう子なら俺も大賛成。アリスはやっぱり可愛くないとね」

そう言って笑いかけるチエシヤ猫を彼女はただ見返す。

「うん？ どうしたの？」

「呆れた……………」

彼女はチエシヤ猫の髪をなでるのを止め、チエシヤ猫に冷ややかな視線をやる。

しかしチエシヤ猫は視線など全く気にもせず、にやにやとした笑みを浮かべて、彼女の方を見る。

「何よ……」

「別に」

チエシヤ猫のどこかいい加減な態度にますます彼女は眉をしかめる。

「そう言えば、今日はあの人と一緒にじゃないんだ？」

チエシヤ猫のその一言に彼女はぴくりと動きを止める。

「……彼なら白ウサギを探しに行ったわ」

「白ウサギを？」

「そう、白ウサギだったら私との約束を忘れて、約束の時間になっても来ないのよ。全く……何のためにあんな大きな時計をわざわざ持っているのよ」

そう言って不満そうに文句を言う彼女にチエシヤ猫は相変わらずの笑顔のまま静かに言った。

「さっきあの人、また城の中で迷子になってたよ？」

彼女の目がゆっくりと見開かれる。見る見る間に顔から血の気が引き、顔がひきつる。

「あ、貴方……彼が迷子になってるってわかってて見捨ててきたの？」

「え、そうゆう訳じゃないけどさ。あの人がどうなるかと俺には関係ないし」

そう言ってへらりと笑うチェシャ猫を彼女は冷たく見据える。

「何？」

「もう、いいわ」

彼女は静かに立ち上がるとチェシャ猫に背を向け、庭を出て行った。

じんわりとにじむ汗。乱れる呼吸。苦しくて苦しくて、それでも足を止めないのは後ろから追いかけてくるあいつのせいだ。

「待って下さいよ、アリス！」

「嫌！ ついて来ないで！」

もはや私も必死だ。完全に危ない奴となった白ウサギから逃れるため全速力で城内の廊下を走り抜ける。

本来、人様の家の廊下を走るなど言語道断だが今はしょうがない。あきらめよう。

「アリスー！」

あの変態から逃れるためなら私は何でもする。

「アリスー！」

「ついて来ないでー！！！」

何で私ばかりこんなめにあわなきゃいけないのよ……

どれくらい走っただろう？ 頭がぼおっとしてきて、まともに考える力ももう残されていない。

先ほどからうるさいほど聴こえていた自分を呼ぶ声はもう聴こえない。恐る恐る後ろを振り返るとそこに白ウサギの姿はなかった。まいたのだろうか？ そうは思いつつもまだ完全に安心はできない。

なにせ相手はあの白ウサギである。地の果てだろうが地獄だろうがついてきそうな気がする。

足を止めずに私は後ろを何度も振り返りながら次の角を右へと曲がった。

「……っ!？」

「うめっ!？」

突如として声とともに目の前に何かが現れ、よける暇もなく私はそれとぶつかり、そのまま倒れ込む。

「いたっ……」

痛い、結構痛い。私はしばらくの間ぶつかった衝撃で動けずその場にうずくまる。

唯一の救いは倒れ込んだ時に何かクッションになってくれたおかげで体を床に打ちつけずにすんだことだ。衝撃でさえこれなのに床に打ちつけられでもしたら……考えただけでも恐ろしい。

しかしそこまで考えてふとある疑問が浮かんだ。

クッション？ いったい何がクッションになってくれたんだ？

「うわっ……」

下から声が聞こえ、ぶつかった相手が自分の下敷きになっていることによりやく気づき、慌ててどく。

男はゆっくりと体を起こし、痛そうに頭を抑えながら私の方を見る。

ここで初めてお互い顔を見合わせた。相手は中年もしくはそれより若いぐらいの年齢の男で、焦げ茶の髪に体格のよい体、身長も高く顎の下には髭がのばされていた。

服はデザインはシンプルなものによく見ると上等な服でその男の裕福さが伺える。

「いてえな……廊下は走るなって、誰かに教わらなかったのかよ」

男はそう言って私の方を眉をしかめて見てくる。

どうやらこの人もこの城の住人らしい。

私はじっと男を見つめる。あまりにも私が見るせいか男は僅かにたじろぐ。

「な、何だよ……」

私にとって重要なのはこの男が誰かではない。この男がまともかどうかである。



迷子の侯爵様      その2（前書き）

しばらくは侯爵様とアリスの二人旅です。

迷子って一人でなるとテンションがた落ちですけど、二人とかでなると何故かテンション上がりませんか？

あれ？      私だけですか？

迷子の侯爵様      その2

「何だよ……そんなに見て……俺、どこか可笑しいか？」

男は自信なさげにそわそわと自らの身だしなみを見る。

どうやら悪い人ではなさそうだ。

少なくとも誰かと違って私の話を聞こうとは思っているようだし、  
どこかの奴らとは違い、私に銃を向けたりもしない。

まとも……かどうかはまだわからないが服装もわりかしいし、ぶ  
つかられて下敷きにされてもなお悪態一つつかないところを見ると  
かなりのお人好しかもしれない。

「ごめんなさい……そうゆう訳じゃなくて……私まだここに来たば  
かりだから、この世界に慣れてなくて……」

自分でも言い訳がましいなと思う私の説明に男は少しも嫌な顔せず、  
ただ僅かに目を丸くし、私を見る。

「この世界って……あなた……ひよつとしてアリスか？」

そう言われて私は言葉につまる。

「私は……」

どうしよう……アリスだと名乗るべきだろうか？ しかしそれでは自分の名前をアリスだと認めてしまうようなものだ。

そう言われれば名乗るのはこの世界に来て初めてだ。前までは誰かしらが私の意志に関係なく勝手に紹介してしまったり、何も言わなくても相手が勝手にアリスと呼んでいた。

今さらだが……本当にアリスと名乗っていいのだろうか？

この世界の住人は皆、私のことをアリスと呼ぶがそれはもちろん私の本当の名前ではない。かと言って白ウサギが言うには本名を言うてしまえば、私は元の世界に帰れなくなってしまつらしい。

どうしよう……。男は私の方をじっと見つめ、返事を待っている。

「私は……アリスよ」

まあ、みんな私の事をそう呼んでいる訳だし、あながち嘘と言うわけでもないだろう。

そんな軽い気持ちでそう名乗ったのだが男はそれに目を見開き、次の瞬間私の手をつかみ、一気に駆け寄る。

「アリスか!! アリスなのか!? いや〜良かった! アリスに会えるなんて、たまには迷うのも悪くないな!」

男はひどく興奮してそう言い、つかんだ手をぶんぶんと振る。本人はおそらく握手でもしている気なのだろうが、あまりにも激しく振るため、何度も私はよろめいた。

「迷ったって……貴方も余所からここに来た人なの?」

「いや、ここに住んでいる」

男はそう言って笑う。しかしそこは笑うところでは全くない。

「へっ? 貴方ここに住んでるの?」

「ああ、住んでいる」

「でもさっき迷ったって……」

「ああ、迷った。今だって迷ってる最中だ」

堂々とそう言う男を私は呆然と見つめる。

「迷ったって……貴方……」

「まあ、よくあるよな」

「いや……普通、自分の家では迷わないと思うけど……」

と言うより、普通迷えないだろう……。いくらこの城が広いと言っても毎日いれば自然とどこに何があるかくらいわかるはずだし、いたい何をどうしたら迷うと言うのだろうか？ そっちの方が謎だ。

「そうなんだけどよ……気づいたら廊下が一本増えてたり、部屋の

数が多くなつてたり、壁が変わつてたりしてな……」

「ま、待つて！ 何で廊下とか部屋が増えるの？」

普通は増えない……って言うか絶対に増えない。

うん？ でもこの国なら廊下が増えたりするのが当たり前なのかな？ 何かこの国すつごく変だし、そんなことが2つ1つあっても全然気にならない気がする。

「三月ウサギとかがいつでも勝手に改造しまつんだ……」

原因はあいつか。なるほど……三月ウサギならいかにもそうゆう事をしそつだ。

「それは……大変ね……」

心の底からそう思い、私は男に同情した。確かにそんなことされたら迷つかも……って言うかそんな所に住みたくない。

「ああ……。廊下や部屋が増えるならまだしもトラップでも仕掛けられた日には……」

「トランプ?」

「ああ。落とし穴とか扉を開けたら何か飛んでくるとか爆弾を部屋に隠したりとか……」

三月ウサギ! 貴方いったいこの城で何をしようとしてるのよ!?

「しかも夜な夜な改造してるから止めようがなくてな……」

「そりゃあ、ねえ……」

三月ウサギは寝ないという話を聞いていたがどうやら真実らしい。

そんな時間に何してるんだか……

「全く……管理してる俺の身にもなってほしいぜ……」

「管理してる? 貴方がこの城を所有してるの?」

「まあ、形だけな。ここはあくまでアリスの……あんたの城だからな。俺は立場上、この城の管理者でな。アリスがいない間、この城の管理や整備をしているわけだ」

「そうなんだ。貴方ってひょっとして偉い人なの？」

服も白ウサギ達よりもどこか高そうに見えるし、そう言われれば身なりもよく整っている。

「あー、実はなあ……俺、侯爵なんだ」

「へえ……どうりで格好がいいと思った……」

そこまで言って、私は言葉を止める。

うん？ 侯爵？

「じゃあ、貴方が侯爵様なの！？」

「へっ？ ああ、俺は侯爵だけど？ それがどうした？」



どうしたも何も無い。侯爵と言えば、私達のような一般人からしてみれば雲の上の存在だ。

とは言ってもちらりと私は男の方を見る。何だか想像していた感じとだいぶ違うんですけど……

「ごめんなさい……私、貴方が侯爵様だと知らなくて……」

どうしよう……今さらだが敬語を使った方がよいだろうか？ いや、その前に私、侯爵様を下敷きにしちゃったなんて……通常なら即刻捕まえられてしまう。

「止せよ。別に俺が侯爵だろうが何だろうがいいだろうか？ あんたはアリスなんだ。何にも遠慮することはない」

この世界では侯爵よりもアリスの方が地位が上らしい。

そう言えば白ウサギも女王よりも重要なのはアリスだと言っていた気がする。

「でも……」

「いいから、俺のことは気軽に侯爵とでも呼んでくれ」

そう言っつて侯爵はにかつと笑う。笑うと最初の印象とはうってかわり何とも子供っぽい感じがする。

何だか、想像してたのと全然違う。私はすっかり緊張をとき、笑顔で話す。

「何だか意外ね。貴族つてもっとオーラがあるというか煌びやかで人を見下すような人達だと思っていたのに」

侯爵はそれに苦笑し、困ったような顔をする。

「まあな。確かに自分の地位を周りに威張り散らす奴も結構いるが俺はそうゆうのは好きじゃない。何て言うか……そういうの苦手なんだ」

何だか……本当に思っていたのと違う。貴族と言っつのはもっと高飛車と言っつか傲慢で我が儘なものだと聞いていた。

私の学校にも位は低いが貴族の血をつぐ子がいた。その子はまさに想像していた貴族そのもので人にやたらと命令するわ、自分勝手に考えるわ、最低な奴だった。

それに比べ今、目の前にいる人はどうだろう？ 人を見下すこともなく、私に文句を言うこともなく、優しげに笑っている。

「私もそう思う。貴方がそういう感じじゃなくて本当に良かった」

「そうか？」

「うん。何かこうあからさまに貴族って人にはどう接したらいいかわからないし、貴方が貴族らしくなくて本当に良かった」

貴族らしくないと言うのもそれはそれであれなのだが、それを聞くと侯爵は嬉しそうな顔をした。

「本当か？」

「うん」

「そっか。アリスにそう言われると悪い気はしないな」

侯爵は嬉しそうに笑う。本当にひとのよい人だ。

「あなたとは気があつな。俺、あなたのことすげー気に入ったぜ」

「え、本当に？」

この世界の住人にそう言われて初めて嬉しいと思った。

「ああ！ あなたになら俺の名前を教えてやってもいいぐらいな  
んだけどな……」

「え？ 名前!？」

私はぽかんと侯爵を見る。侯爵はにこにここと笑らいながら私の方を見返してきた。

迷子の侯爵様      その3（前書き）

まだまだ続く侯爵とアリスの2人旅。

白ウサギにロリコン疑惑が浮上。

ちなみにアリスの年齢はいちよ14〜17ぐらいの設定です。

迷子の侯爵様      その3

「名前って……そんな簡単に教えていいものなの？」

「そうじゃねえけど、あんたはアリスだからな。他の奴に教えれば命とりになるがアリスには別に教えても構わない。俺達はアリスのためだけに存在しているからな」

そんなような事を誰かも言っていた気がする。アリスは本当にこの世界に欠かせない存在らしい。

どうして皆、そこまでアリスにこだわるのか……私は本当のアリスではないと言うのに……

「俺は教えても全然構わないんだがな……あいつに名前を名乗るのを禁止されてて……」

「あいつ？」

私が首を傾げてそう尋ねると侯爵は僅かに顔を赤くした。

「その……あの……あいつはだな……」

ごによごによとひどく照れくさそうにする侯爵。それを私は驚きながら見つめる。

少なくともついさっきまで大人の風格が漂っていたはずの侯爵だが、こうなると余裕をなくしたただの子供にしか見えない。

そのあまりの慌てぶりから、もしかしたら思ったよりも年が若いのかも知れない。

私は興味深げに侯爵を見ていると顔を赤く染めたまま、今にも消えそうなほどのか細い声で彼はつぶやいた。

「俺の……妻だ……」

「はい？」

侯爵の言葉にあまりに驚き、思わずそれを聞き返す。すると先ほどよりも若干大きな声で彼は答えた。

「だから……妻だ。あいつは……俺の妻のことだ……」

よほどそう言うのが恥ずかしかったのか、気づけば侯爵の顔は今にも湯気が出てきそうなほど真っ赤になっていた。

これは面白い話のねたを見つけたものだ。内心ほくそ笑んで、侯爵に話しかける。

「へえ、結婚してたんだ？」

「そうじゃねえよ!? ただ、俺の呼び名が侯爵であつちが侯爵夫人だったただけだ」

そうは言いつつ、やはり顔は赤い。

「そう? そのわりにはえらくはつきりと妻って言ってたじゃない」

「それは……いや、あの……こつちが勝手に思っていると言つか……何て言つか……」

たどたどしくそう言い、焦る侯爵を見て、私は声を出して笑ってし



まった。

本当に奥さんの事が好きなのだろう。侯爵は完全に冷静さを失い、私が笑ってる事にさえ気づいていないようだ。

そう言えば白ウサギ達が前に言っていた。チエシヤ猫は侯爵夫人の飼い猫だと。

だんだん私は侯爵をここまで惚れさせて、あのチエシヤ猫を飼い慣らしている、侯爵夫人という女性がどんな女性か興味を抱いた。

「ねえ、侯爵夫人ってどんな人なの？」

「どんなって……言われてもな……」

侯爵は口ごもり、ひどく困ったような顔をする。

「美人？」

「そりゃあ……美人かどうか言われるとそうだが……」

侯爵は少し考えてから小さな声で付け足す。

「どっちかと言つと……可愛い感じだな……」

「へえ〜可愛いんだ」

ニヤニヤと意地悪く侯爵の方を見ると侯爵はひどく照れくさそうな顔をする。

「な、何だよ……」

「別に？」

ひやかされるのは嫌いだ人がひやかすのは何とも楽しいものだ。

調子ずいた私はさらにその可愛いらしい奥さんについて侯爵に聞くとする。

「ひょっとして……年下だったりする？」

「なっ!?!」

私の質問に侯爵は目を見開き、固まる。その様子からしておそらく凶星だろう。

「そうなんだ。やっぱり年下なんだ」

「違う……いや、その……何というか……」

「違うの?」

何とも曖昧に答える侯爵にそう尋ね返すと彼は黙り込み、しばらく何やら深く考えこむ。

「侯爵?」

「いや……そのだな……」

言葉を濁す侯爵に徐々に不安がつのる。

「その……もしかして聞きちゃいけないことを聞きちゃった?」

そう尋ねると侯爵はゆっくりと首を振る。

「そうじゃねえよ……そうじゃねえんだけどな……」

そう言いつつも顔はどこか困っているように見える。やはりあまり触れてはいけないところに触れてしまったみたいだ。

でも……そんな困るような質問じゃないと思うんだけどな……。ただ、年を聞いただけなのに……。

「なあ……あなたから見て俺はいくつに見える？」

「えっ！？ 貴方？ えっと……」

私はじつと侯爵の顔を見つめる。

40代？ いや、もしかしたらもっと若いかもしれない。30代くらいだろうか？

あまり高い年齢を予想して、実年齢よりも上だったら相手に失礼である。

侯爵はそういった事でも気にしなさそうだが、やはりここは少し若く言っておくべきだろう。

「えっと……30代くらいかな……」

その答えに侯爵は僅かに頷き、そうだよなと言った。

ちょっと落胆したような侯爵の態度に私は焦る。

しまった……もしかしたら20代後半だったのかも……。

「えっと……もしかして……もうちょい若かった？」

心配になってそう尋ねると侯爵は笑う。

「いや……そうじゃなくて……実を言つと俺達は年をとらないんだ」

「えっ！？ 年をとらない？」

驚く私に侯爵は丁寧に説明してくれる。

「つまりな……俺達は存在した時からこの年で、それから年をおうことはない。だから俺もここに住む他の奴らもみんな外見は若くても実際はずっと年上だ」

そんなバカな……。

「それって……つまり貴方は子供だった時がないってこと？」

「ああ、俺は意識があつたその時からこの容姿だ。子供だったことはない」

侯爵の説明に啞然とし、私は言葉を失う。

本来ならそんな事信じたりしないがそれは不思議の国である。年をとらないなんて私の世界では有り得ない事だが、この不思議の国でならおこりそうな気もする。

そもそもここに住む彼らだって普通の存在ではない。最初にいたアリスさんの夢や想像から作られた存在だと3月ウサギは言っていた。

だから例え存在していた時からその外見で、その外見のまま年をとらないと言われても、あながち可笑しい事ではないのかもしれない。

存在した時からみんな今の外見。だとしたら白ウサギもあんな容姿でも実は私の父親よりも年上かもしれない。

そう思ったら、ひどく頭痛がした。

迷子の侯爵様      その4（前書き）

アリスと侯爵の二人旅……だんだん寂しくなってきました。登場人物が少ないと寂しいですね。何だかんだ言ってもアリスも白ウサギがいなくて寂しいと思います。



迷子の侯爵様      その4

不思議で可笑しな国に住む、年をとらないどこか奇妙で物騒な住人達。何で……私はこんな事に関わるはめになってしまったのだろう……

もとはと言えば全てはあの白ウサギとかいう男のせいなのだ。

「白ウサギのバカ……今度あったら覚えておきなさいよ……」

絶対にまた殴ってやる。密かにそう決意していると侯爵は僅かに目を見開く。

「白ウサギ？ あんた、白ウサギに会ったのか？」

「会ったも何も……あいつが勝手に私をこの国に連れてきたのよ」

さらに嫌みのつもりでかなり強引な方法で無理やりにねと付け足す。

すると侯爵は心底驚いた顔をし、私の方を見る。

「白ウサギがあんたを連れてきた？ あの白ウサギが？」

動揺を隠せない様子の侯爵に今度は私の方が驚いてしまう。

「何もそこまで驚かなくてもいいじゃない……」

「いや、だって、あの白ウサギが……まさかそんな勝手な行動をとるなんて……」

とるでしょう……。あいつなら何だってアリスのためとか言ってるじゃないぞ。

「あの性格で勝手に行動しないわけがないじゃない……」

「確かに白ウサギは少しばかり癖がある性格をしているが……真面目で意外と良い奴なんだぜ？」

「あの白ウサギが!？」

有り得ない……絶対に有り得ない……

あまりにも露骨に表情が出てしまっていたのか侯爵が苦笑する。

「そんなに信じられないのか？」

「そりゃあ……」

確かに悪い人と言うわけではないがどう考えたって真面目ないい人には思えない。

「あんなのただの変態よ……やたらと触ってくるし、気持ち悪いセニフを吐くし、かなりのひねくれ者だし……」

ふと侯爵の視線が気になり、言葉を止める。侯爵は私の方を何故だか感心したように見ている。

「なっ、なに？」

「あなた……白ウサギと親しいんだな」

「ええっ！？ 親しくない！ 絶対に親しくない！」

必死になって否定するが侯爵はただただ穏やかな笑みを浮かべてこちらを見ている。

「仲いいんだな」

「よくない!」

「そう言って、あんたさっきから白ウサギの話しかしてないぜ?」

「貴方が話をふったんでしょう!？」

「うんうん、仲いいっていいことだよな」

「ちょっと、だから違ってます!」

「照れんなよ」

「照れてない!」

ここの住人達は本当に人の話を聞いてくれない。

私と白ウサギは仲が悪くはないが良くもない。と言うより私が嫌  
仲がいいなんて認めたくない。

「実はな俺、白ウサギを探してるんだ」

「白ウサギを!?!」

「ああ、どこかで会わなかった?」

会つものなにも……

私は僅かに苦笑いをしつつ、侯爵の方を見る。

言えない。ついさっきまでその白ウサギから逃げていたなんて言え  
ない。

言えばおそらくまた誤解されるに違いない。

「うん？ どうした？」

「えっと……白ウサギならさっきお茶会の会場にいたかな？」

曖昧にそう答えれば侯爵はえっと問い返す。

「お茶会って三月ウサギのやつか？」

「うん……」

「あんた……」

「な、何？」

「三月ウサギとも仲いいんだな」

「……」

どうしてそうなる！..？

侯爵の言葉に私は頭を抱える。それがまた何の意図もなく、無意識に発せられるものだから余計にたちが悪い。

「あのね……私はまだこの世界に来たばかりなの……だからそんな会ったばかりの人達と仲良くなんかなれるはずが……」

と言うより……はつきり言ってあんな物騒な奴らと仲良くなんかなりたくない。そんな私の思いをよそに侯爵は少し考えこむ。

「お茶会の会場が……よし、じゃあ行ってみるかな？」

侯爵はそう言って、私の方に向きなおり、笑いかける。

「じゃあ、俺、お茶会の会場に行ってみるな」

「えっ！？ あ、そっか……」

寂しいというわけでもないがなんとなく1人になるのは少しばかりためらわれる。

とは言え、侯爵は白ウサギを探している。ついて行って、彼にまた

会つのも正直めんどくさい。

どうせ侯爵と歩いている姿を見れば、白ウサギは浮気だ、裏切りだと言つてまた騒ぎたてるに違いない。

「じゃあ、気をつけてね」

「ああ、あんたも気をつけるよ？　城の中だからそうそう何も起こらないと思うが万が一ってこともあるからな……あんまし無茶とかすんなよ？」

「私だつて子供じゃないんだからそれぐらいわかつてる……」

心配そうにする侯爵を見て、その姿から私はふとどこかの父親のようだなと思った。

子供を氣遣う父親。しかし私にはそれをされた記憶がない。

仕事ばかりでめつたに家族と関わろうとしなかった私の父。母さんはそんな父に文句も言わず、いつも優しく「あの人はそうゆう人なのよ」と言つて笑つていた。



「ねえ、お母さんはお父さんのどこが好きなの？」

ある日のこと、幼い私はそんな事を母さんに聞いてみた。

あの当時はたんなる気まぐれで聞いたのだが、今思えばいつもいい父を母さんがどう思っているのか知りたかったのかも知れない。

「どっつてそうね……不器用なところかな？」

「不器用？」

私がいわからなさうにしていると母さんは笑い、私の髪を優しくとくす。

「貴方の父親はとっても不器用な人なの。自分の気持ちを上手く伝えられない、伝えようと思っても伝えることがなかなかできない不器用で駄目な人」

母さんは茶目つ気のある笑顔を浮かべる。

「だからね、ほっとけなくなっちゃうのよ」

母さんはそう幸せそうに言った。母さんがあんまりにも嬉しそうにするのでつられて私も笑顔になる。

「貴方もいつかお父さんみたいな人が好きになるかもしれないわね」

「どうして？」

「だって、貴方は私とよく似てるもの」

母さんはそう言って穏やかな瞳を私に向ける。

母さんが死んでから数年。私は数人の人と付き合った。優しく、皆いい人だったが私はついに母さんの言っていたような不器用な人には巡り合わなかった。

当然と言えばそうだろう。何しろ私は初めっからちっとも母さんに似ていなかったのだから……

ゆっくりと思考を止める。止めた。そんな昔の事を思いだしたってどうにもならない。

「そうだな、子供じゃねえもん。すまん、あんたみたいな奴を見ているとついつい心配しちゃうんだ」

やっぱり、侯爵は良い人だ。

「じゃあ、またな」

そう言っただけで笑顔で歩み出す侯爵を私は慌てて止める。

「待って！ そっちじゃない」

「えっ？」

「お茶会の会場に行くんでしょ？ だったら逆よ」

お茶会の会場からここまで走ってはきたもののほぼ一直線だった。だから私の来た方向に行けばいいのだが侯爵は何を思ったのか全く逆方向へと進んでいる。

何か近道でも知っているのだろうか？

「あれ？ あんた……さっきこっちから来なかったか？」

「逆だけど……」

「あれ？」

困惑ぎみに何度も辺りを見渡す侯爵。もしかして……この人……実は極度の方向音痴なのでは？

迷子の侯爵様      その5（前書き）

さあ、ついにあの人が帰ってきました。彼が帰ってくるとそれだけで賑やかになりますね。

アリスと侯爵の二人旅はここまで。これからまた騒がしくなります。

迷子の侯爵様 その5

「だからそつちじゃないって!」

「え? あれ? おかしいな?」

侯爵は首を傾げて不思議そうに周りを見渡す。すでに何度も繰り返しているそれを私は内心ひどく呆れながら見る。

「だってさつきまでこつちに進んでたよな?」

「違う……逆方向に進んでたでしょう?」

子供に諭すように優しくそう言えば、侯爵はあれつと首を傾げる。そんな様子を見て、私は何回目かわからないため息をつく。

彼の方向音痴は予想以上にひどかった。一直線の道でさえ、一回立ち止まると途端に方向がわからなくなり、何故だか逆方向へと進んで行く。

故にお茶会の会場に向かうと言っていたが実のところ先程から全く進んでいない。

「あなた……本当に大丈夫？」

心配になって思わずそう聞くと侯爵は大丈夫だと言って笑う。しかしそう言いつつすでに方向がまた間違っている。

「だから、方向が……ああ、もう、いい！ 私もついて行く！」

「えっ！？ いいのか？」

驚いたようにする侯爵に私は頷く。どうせ行くあてなどなかったのだ。このまま一人でどこかに行くよりは侯爵と行った方がいいかもしれない。

それに……このままではいつまでたってもお茶会の会場にたどり着けないだろう。

「なんか……悪いな」

「いいわよ、別にどうせ他に行くところなんてないんだから」

それにこれだけ時間がたてばさすがに白ウサギも、もうお茶会の会場にはいないだろう。

「ありがとうな」

「別にこれぐらい……」

その時、誰かが廊下を走ってくる足音が背後から聞こえてきた。嫌な感じを抱きつつ、私は自分の考えがどうか外れているように祈る。

「アリスー!!!」

しかしその考えは無情にも当たってしまった。

ああ……何てことだ。あまりにも聞き慣れたその声に私の顔はひきつり、現実逃避したい衝動に駆られる。

この声が幻聴であるようにと最後の望みをかけて振り返れば、残念ながらそこには彼の姿があった。



「アリスー！！　愛しのアリスー！！　待って下さいよー！」

そう言うてににこと気持ち悪いほどの笑顔を浮かべて、白ウサギはこちらへと走ってくる。

待てだつて？　誰が待つものか！！　とつさに侯爵の腕をつかみ、走り出す。

「へっ？　えっ？　ええっ！？　何で走るんだ！？」

「いいから、黙って走って！」

ちらりと後ろを振り返れば案の定、凄まじい剣幕で白ウサギは侯爵を睨んでいる。

「侯爵！　お前……私のいない間にアリスに手をだすとはいい度胸だなー！」

「へっ？　えっ！？　いやっ、違っ！」

「うるさい！　私のアリスに手を出した時点でお前は終わりだ！」

「だから……違っ!?!」

必死に説明しようとする侯爵だがそんな話を白ウサギが聞く訳もなく、手元が一瞬光ったかと思うとまた剣が両手に一つずつ現れ、それを構えると白ウサギは狙いを定めて一気に走り出す。

「今すぐ抹消してやる!!」

「うわっ!　　ばっ、ばかヤロー!　　そんな危ない物を振り回すな!」

「うるさい!　　死ね!!」

白ウサギは本気だ。それに慌てたように侯爵は足を速める。

「見なさい!　　どこが真面目ない奴よ!　　このどろろがかそんなのかわかりやすく、簡潔に教えてちょうだい!」

「いやっ、違っ、普段はもう少しまともと言うか……あのヤローはいつからあんなにとち狂ったんだ!?!」

「元からよ！ あれが白ウサギなの！」

廊下を全速力で走り抜ける、私と侯爵。その後ろから殺気を放ち、剣を振り回しながら追いかけてくる白ウサギ。

何でこんな事になってしまったんだ？

自問自答を繰り返しても当然答えが出てくる訳もなく、必死に足を動かす。

両手に剣を持っているにも関わらず、白ウサギの足は非常に早く、じりじりと距離が縮まっていく。

「侯爵！ 貴方は何か武器を持ってないの！？ 手品みたいなやつで早く武器を出して、白ウサギに応戦して！」

「無茶言つな！ 俺ので応戦したら城の壁に大穴が開いちゃう！」

城の壁に大穴を開けるとはいったいどんな武器を侯爵は所有しているのだろうか？

確かにせっかく綺麗なお城の壁に穴を開けるのは気がひけるがだからと言ってこのままでは私達が危ない。

「お城の壁と命、貴方はどっちの方が大事なのよ!？」

「命だ!　だが、城の壁に穴が開いたら修理するのは俺だ!　出来れば開けたくない!」

「そんな事言ってる場合!？　あつちは本気よ!」

「侯爵!　アリスからさっさと離れろ!　殺してやる!」

侯爵と私が言い合うなか白ウサギは今にも切りかかってきそうな勢いで、すぐそばまで迫ってくる。

「早く応戦して!　このままだと私達殺される!」

「そんな事言ったって相手はあの白ウサギだぜ?　あんな奴とまともにやり合えるのは帽子屋と三月ウサギぐらいなもんだ!」

侯爵は僅かにすまなそうな笑みを浮かべて私の方を見る。

「悪いが俺じゃ太刀打ちできねえ。あきらめてくれ」

そう言うてあははっと笑う侯爵を私は絶望的な思いで見つめる。

もはや手のうちようがない。すでに体力も限界に近く、白ウサギに追いつかれるのも時間の問題である。

もうこうなったら誰でもいい！ 誰か……三月ウサギでも帽子屋でもいいから……誰かあのバ力を止めて！

その願いが通じたのか、あきらめかけたその時、前の方から足音が聞こえ、誰かがやってきた。

誰だ！？ 祈るような気持ちで私は現れた人物を見つめる。しかしそこにいたのは三月ウサギでも帽子屋でもなく、見たことない少女だった。

城の子だろうか？ 可愛いらしい顔をした金髪の少女がこちらへと歩いて来る。

おそらく私よりも年下だろう。小柄な体にまるで人形のような愛らしい姿、ひらひらとしたリボンのついた可愛いらしいドレスがよく似合っている。

少女は私達に気づくと目を見開き、驚いたように立ち止まる。

まあ、当然だろう。普通に廊下を歩いていたら目の前から必死に逃げてくる二人組と剣を振り回す男がやって来たのだ。誰だって驚き、足を止めるに違いない。

しかし状況が状況である。このままではこの少女も巻き込まれてしまう。

「逃げて!」

あらんかぎりの声でそう叫ぶ。しかし少女は私達の方を見たまま動かない。

「ウィル……」

「えっ？」

何か呟いたかと思った。少女は不意に右腕を振る。するとそこがぼんやりと光り、少女の腕の中に黒光りする塊が現れた。

何て事だ……まさかあんな小さな子まで簡単に銃を出せるだなんて……この世界はいつたいたいどうなっているのだろうか？

しかも少女の腕の中にある物は普通の拳銃などではない。少女の腕の中に収まるそれは軽機関銃、つまりマシンガンであった。

そんなもの私はもちろん持った事ないし、実物など今まで一度だっ て見たことがなかった。

しかもマシンガンを持っている人と言えばたいてい遅い肉体を持つ男性が主で女性はもちろん、こんな幼気な少女が持っているなんていう話は一度だっ て聞いたことがない。

マシンガンの重さなど知らないが相当重はずだ。それぐらい見ただけでもわかる。しかし少女はマシンガンを持って顔色一つ変えず、重そうな素振りを少しも見せずに、平然とそこに立っていた。

少女の目がぎらりと光る。その目はつり上がり、怒ったように少女は白ウサギを睨みつけ、マシンガンの引き金に手をかける。

「私のウィルに何してるのよ！　白ウサギ！」

勇ましく、どこか凜々しい少女のその姿に思わず目を奪われ、見とれていると侯爵が素早く私の腕をつかむ。

「伏せろ！！」

侯爵はそう言い、私の腕をひき、一気に二人同時に床に伏せる。それと同時にマシンガンが火を吹いた。

自動的に連続で発射される銃弾。頭上を飛び交う、銃弾の嵐に私は思わず目を閉じ、耳を塞いだ。



迷子の侯爵様      その6（前書き）

侯爵様は本気になれば白ウサギと同じくらい強いと思われます。

まあ、他の住人に比べて性格が穏やかなため、よほどの事でなければ本気になりませんが。

迷子の侯爵様      その6

銃声が鳴り止み、私は恐る恐る目を開け、耳から手をははず。

さっきまでの騒がしさが嘘のように辺りが静まり返る。そんな中、少女は未だにマシンガンを構え、そこに立っていた。

あれだけの事をしておいて少女は顔色一つ変えていない。

しばらくして再び少女の手元が光ったかと思うと抱えられていたマシンガンが跡形もなく消える。

光ってはどこからか武器をだし、かと思えばあっという間に消す。いったいどんな構造になっているのだろうか？

少女はゆっくりと侯爵に歩みより、侯爵の方を見下ろす。侯爵は僅かに脅えたようにそれを見上げる。

「ルナ……」

侯爵がそう少女を呼ぶと冷たい表情が一変し、少女の表情がどこか

子供らしいふてくされたものへと変化した。

「ウィル！ 何度言ったらわかるの！？ あれだけ一人でどこかへ行かないでって言ったのに！」

「えっと……その……」

「見なさい！ また迷子になってるじゃない！」

責め立てる少女に侯爵は困ったように笑う。

ルナと言うのは少女の名前だろうか？ と言うことはウィルと言うのはおそらく侯爵の名前なのだろう。

名前を呼びあえるほど侯爵に親しい人。ふとある人物を思いつく。

「侯爵夫人？」

試しに呼んでみると少女はぴくりとそれに反応し、私の方をちらりと見たがすぐに視線を侯爵へと戻す。どうやら夫人で間違いないようだ。

「ほら、早く立ちなさいよ」

当然のようにそっと手を差し出す夫人に侯爵はやや顔を赤くしつつその手をとる。たったそれだけで顔を赤くするとは、侯爵はどれほど夫人の事が好きなのだろうか？

感心したように侯爵達の方を見ていると夫人が私の方にも声をかけてきた。

「貴方もいつまでそうしてるの？　いい加減に立つたらどう？」

そう言われ、慌てて立ち上がる。しわになったスカートを直し、私は思い出したように振り返る。

白ウサギは無事だろうか？　あれほどの銃弾の嵐だったのだ。いくら白ウサギと言えど、無傷ですむはずがない。

嫌な奴だとは思いが死んでしまったらそれはそれで後味が悪い。血まみれで倒れていないことを祈りつつ、白ウサギがさっきまで立って場所を見る。

「全く……レディーがマシンガンをぶつ放すとはいったいどんな教育を受けて育ったんだ……」

ぶつぶつと文句を言いながら平然とそこに立つ白ウサギ。こんな事を予想してなかった訳ではないが、やはり驚きを隠せない。

「いったいどんな事をしたらあれほどの銃弾を浴びながら、無傷でいられるのだろうか？」  
謎だ。

「誰のせいそんな事するはめになったと思ってるの？」

「私のせいじゃない。責めるならアリスに手を出した侯爵を責めるんだな」

白ウサギのその一言に夫人は眉をひそめる。それを見て、侯爵はひどく慌てて弁解する。

「う、誤解だ！　俺は……別にそんなつもりじゃ……」

「そうよ。侯爵は何もしてないわ」

たまたま一緒にいただけなのに手を出したなどと夫人に勘違いされでもしたら、侯爵があまりにもかわいそうだと思う私も口添えする。

夫人はそれでもまだ疑り深そうに侯爵を見ている。

「本当に……手を出してないわよね？」

「当たり前だ！ たまたま一緒に白ウサギを探してただけで……」

「アリス！ 私を探してきてくれたんですか！」

めざとく侯爵の話を聞いていた白ウサギが探していたという部分にだけ反応する。

この地獄耳。自分にとって都合のいいところだけはしっかりと聞いてるんだから……

「誰が貴方なんか探すのよ……私はただ侯爵を手伝ってただけで……」

……」

「アリス……やっぱり私に会いたくたしょうがなかったんですね！  
？ わかります。わかりますよ。私も会いたかったです！」

聞けよ。全く本当にこの住人は話を聞かない。

夫人はまだ疑っているようでどこか表情がかたい。

「本当に何もしてないでしょうね？」

「してねえ！ してねえって！」

「本当かしら？」

「本当だって……」

侯爵は意地も何もかも捨てたようで、今にも泣きそうな顔で夫人に  
すがるような視線を投げかける。

ここまでくるとあまりにもかわいそうだ。

「あの……本当に何もなかったです……」

侯爵にかけられた誤解を解くために恐る恐るそう言つと夫人はゆっくりと視線を私にやる。

「貴方が白ウサギの連れて来たアリスね」

「あ、はい……」

夫人は眉をつり上げたまま私の方をじろじろと見る。

夫人は私を見てからさらに厳しい目をして白ウサギを睨みつける。

「白ウサギ、貴方……よくも勝手なまねしてくれたわね」

「何の事だい？」

「しらばくれないで。アリスは本来選んで連れてくるものではないわ。アリスは自分からこの国へ迷いこんでくるものよ」



夫人は責めるようにそう言うがそれを白ウサギは鼻で笑う。

「確かに連れてきたのは事実だけど別に無理やり連れてきた訳ではないよ」

よく言う……強制的に穴の中へ落としたくせに……。

「だとしても勝手な行動に変わらないわよ」

夫人は冷たい声でそう言い、白ウサギを睨む。しかし当の本人はいたって平気そうに笑顔さえ浮かべている。

「だとしたらどうするんだい？ 私とやり合つかい、侯爵夫人？」

白ウサギの紅い瞳が細められる。きらりとその目が光り、剣が鈍く輝く。

まさか……本気でやり合つつもりだろうか？

白ウサギとまともにもやり合えるのは三月ウサギか帽子屋だけだと言  
う、侯爵の言葉が思い出される。

いくら侯爵夫人がマシンガンを操れるからと言っても外見は幼い少  
女である。ここの住人達は年をとらないと聞いたのでおそらく実年  
齢はもっと上だろうが、それでも白ウサギと比べれば体格差はあき  
らかである。どう考えても不利だ。

夫人の方もそう思ったのか表情を引き締め、僅かに後ずさる。

白ウサギの目はあいかわらずぎらつき、その目がまるで獲物を狙う  
ようかのように夫人に向けられる。

このままでは本気で白ウサギは夫人に切りかかってしまう。何とか  
して止めなければ……

止める方法はないかと思考を巡らせていると不意に侯爵が動き、落  
ち着いた動作で夫人と白ウサギとの間に割って入った。

「何のつもりだ、侯爵？」

白ウサギは怪訝そうな顔をして間に割って入ってきた侯爵を見る。

それに侯爵は笑って答える。

「見ればわかるだろう？　こいつに手を出すって言うなら俺が先にお前の相手をしてやるよ」

そう言った侯爵は笑っていたが目だけは今までの穏やかなものとは違い、ひどく冷たいものへと変わっていた。

白ウサギはそれを見て、ひどく愉快そうに笑う。ここまで明確な殺意を向けられても笑っていられるなんて……やはり彼は可笑しいのだろう。

侯爵はそんな白ウサギを静かに睨みつける。剣を向けられてもなお堂々とした態度をくずさない、その様子から侯爵もまたこういったものに慣れているように見える。

やはり侯爵もまたこの物騒な国の住人なのだ。

迷子の侯爵様      その7（前書き）

侯爵は夫人の事がもちろん大好きですが、夫人だって侯爵の事が本当はそうとう好きです。

だから周りなんか気にならないし、いたって気にもしない。ある意味かなり迷惑な人達ですね。

迷子の侯爵様      その7

睨み合う白ウサギと侯爵。二人とも一見して見れば笑っているように見えるが、実際その目は全く笑っていない。

それどころか辺りはどこか殺伐とした雰囲気覆われ、呼吸をするのさえ息苦しく感じられる。

「お前に私の相手が務まると?」

白ウサギが挑発するかのようになんと言った侯爵はそれに余裕の笑みで答えた。

「どうだろうな? 俺は帽子屋や三月ウサギと違って、書類整理や雑用は得意だが、こっちの方にかけてはあんまり得意じゃないからなあ」

「得意じゃない? お前が? よく言っよ。書類整理とかの方がろくに何もできないくせに」

白ウサギはどこか呆れたようにそう呟く。それに侯爵はうっと唸る。おそらく凶星なのだろう。

「少しはましになったさ！ 少しはな！」

「少しねえ……」

「少しだって最初に比べれば大したもんなんだぞ！」

おそらく侯爵にとってしてみたら精一杯の反論だったと思うが、はつきり言って少しじゃ全く意味がない。

「そうよ！ 少しできただけでもすごいわよ！ ウイルほど要領の悪い人なんか他には絶対にいないわ！ 少しできただけでも奇跡よ！」

夫人は清々しいほどにきっぱりとそう宣言した。

あまり侯爵のフォローにはなっていないが、いったいその少しを教えるために夫人はどれぐらいの努力を重ねたのだろうか？ 発言からしてそうとう大変だったのだろう。

「少しできたぐらいで威張らないで欲しいな。いくら言おうと少しは少しだろう……」

ああ、白ウサギが珍しくまともな事を言っている。少しはまともな事も言えたんだ。そんな事をうつすらと思っていると、突然白ウサギが私の方へと振り返った。

「アリスはどう思いますか？ アリスだってそう思いますよね？」

「はい!？」

突然話をふられて私は思わず口ごもる。まさかこんな変なタイミングで話をふられるとは思っていなかった。どうしよう……。ちらりと侯爵達の方の様子を伺いながら慎重に言葉を繋ぐ。

「えっと……。そうね……。少しじゃねえ……」

私の言葉に見る見る間に夫人の顔が不機嫌なものへと変わる。

「アリス！ 貴方はいったいどっちの味方なのよ!」

「いや……。どっちと言われても……」

そんな事言われたって他に答えようがない。

「はつきりしなさいよ！」

今にも問い詰めてきそうな勢いで夫人が私の方へ歩み寄ってきたが、私のもとへたどり着くよりも前に侯爵が夫人を後ろから抱きとめ、それを阻止した。

「なっ!?!? ななななっ!?!?」

顔を真っ赤にさせてその場に固まる夫人をよそに、侯爵は眩しいほどの笑顔を浮かべ、夫人を抱きしめる。

なかなか甘い展開なのだがなにせ二人には体格差がありすぎる。

その様子は周りから見ると夫婦と言うより、親子のようなものに見えた。

「ルナ……アリスを怯えさせちゃ駄目だ」

「うっ……あっ……」



侯爵はそつと後ろから抱き止めたまま夫人の耳元で囁く。

「アリスは白ウサギにとって特別だが俺達にしてみても特別な存在だ」

「うっっ……」

「だから傷つけちゃいけない……てさっきからどうしたんだ？」

顔を真っ赤にさせ未だに固まっている夫人を見て、侯爵は不思議そうに首を傾げる。

こんなにわかりやすいのに、夫人のそれに侯爵は全く気づいていないようだ。

「ルナ……？」

「……っ、い、いいから、いいかげんに離れて!!」

夫人はそう怒鳴ると侯爵の腕から逃れようと身をよじる。しかし侯爵はその腕を緩めるどころか、より強くし、しっかりと夫人を抱き

しめる。

「駄目だ。離せば、アリスを撃ち殺しちまうだろう?」

「しないから! 絶対にしないから、早く離して!」

「何で離さなきゃいけないんだ? 俺の事嫌いか?」

「はい!? な、何言ってるのよ……」

「だって俺達夫婦だろう? 嫌ならあれだが、嫌じゃないならこのままいたって別にいいだろう?」

侯爵はいつになく真剣な顔をする。

「俺の事……嫌いか?」

「ば、ばかつ!! そうゆう問題じゃないでしょう!!」

真剣な侯爵の態度に夫人はますます顔を赤くし、じたばたと侯爵の腕の中で暴れる。

「いいから、離しなさいよ！」

「やだ」

「やだじゃない！ 離しなさいよ、このロリコン！」

「ロリ、ロリコン！？ 待って！ 実際の年数で言うならお前の方が俺より長くここにいるじゃないか！ って事はお前の方が年上だろっ！？」

「うるさい！ 離しなさい！」

「絶対に嫌だ！！！」

「いちゃつく侯爵と夫人。おそらく二人友無意識であるとは思いますが、それを強制的に見せられる私達の身にもなってほしい。できればよそでやってもらいたい。」

「本当にあいつらは何をやってるんだか……」

白ウサギはそうぼやいて、ため息をつく。その意見には私も同意する。

「そうね……とりあえず貴方はその剣を閉まったらどう？」

「でも夫人が貴方を襲うかもしれませんし」

「あの状態じゃ無理よ。今の夫人の頭の中はきつと侯爵の事ではないよ」

「うらやましいかぎりですね。私もアリスにそれぐらい思われてみたいです……」

「安心して、絶対にそれはない」

「またまた照れないで下さいよ」

白ウサギがまた妄想の世界へと若干飛び始めたがそれをあえて無視する。

「聞いてます？」

「聞いてない。全然聞いてない」

「アリスく、最近何だか私に対して冷たい気がしますよ?」

「やっとわかったの? 貴方にだけよ。特別扱いされてるんだから喜んだらどう?」

嫌みのつもりでそう言ったのだが、それに白ウサギは嬉しそうに目を輝かせる。

「本当ですか!??」

「嬉しそうにしないで! 嫌みよ! 嫌み! 変な意味にとらないで!」

「大丈夫ですよ! アリスも私にとっては特別ですから!」

「そんな事聞いてない!」

私のほか……白ウサギにまともな嫌みなんかが通じるはずがないとわかってたはずなのに。

「アリス、とりあえずどこか二人っきりになれる場所へ……」

何を妄想しているかは知らないが、顔がにやけている。ここまでするともはや否定する気力さえわかない。

「もう、いいわ。とりあえず剣をしまつて」

「貴方がそう望むなら」

白ウサギは笑って私にそう言うと、剣が光り、あっという間に跡形もなく剣は消え去った。もう疑問にさえ思わない。きっとこの世界では当たり前なのだろう。

「夫人はともかく、侯爵に関してはいい機会なのでここで始末したいんですが……」

「駄目！ そんな事絶対駄目！」

「そうですね……せっかくのアリスの服に返り血がついてしまったら困りますよね」

問題はそこじゃない。白ウサギはどこか観点が私とずれている。

「そうじゃなくて……貴方達ってどうしてそんなに命を軽く考えるのよ」

「私達にとって命などそれほど重要な物ではないですから」

「どづいの意味？」

意味ありげな白ウサギの言葉に私は僅かに戸惑う。

「私達にとって一番大切な物は自分の命ではありません」

白ウサギは優しく笑う。

「アリスですよ」

私は信じられない思いで視線を白ウサギへとやると白ウサギは静かに見つめ返してきた。

「アリスを守るためなら私も他の奴らも何だってやりますよ。それが私達の存在意義ですから」

そう言って、いつもみたいに笑う白ウサギ。でも何故だろうか？

その言葉に言いようのない不安を私は感じた。



迷子の侯爵様      その8 (前書き)

第三章完。次話より新章の予定。今回は白ウサギが主。作者じたい、まさか白ウサギがここまで重要なキャラになるとは思っていませんでした。

迷子の侯爵様      その8

「悪い冗談ね……」

苦々しく、吐き捨てるように私がそう言つと、白ウサギは目をぎよとんとさせる。

「何がですか？」

「何つて……その私を守るつてやつ……」

私は誰かに守ってもらえるような価値がある人間じゃない。私のために命をはるだなんて愚かだとしか言いようがない。はつきり言つてそんなの無駄だ。

「私なんかのために命を無駄にするなんて……」

間違っている。そう言おうとしたのに、言う前に人差し指が唇に押し付けられ、押し黙る。

ゆっくりと視線を上げれば、そこには満面の笑みを浮かべた白ウサギがいた。

「私なんか……だなんて言わないで下さい。貴方は私が選んだアリスなんですよ？ もっと自信を持って下さい」

「何言つて……」

「貴方は私が選んだアリスなんです。特別に決まってるじゃないですか」

どうして……白ウサギはいつもこうなのだろうか？ 私は小さくため息をつき、白ウサギの方を見る。

「貴方ってどうしてそう自信過剰なのよ……」

「自信過剰？ そうですか？ 私はいつだって謙虚ですよ？」

「バカ言わないでよ……」

白ウサギが謙虚だと言つなら世の中の人間は全員謙虚に違いない。

「どうしてそこまで……私にこだわるのよ……」

白ウサギは何故だか出会った当初から私にやたらと執着している。それはもう鬱陶しいほどののだが、未だに何故そこまで好意を寄せられているのかよくわからない。

「と言いますと？」

「貴方の言葉にはいつでも大事なところが抜けてるのよ……」

「そうですか？」

そつと人差し指を取り去りながら白ウサギは首を傾げる。わざとらしいそれが余計に腹立たしい。彼はわかかっていてやっているのに違いない。

「そつよ。貴方はいつだって大事なところをすぐにはぐらかすじゃない」

白ウサギはいつでも肝心な事を、一番知りたい事を教えてはくれない。

真面目に話をしてくれていたと思えば、すぐにふざけて話を曖昧にはぐらかす。

「だいたい何で私を選んだのよ。ちゃんとした理由を教えて！」

私のいた世界にならいくらでも女の子はいただろうし、もっと可愛い子や、もっとすごい子だっていただろう。それなのに……白ウサギは何で私のような子を選び、こんなところに連れてきたのだろうか？

まともな答えなど、最初っから期待していなかった。てつきり、いつもみたいに笑ってはぐらかされると思っていたのに、意外にも白ウサギはひどく真面目な顔をして私に向き直った。

もしかして……答えてくれる気なの？

驚いたように白ウサギの方を見れば、白ウサギはいつもとはどこか違う笑みを浮かべていた。

「貴方が、貴方だったからこそ……私は貴方をアリスとして選んだんですよ」

はい？ 白ウサギの答えに私は目を数回しばたかせ、呆然とその顔

を見る。

つまりどういふこと？

その答えの意味がまいちわからず、困惑していると白ウサギはそれを見て、くすりと笑った。

「アリス？　どうかしましたか？」

「どつって……何よ……それ」

「何って貴方を選んだ理由ですよ？　あそこにいたのがもし貴方じゃなければ、私はアリスをこの国に連れてこようなんて思いませんでした。貴方だからこそ連れてきたんですよ」

そう言うてににここと笑う白ウサギ。はっきり言って、意味がわからない。

「ま、また……はぐらかしてるの？」

「まさか。真面目に答えていますよ」

「だってその言い方じゃ……」

まるで出会う前から私の事を知ってたような言いぶりだ。

白ウサギは何も言わずに私の方を見つめる。今なら聞けば教えてくれるかもしれない。

「どうかしましたか？」

でも何故だろう……それは聞いてはいけない気がする。

「貴方って……」

「はい？」

「貴方って……変な人ね……」

話を私の方から変えた。それに白ウサギはもちろん気づいているだろう。それでも白ウサギは何も言わず、ただその言葉に笑った。

「貴方がそう言うのならそうなんでしょうね。私はそういう奴なんですよ。」

にこやかにそんな事を口にする白ウサギ。私はそんな彼を静かに見つめた。

「本当に……変な人……」

白ウサギの顔を見つめながら、私をそう呟いた。

その時、不意に言い合っていた侯爵夫婦の声が止まり、夫人が白ウサギの方へと視線をやる。

「そう言えば……私が頼んでおいた仕事は、もちろん終わらせたんでしょっかね？」

夫人の一言に白ウサギの笑みが一瞬凍りついた。まさかと思いつつ、白ウサギの方を見るとその目が泳いでいる。

「まさか……やってないって事はないわよね？」

夫人の目つきが一気にきつくなる。白ウサギはそれに何も言わず、



私の手をとるとそのまま走り出した。

「ちょっと！　　白ウサギ!?!」

「危ないですから走って下さい！　　走らないと体に穴が空きますよ！」

穴があく？　　いったいどうして……

すぐにその疑問の答えが出る。背後からじゃきつという、何かをひいたような音がしたかと思うと、銃声になる。驚いて振り返るとそこには再びマシンガンを構えた夫人が立っていた。

「ルナ！　　ま、待て……」

侯爵の静止の声もむなしく、引き金がひかれ、銃弾が打ち出される。

「きゃあー！　　撃たれてる！　　私達撃たれてる！」

「落ち着いて下さい！　　私と手を繋いで走って、はしゃぎたくなる気持ちはわかりますが……」

「バカ！ そんな事言ってる場合じゃないでしょう！ 私達撃たれてるのよ!？」

「確かに撃たれていますが、撃たれているだけであって、まだ当たってはいませんか？」

何を呑気に言っているんだ。撃たれている時点でもはや状況は切羽詰まっている。

「当たったらそれこそまずいでしょうが！」

「そうですね……当たると服に穴が空いてしまいますしね……」

重要なのはそっちじゃない！ 服がどうなるかと着替えればいいが体に穴が空いたらそれこそ大問題である。

「白ウサギ！ 何とかしなさいよ!！」

「私ですか？」

「貴方のせいじゃない！」

「仕方ありませんね。貴方がそう言うなら殺して……」

「やっぱり駄目！」

やる気満々に剣を引き抜きかけた白ウサギを見て、私は慌てて止める。

夫人に刃を向ければ絶対に侯爵が黙っていない。これ以上争い事に巻き込まれるのはごめんだ。

「じゃあ、どうするんですか？　このさい、ぱっさりと斬っちゃえば色々と楽ですよ？」

「駄目！　絶対に駄目！　剣は抜かないで！」

そうこうしているうちも夫人は撃ち続けている。未だに当たらずに助かっているのは夫人が本気で撃っている訳ではないからなのだろう。

……本気じゃないと信じたい。

「アリスの頼みじゃ、しょうがないですね」

白ウサギは軽くため息をつく。私の腕をつかみ、ぐいと引き寄せた。

あまりに強くひかれ、バランスを崩し、思わず白ウサギの方へと倒れ込む。

白ウサギはそのまま私を抱きかかえ、持ち上げる。

「ちょっと！　白ウサギ！」

「斬り捨てても駄目、剣を抜いても駄目なら逃げるしかないでしょう？」

そう言って白ウサギは笑う。私を抱え上げ、運んで行く。

「だからって抱き上げなくてもいいでしょう！！」

「大丈夫ですよ。アリスは軽いですから」

「そうゆう問題じゃない!!」

いくら怒鳴っても、文句を言っても、その胸を叩いても白ウサギはちっともこりた様子はなく、そのまま私を抱えたまま廊下を走り去って行く。

全く、本当に人の話を聞かないんだから……

「バカ……本当は重いくせに……」

小さな声でそう呟くと白ウサギはまさかと言って笑った。

## 第四章 いかれた帽子屋 その1（前書き）

四章にてようやく物語が動き出します。名前どおり帽子屋の章です。と言いつつその1に帽子屋は出ていません。各章のタイトルなんてそんなもんですよ。特に深く考えてつけたりなんかしてません。直感です。

第四章 いかれた帽子屋 その1

「白ウサギ……」

「何ですか？」

「そろそろ、いい加減におろして」

城内の廊下を白ウサギに抱えられて走ること数分。すでに銃声も侯爵夫妻の声も聞こえない。

ちらりとそちらの方を見れば、そこには長い廊下がただ広がっているだけで、誰の姿もない。とりあえず助かったようだ。

「聞いているの？ 白ウサギ？」

「聞いてますよ。焦らなくなつて、私はどこにも逃げませんよ。ちやんとアリスのそばにいますから」

「あゝ、そんな事はどつでもいいから早くおろして」

「もう、おりちゃんですか？　もう少しいのまま……」

「また殴りたいの？」

白ウサギが笑みを浮かべたまま、しばし固まる。どうやらだいぶトラウマになっているようだ。

「白ウサギ……」

「わかりました。おろします。おろしますから、そんな怖い顔しないで下さいよ」

白ウサギはそう言いつと立ち止まり、私を下ろした。

ようやく地面におろされ、ほっとする。白ウサギは悪い奴ではないのだが何せ頭が少しばかり飛んでいる。信用して全てゆだねてしまつと、何をしてくすかわかったもんじゃない。

「もう、白ウサギのせいでお別れも言えないまま侯爵達と別れちゃつたじゃない」



「いいんですよ。あんな奴らに関わるだけ無駄ですって」

冗談ではなく、本気でそんな事を口にする白ウサギを睨みつける。

すると白ウサギは少しだけばつのわるそうな顔をし、逃げるように視線をそらした。

「ところで夫人の言ってた仕事って何の事？」

わざわざ白ウサギに夫人が頼むぐらいだ。よほどの理由がなければ絶対こんな奴には頼まない。

「ああ、あれですか。夫人の時計が狂ったんですよ」

「時計？」

「そう、少し遅れてしまったから、合わせてほしいと頼まれていたんです」

「え？　　白ウサギって時計屋なの？」

意外だ。どう見てもそんな感じには見えない。

「そんな訳ないじゃないですか」

「そうよね。じゃあ、何で……」

時計屋じゃないのに何でそんな事を白ウサギがするのだろうか？

不思議そうにする私に白ウサギは笑って答える。

「ですから時間が違うから合わせてほしいと言われたんです。この国で正確な時計を持っているのは私だけですから」

「え？　　そうなの？」

そう言われれば、確かに白ウサギは立派な懐中時計を持っていた。

「正確な時計って……白ウサギの持っている時計以外はみんな狂ってるってこと？」

「そうですね。他のはみんな少しずつ遅れていたり、速くなったり、秒針があってなかったりするんですよ」

当然でしょうとでも言いたげに白ウサギは言う。しかしそれだけでは納得できない。

「何で貴方の時計だけがあってるの？」

「私は案内人ですから」

意味がわからない。

「何で案内人だと時計がずれないのよ……」

「迷わないようにですよ」

「迷わない？」

「この国は時間も、場所も、存在も、何もかもが曖昧なんです。だから誰もが簡単に迷い込む。迷い込むのは実に簡単ですが、そこか

ら抜け出せるのは極めて困難な事。だから、けして案内人だけは何かあっても迷わないように時計が正確に時を刻んでくれるんです」

「案内人だから？」

「ええ、私は案内人ですから」

白ウサギはそう言って微笑む。

「どつやって時計がずれないようになってるのよ……」

「それは案内人の力と言いますが、私の力と言いますか……」

つまり、明確にどうなってるかはよくわからないのか。

この不思議な世界なら何でも起こりそうな気がして、別にもう少しの事では驚きもしない。

しかし時計を合わせ忘れていた白ウサギも悪いが、それだけで撃ち殺そうとした夫人も夫人だ。

「貴方……ひょっとして夫人に嫌われてたりする？」

「そんな訳ないですよ。会ったびに撃たれていますが一度だってそれが当たったことはないんですよ。きつと照れくさいんでしょうね」

そう言っつてうんうんと頷く白ウサギ。それはあきらかに嫌われてい  
るのでは？

そうは思ったものの、さすがに本人に 言っつのは止めておく。わざ  
わざそんな事を教えなくてもいいだろう。

「本当に貴方達つて物騒よね。何か起こればすぐに武器とか出して  
……」

「頼もしいでしょう？」

確かに武器を持つてる点で言えばそうだが、何かがそれとは違つ。

「もう、早く安全な元の世界に返してよ」

そんな事言っつたつて、今更白ウサギが元の世界に連れて行つてくれ

るはずもない。

「もう全部、貴方のせいなんだからね」

若干あきらめつつもそう言うと、白ウサギは笑った。

「アリス」

「何？」

「そんなに元の世界に帰りたいんですか？」

「あたりまえでしょう？　姉さんに何も言わずに来ちゃったし」

今頃いつになっても来ない私を心配して、大慌てで周りを探し回っているだろう。もしかしたら、もう人に言っただ騒ぎになっているかもしれない。

姉さんは心配性だから大事になってなきやいいんだけど。

自分の事なのにどこか他人事のようにそう思う。

「あのお姉さんですか……」

私の答えが気にいらなかったのか、その声がやや強めになる。

「そうよ。家族に何も言わずにこんな世界に来ちゃったら普通心配するでしょっ?」

「あのお姉さんがですか?」

うん? 何だかその答えに違和感を感じる。

「そうよ。母が死んでから姉さんは母のかわりになって私を育ててくれたのよ?」

そんな姉さんを気遣うのは当然だ。それなのにますます白ウサギは納得できなさそうな顔をする。

「アリス……」

「何？ さっきからどうしたの？」

白ウサギとの会話に何か違和感を感じる。

何かがおかしい気がする。でも、それが何かはわからない。

白ウサギは紅い瞳でじっと私を見つめ、かと思ったらそっと視線を反らした。

「白ウサギ？」

どうしたの？ さっきまでと全然態度が違う気がする。

「私は……あの女が大嫌いです」

「え？」

きょとんと私は白ウサギを見る。彼は視線を反らしてたまま全く合  
わそとしない。



「女って……」

不意にずっと違和感に感じていたものがわかった。

白ウサギは何て言っていた？

あのお姉さん？

あの？

私と会ったあの時、姉さんはすでに家へと向かっていた。確かに後ろ姿は見えていたが、白ウサギの位置からは姉さんの姿など見えなかったはずだ。

「白ウサギ……貴方、姉さんを知ってるの？」

まさかと思ってそう尋ねる。白ウサギはそれに何も言わず、紅い瞳を私から反らしたままだった。

いかれた帽子屋　その2（前書き）

帽子屋の章だと言っておきながらその2にも帽子屋は出てません。  
早く出したくてしょうがないのに（泣）

帽子屋！　今回でまた白ウサギと少しお別れです。

いかれた帽子屋 その2

「白ウサギ？」

静まり返った城内の廊下。いくら私が尋ねても、白ウサギは何も答えない。

「どづいつ事よ……」

白ウサギが姉さんを知っているはずがない。いや、絶対に知らないはずなのだ。それなのに何故、彼はまるで知っているかのように話すのだろうか？

「アリス……私はあの女が嫌いです。あの女は貴方を傷つけた」

傷つけた？      姉さんが？      私を傷つけた？

そんな事があるはずない。姉さんはいつだって私に優しく笑いかけ、どんな事をして私をしかったりせぜず、私に手を上げることもなかった。

そんな姉さんが私を傷つけたはずがない。

「勝手な事を言わないで！　姉さんの事なんか、ろくに知りもしないくせに！」

「あんな女の事なんか、知りたくもないです。彼女は貴方を傷つけた。それだけで罪に値します」

「だからそんな事一度だって……」

「本当に？　本当にそうですか？」

何を言ってるの？

白ウサギが何を言いたいのかわからず、私は呆然と白ウサギの方を見る。

「アリス……何で彼女をそこまでしてかばうんですか？」

「当たり前じゃない。たった一人の姉よ！？」

そう、たった一人の私の姉。優しく、美しい、私の自慢の姉。

やましいことなど何もなければずなのに私の胸の鼓動は早くなり、口の中が渴く。

何故だろう？ 何かが違う気がする。それでもどこが違うかが私にはわからず、考えれば考えるほど頭がずきずきと痛む。

私は間違っていない。それなのに……

「アリス……貴方は本当にあの女を許すんですか？ あの女は……」

「止めて！ 聞きたくない！」

頭が痛い。白ウサギの言葉の一つ一つが鋭利な刃物になって私へと襲いかかる。

何かを……何か重大な事を私は忘れている。でもそれがなんなのか、全くわからない。

「アリス……あの女は貴方を……」

「うるさい！」

私は有らん限りの声でそう叫んだ。

それを聞いてはいけない。聞いたら私は帰れなくなる。

「何なの！？ 訳のわからない事ばかり言わないで！ 貴方が姉さんを知るはずがない！」

私の知ってる姉さんは優しく、上品で、美しくて誰もが羨むようなそんな人。母が死んでからはいつだって母の代わりに私のそばにいてくれた。そんな人が私を傷つけたはずない。

「アリス」

「姉さんは悪くない！ 何も悪くない！」

「アリス」

「姉さんはいつだって優しくかった！あの人は一度だって怒った事がなかった！」

「アリス」

「姉さんは悪くない！何も悪くない！」

「アリス……貴方は……お姉さんが嫌いなんです……」

何を言ってるの？ 嫌い？ 私が？ そんなはずない！  
姉さんを嫌うだなんてそんな……

頭ではそう思っているのに否定の言葉が出てこない。

「アリス……」

優しくげな、それでいてどこか冷たい白ウサギの声が鼓膜に響く。

聞きたくない！ これ以上何も聞きたくない！

「うるさい！　もう何も言わないで！」

私は白ウサギに背を向けるとさっさと歩きだす。

「アリス……」

「ついてこないで！　一人にして！」

それだけ言うと私は逃げるように走り出し、白ウサギをあとにした。

「見いちゃった」

どこか脳天気な声が聞こえ、アリスの行ってしまった方向をぼんやりと眺めていた白ウサギが気配のする方へと視線をやる。そこには



満面の笑みを浮かべたチエシヤ猫が立っていた。

にやにやと意地悪く笑うチエシヤ猫を白ウサギは無言で睨みつける。

「ふられちゃったね」

「誰が？　私はふられていない」

「そんな怖い顔で睨むなよ」

チエシヤ猫はおどけたようにそう言っつが白ウサギの目は相変わらずきついままだ。

「ねえ、白ウサギ」

「何ですか？」

「何であのアリスにこだわるのさ？」

「別にこだわってなんかいない」

「え、そうは見えないけどな」

チエシヤ猫はニヤニヤとした笑みを浮かべ、何かを探るように白ウサギの方を見る。

「何であの子を新しいアリスに選んだのさ？　可愛いだけが理由じゃないだろう？」

「あつちの世界に行ったら、たまたま彼女がいたから連れてきたんだ。それだけだよ」

「うん、それも嘘だね」

「嘘だと？」

白ウサギの目が鋭くなる。普通の人ならたじろぐところだが、チエシヤ猫はそれでもやっぱり笑っていた。

「嘘だよ。会ったばかりのアリスにそんなにあんたが執着するはずないだろう？」

そんなチエシヤ猫の問いかけに、白ウサギは何も答えず、黙り込む。それを見て、気のせいかなチエシヤ猫の笑みが深まった気がする。

「会ったばかりなら別にそんなに執着しなくていいんじゃない？」

アリスなんていなくなってもすぐに新しいのがくるんだし、俺が殺しちゃってもいいよね？」

そうチエシヤ猫が言ったと同時に白ウサギは目にも止まらぬ速さで剣を取り出し、チエシヤ猫の首もとにその先を突きつける。

これにはさすがのチエシヤ猫も僅かに身じろいだ。

「な、何だよ……たんなる冗談だろ？俺達がアリスに向かってそんなことできないって、あんただって知ってるはずだ」

「チエシヤ猫」

「何だよ……」

「私は冗談が嫌いだ」

その声は冷たく、背筋にぞくりとしたものが走る。

チエシヤ猫は視線を反らし、小さく舌打ちする。さすがにその顔は笑っていない。

「なんであんたがあのアリスにそこまで執着するんだよ」

「そんな事知ってどうするんだ？ チエシヤ猫」

「別に……」

単なる興味。チエシヤ猫はそう言ったが、どう見ても理由がそれだけだとは思えない。

そんなチエシヤ猫を見て、白ウサギがくすりと笑う。

「何だよ」

珍しく不機嫌そうにチエシヤ猫が白ウサギを見ると、何が愉快なの

かますます白ウサギは可笑しそくに笑う。

「どうせお前なんかにも理解なんかできないさ」

「どうついう意味だよ……？」

チエシヤ猫の表情が固くなる。それとは逆に白ウサギは柔らかな笑みを浮かべる。

「どうせチエシヤ猫の代わりでしかないお前に彼女の価値など到底理解できるはずがないと、そう言っているんだ」

それは残酷でいて当たり前の一言。チエシヤ猫はそれ以上何も言わずに静かに唇を噛みしめた。

いかれた帽子屋      その3 (前書き)

何度も何度も同じことを言いますが今回も帽子屋が出てきています  
ん。

タイトル変えようかな……

いかれた帽子屋      その3

お姉さんが嫌いなんですわね？

白ウサギに言われた一言がぐるぐると頭の中で回る。

姉さんのことを？ 私か？

足が自然と止まる。ちらりと後ろを振り返れば、もうそこには白ウサギの姿はなかった。

ゆっくりと視線を前へと戻す。どこまでも広い廊下をひたすら前へ前へと私は進んで行った。

「何？」

「この服どう？」

ある土曜日の午後。私は姉さんに連れられ、ピアノの発表会に着るドレスを買いに出かけた。

店に入ってすぐに姉さんが手にとった服はリボンがやたらとついた赤いドレスで正直少し派手だと思った。

「姉さん……少し派手じゃない？」

「そうかしら？　ピアノの発表会なんだから少しぐらい派手でもいいわよ」

「でも……」

「アリスによく似合うと思うわ」

姉さんはじっとりとした目でそう言い、私に着てみるように促す。



言われるがままに着てみると派手な赤いドレスはあまり私に合っていない気がした。それでも姉さんはよく似合うと私を褒め、結局私はそのドレスを着て、発表会に出た。

本当はピアノなんか習いたくなかったけど姉さんがやってほしそうにしてたからやることにした。

本当は友達と一緒に外で遊びたかったけど姉さんがおしとやかにしなさいと言うから黙って部屋で本を読んでいた。

姉さんが望むように、姉さんの望む妹を演じてきた。

それが私にできた唯一の姉さんへの恩返しだから。私のためにあらゆるものをあきらめたあの人へ唯一私ができたことだから。

「帰らなきゃ……………」

無意識出た一言。しかしその言葉が頭に響く。

帰らなければ……………あそこへ帰らなければ……………。

気づけば私は最初にいた玄関ホールへと戻ってきていた。自然と足が入り口へと向かう。

頑丈で豪華な装飾が施された大きな扉。まるで外に出ることを阻むかのようにきっちりと閉められたその扉の取っ手に私はゆっくりと手をかける。

そうだ。どうして今まで思いつかなかったのだろうか？ 帰りたいたら自分で帰ってしまえばいいのだ。

住人達の話では案内人……つまり白ウサギなしでは元の世界には帰れないと言っていたが、少なくともここにずっといるよりはいいだろう。いつまでもこんなよくわからない所にいるわけにはいかない。

試しに外に出てみて、どうしても帰れなかった時はこの城にまた戻ってくればいい。

そんな軽い気持ちで私は扉を開けた。

城の外はやっぱりただの森だった。右を見ても左を見ても同じような木だけが永遠に並んでいる。

まずい……。私は足を止め、周りを見渡した。

周りをどんなに必死に見渡しても、そこにはすでに城の影さえ見えない。

まずい……。完全に迷った。

やっぱり、一人で出てきたりしなければ良かった。今ごろそんな事を思ってもしょうがないのだが……

どこに行ってもいいかわからず、それでも足を止める訳にはいかず、私はとぼとぼと森の中を歩く。

変わらない景色をぼんやりと眺めながら、私はふと先ほどの事を思い出す。

白ウサギはあの時……何を言いつもりだったんだろうか？

何か重要な事を言おうとしていた気がする。でもそれを知ることのためらっている自分がいる。

知りたい気持ちも少なからずあったが、それよりも怖い気持ちの方が勝った。

それを知ってしまったら何かが変わってしまう。そんな気がしてならない。

「ひっく……」

ふと人の声のようなものが聞こえ、足を止める。

誰だろう？ わかることは白ウサギ達の声ではない。もっとか細く、弱々しい、まるで泣いているような……

どこから聴こえてくるのだろうか？ 声の聴こえる方へと足を進めて行くと奥の茂みが不自然にゆれた。

そっとそこに近づくと茂みの中に隠れるように一人の少女がうずく

まっていた。

私が覗きこむと少女がゆっくりと顔を上げる。

まん丸としたビー玉のような瞳が涙でゆれ、頬がぬれている。幼なげな少女は私を見ると小さく悲鳴を上げ、体を縮こまらせる。

「貴方……大丈夫？」

「ひっ、ひっく……」

少女は泣いているばかりでなかなかしゃべらない。泣きはらした赤い目が痛々しい。

「ほら、泣かないで。どうしたの？」

姉さんが小さい子によくしたように目線を合わせ、優しく問いかける。

すると少女は幾らか落ち着いたのかか細い声でぼそぼそ言う。

「道に迷っちゃって……」

少女はそう言つとまたわつと泣き出す。

「早く帰らなきゃ……首をはねられちゃつた……」

いったい誰に首をはねられと言つのだらうか？ 親だらうか？ 何て過剰な親なんだらうか。

「ほら泣かないで……お姉ちゃんも迷子なの」

「お姉ちゃんも？」

少女は泣きはらした目でそつと私を見上げる。

「そつ。だからね、一緒に森から出ましょ」

私の手を差し出すと少女はしばらくそれをじつと見つめ、それからゆっくりとその手を取った。

手を繋いで、二人で森の中を進んで行く。一人でいる時よりは幾分か心が楽になり、少し余裕が生まれてくる。

「ねえ、貴方名前は？」

そう言うってから私はあつと思う。普通に名前を聞いてしまったが確かこの世界では名前を不用意に名乗ってはいけないはずだ。まずいことを聞いてしまった。

そう思ったが少女はたいして気にもせず答える。

「名前なんてないよ」

「え？　名前がないの？」

そう問い返すと少女は頷く。

「私はトランプ兵だから……名前がないの……」

トランプ兵？　　また聞き慣れない単語が出てきた。

トランプ兵と言うぐらいだから兵隊なのだろうか？　　しかしどう見ても、こんな幼気の少女が兵隊のようにには見えない。

「えっと、じゃあ……貴方は周りから何て呼ばれてるの？」

「ハートの5」

「ハートの5？」

「そう、ハートの5」

少女は当然のようにそう答える。

ハートの5とは彼女の呼び名なのだろうか？　　それにしても今までの呼び名とどこか違う気がする。

それにトランプ兵って何のことだろうか？



その事について考えていると少女が無邪気な笑顔を浮かべて問いかけてくる。

「ねえねえ、お姉ちゃんの名前は？」

私はその問いかけにあまり深く考えずに答える。

「私はアリスよ」

もはや違和感もなくなったその名前を聞いて、少女はにっこりと微笑んだ。

「そっか、貴方が……アリスなんだ……」

いかれた帽子屋      その4（前書き）

ついに帽子屋登場！

いや、彼が出るまでが長かった。タイトル変えるのもめんどくさいのでやっぱりこのままです。

## いかれた帽子屋　その4

「貴方が……アリスなんだ……」

少女のその一言に私は思わず足を止める。

今までの可愛いらしい声とは違い、どこから出したのかその声は異様に低く、少女のものとは思えないそれに私はひどく驚く。

少女の方を見れば泣いていたはずの顔が今は笑っている。

その笑みにぞくりと冷たいものが走り抜け、どうじに手に痛みが走る。見れば少女とつないでいる手が半端ない力で締めつけられている。

慌てて少女の手を振り払おうとするが少女は更に強く私の手をつかみ、締め上げる。

「痛い……痛いってば……」

少女の方を見れば、少女は嬉しそうに目を輝かせて私の方を見ている。

「お姉ちゃん、私ね、いいこと思いついたの」

「いいこと？」

手が痛い。鼓動が早くなり、本能が危ないと告げている。必死に少女の手をはがそうとするがよけいに少女の指がひどく食い込む。

「そう、アリスの首を……貴方の首をはねれば、私は首をはねられないかもしれない」

「私の首？」

「貴方の首をはねれば、女王様もきつとお喜びなられるわ」

にこにこ笑顔を浮かべて少女はとんでもない事を口走る。呆然と私は少女を見つめる。そうすることしかできなかった。

何を言ってるの？　女王様？　どうして女王様がでてくるの？  
どうして私の首をはねれば喜ばれるの？

待って、城にいた住人達は何て言っていた？新しいアリス？　　じ  
やあ、昔のアリスは？　　私の前のアリスはどうしたの？

体が無意識に震え、恐怖に胸が締めつけられる。自らの考えを信じ  
たくなくて、無理だとわかっていても必死に少女の手を振り払おう  
とむがく。

答えは言わずとしても出ていた。

帽子屋の言っていた言葉を思い出す。アリスを守るために作られた  
城。それはこうゆうことだったのだ。

この世界の住人達は確かにみんな物騒だった。何かあればすぐに武  
器を出すし、撃ち合うし、殺し合う。でも、今まで一度だって私に  
明確な殺意を向けた者はいなかった。

皆、私のアリスだとわかるとそれだけでよくしてくれた。それが当  
たり前だといつの間にかそう思っていた。

「アリス、ねえその首を私に頂戴」

可愛いらしい少女の手にいつの間にか鋭い刃のついた斧が握られた。  
重いはずのその斧を少女は片手で軽々と持ちあげ、私の首に狙いを

定める。

手を捕まれ、身動きのとれない私には為す術などあるはずがない。  
少女の高笑いする声とともに斧が振られる。

まさかこんな変な世界で死ぬことになるなんて……

自分のことなのにどこか冷静にそんなことを思っていたその時、聞き慣れた声が響いた。

「そんなに首が欲しければくれてやる」

私はゆっくりと目を見開く。少女の後ろには見慣れた男が立っていた。

「帽子屋……」

サイズの合わない大きめな帽子に射抜くようにこちらを見つめる茶色の瞳。

何でここに貴方がいるの？

その疑問を口にする前に帽子屋が先に言葉をつなく。

「くれてやる……お前の首をな」

そう言ったと同時に帽子屋は自らの剣で少女の首を容赦なく切り飛ばした。

少女の頭が体と離れて宙を舞う。血が飛び散り、私の顔にその血が飛んだ。ころんと地面に転がる少女の首。それから私の手をつかんでいた少女の手が離れ、ゆっくりと音もたてずに体が転がった。

私は声も出せずにその場に力なくしゃがみ込む。

すぐ横には少女の体が転がり、おびただしい血が斬られた首から流れていた。

「あっ……うあっ……」

生まれて初めて私は人が殺されるのを見た。生々しい血の臭いに襲い来る吐き気、ただただ気持ち悪くて、目の前の光景から目をそらしたいのにそらせない。

あのまま帽子屋が少女を止めなければ、私は死んでいただろう。おそらく、少女は本気でその斧を振り、私の首をはねていただろう。

それでも、それでも……殺すことはなかったのに……

気づいたら瞳から涙が溢れ、震えながら帽子屋を見上げる。

帽子屋は今まで見た中で一番冷たい目をして、私を見下ろしていた。

いかれた帽子屋。彼が言っていた言葉が脳裏に浮かぶ。

「全く……お前ほど愚かなアリスは他にいないな。自ら死に行くなんてどうかしている」

帽子屋はそう言つと呆れたように私を見る。人を殺したというのに自らの罪を彼はこれっぽっちも感じていないようだった。

「何故、あの城から出た？ この愚か者が。あの城にいれば少なくともトランプ兵に命を狙われる事はなかったのに」



冷たい眼差しが私を射抜く。怒っている。彼は今とんでもないほど私にたいして怒っている。

「ト、ランプ……兵？」

「そこに転がる奴のことだ。それがランプ兵。女王の手によって作られた自分の名前さえ失った哀れな奴らだ」

首をはねられちゃうよ。そう言っておびえていた少女を思い出す。あれがランプ兵。名前を失った哀れな存在。

「覚えておけ。こいつらは女王の手先だ。女王の望みどおりにお前の首を狙い、お前を殺すためにあちこちにいる」

私を殺すために？

呆然とする私を帽子屋は冷たく見据えたままわかったかと聞いてくる。

「わかったならもう二度と城を出ないことだな」

聞いているのかと帽子屋は言い、私の顔を覗き込む。何の反応も示さない私に帽子屋はため息をついた。

「何だ？ たかがトランプ兵を一体殺しただけで何をそんなに驚いているんだ？」

俺が来なきや今頃死んでたぞと言われて私は静かに頷く。そう、その通りなのだ。でも……でも……

「初めて……だったの……人がころされるのを見るの……」

いつかこんな場面に遭遇するのではと思っていた。それなりに覚悟もしていたはずだ。でもやはり、実際にそれを目にするともうどうしたらいいかわからなくなってしまい、覚悟していたはずなのに全く駄目だった。

転がる少女の死体。それを見て、更に涙が流れ落ちる。

そんな私をしばらく帽子屋は黙って見ていたが突然、声を出して笑い始めた。

森の中に響く帽子屋の笑い声。私はそれを呆然と見つめる。

何がそんなに可笑しいの？　何がそんなに面白いの？　どうしてそんなにバカにしたような目で私を見るの？

訳がわからない私をよそに帽子屋はしばらく笑うと私のそばに歩み寄り、少女の体を踏んだ。

ぐちゃりと嫌な音がし、血だまりが濃くなる。

「や、めて……」

泣きながら私はそう言つが帽子屋は止めずに何度も何度も踏みつける。ぐちゃぐちゃと音をたて、赤く染まる少女の体。

いや……。見たくない。そう思つてはいるがあまりの残酷な光景に目が離せない。

「おね、がい……もう……や、めて……」

「アリス、よく見る」

見ている。よく見ている。あまりにおぞましいそれに胃の中のものがせり上がり、呼吸するのさえ苦しく感じられる。

しかし次の瞬間、音もなく少女の死体が突然消えた。

それは一瞬の出来事だった。何が起こったのかよくわからない。

少女のながした血は確かに地面に残っている。地面は真っ赤に染まり、少女の死体がさつきまで確かにあったことを証明している。しかし少女の死体はやはりどこにもない。完全にその場から消えていた。

何で？ 訳のわからない私に帽子屋は何かを拾い上げ、それを差し出す。それは少女の死体がちょうどあったところに落ちていた紙ような薄っぺらいものだった。

差し出されたそれを見る。それはトランプのカードだった。ハートの5。

「これが、奴の正体だ」

帽子屋は可笑しそうにそう言い、びりびりとトランプを破く。

ハートの5は帽子屋の手によってびりびりに破かれ、ゆっくりと地面に落ちていく。

粉々になったそれはもうトランプだったかどうかもわからないほどになり、私はそれを静かに見つめた。

「トランプ兵は所詮女王の駒にしかすぎない。名前さえ持たない、使い捨ての駒。そんな奴が一人消えようと誰も気にしない」

「誰も……?」

「そうだ。誰もだ。今頃女王は新しいハートの5のトランプ兵を作っているだろうな」

全く嫌な女だ。そう言って帽子屋はため息をつく。

「どうだ? 納得したか? あいつは死んでもいい、ただの使い捨ての駒なんだ。代わりはいくらでもいる」

「代わり……がいる……」

私は帽子屋の言葉をゆっくりと繰り返した。

いかれた帽子屋      その5（前書き）

やっとでてきた帽子屋。何だか損な役割しか回ってきません。

この章何だか長くなりそうな気がします……。。

いかれた帽子屋 その5

代わりがきくから殺してもいい。それだけを聞けば確かにそうかも  
しれない。でも……それでも……

「そんなの……おかしい……」

今さら偽善者ぶるきはない。あの子を殺さなきゃ私が死んでいた。  
だから帽子屋を責める気もない。

でもその考え方にはどうしても納得できない。

「代わりがいるからって……それはどうせ代わりなんでしょう？  
それはその人じゃないんでしょう？」

だったらやっぱりその考え方はおかしい。

「代わりがいるからって……殺していい理由にはならない……」

それを聞いて帽子屋は目を見開く。重い沈黙が流れ、しばらくして  
帽子屋は吐き捨てるように言う。



「本当にそう思うのか？」

「え……？」

帽子屋は冷たい目で私を見る。その表情は恐ろしいほどに無表情だった。

私は帽子屋から目を離すことができず、また彼も私から目を離さない。どれだけそうしていたらう。しばらくして帽子屋はため息をつき、ようやく私から目をそらした。

「もういい。帰るぞ」

そう言って帽子屋は手を差し出した。

帰る？ どこに？ あの城に？

私は差し出されたその手を見て首を振る。それに帽子屋は目をしかめる。

「駄目……帰れない」

「何を言っている？ このままここにいればまたいつトランプ兵に襲われるかわからないんだぞ？ あいつらは暇さえあればこの辺りをうろろろして、アリスを探している」

「何で……私を……」

「女王がお前の首をはねたがっているからだ」

どうして会ったこともない人に首を狙われなきゃいけないのだろうか？

「私……何もしてないわ！」

「ああ、だがお前はアリスだ。奴らはアリスの首を狙っている。死にたくなければ今後不用意にアリスと名乗らないことだ」

「何よ……それ……」

そんな事は聞いてない。私の体が無意識に震える。

「私……好きでアリスになったんじゃない！　白ウサギが勝手に……」

「そんなことは関係ない。お前がここに来た時点でお前はアリスだ。アリスという役割を与えられたんだ」

「そんな……」

ここに来たのだって私の意思じゃない。白ウサギが勝手に突き落とされたから……私のせいじゃない。

「違う……」

帽子屋は私を静かに見つめたまま何も言わない。

そつだ。今さら何を言ってももう遅い。

「私……どうなるの？」

「何がだ？」

「私……これからこんなふうになんか命を狙われるの？」

さすがのように帽子屋を見る。そうじゃないと言って貰いたい。そんなことはないと言わなければならぬ。彼が言ってくれたらどんなに良かったらうか。

当然ながら帽子屋は何も言わない。彼がそんな嘘をつくはずがない。

今まで何てのんきにしていたのだらう。私はいつの間にかとんでもない事に巻き込まれていたのに。

「アリスの役割って……やっぱり私のまえにもアリスだった子がいるの？」

その問いかけに帽子屋は答えない。その態度がよけいにいらつき、気づいたら怒鳴っていた。

「答えて！！」

「そつだ」

あっさりと帽子屋は認める。信じられない思いで私が帽子屋を見ると帽子屋はため息をつき、仕方なくと言ったかんじで話します。

「お前の前にも何人もの少女がアリスとしてこの世界に迷いこんだ。最初のアリスがいなくなって私達にはアリスの代わりが必要だった」

代わり……。ああ、なんだそうゆうことか。私はやっぱり代わりでしかなかったんだ。

その事実にはあまり衝撃を受けなかった。むしろそれは当然のようには思える。

私はやっぱり特別ななんかではないのだ。貴方は特別ですよ。そう言ってくれた白ウサギを思い出し、私は僅かに笑った。

あの言葉にいったいどれぐらいの真実が含まれていたのだろうか。

「前のアリスはどうなったの？ やっぱり死んじゃったの？」

「いいや、はじかれた」

はじかれた？　　何、それ？　　私かわからないでいると帽子屋が静かに言う。

「白ウサギは案内人で、アリスを選ぶ権限も与えられている。それと同時にあいつが気に入らなければアリスを強制的に元の世界へとはじくことができる。前のアリスは白ウサギによってはじかれた。つまり元の世界に強制的に帰されたんだ」

何、それ？　　何なの？

「何で私は帰してもらえないのにその子は帰してもらえたのよ！」

「知るか！　あんな奴の考えなど俺が知る訳がない！　どうせまた奴の気まぐれだろう！」

「気まぐれで帰さないなんて……そんなのってない！」

「俺に言うな！　さっきから白ウサギ、白ウサギと……そんなに言いたいことがあるなら俺じゃなく直接、奴に言えばいいだろうが！」

帽子屋はそう怒鳴ると私の腕をつかみ、無理やり立ち上がらせる。

「いや、離してー！」

「うるさい！　文句なら城で聞いてやるー！」

「城になんか帰りたくない！　私は元の世界に帰りたいのー！」

「うるさい！　そんなこと白ウサギに言え！　さっきからぎゃあぎゃああとわめくな！」

必死に腕を振り払おうとするが帽子屋は構わず、強引に腕を引いていく。私はやや引きずられるようにして、城へと無理やり連れて行かれる。

「離してー！」

「うるさいー！」

わからない。全く訳がわからない。だいたい何で私を迎えにきたのが白ウサギでなく、帽子屋なのだろうか？

「何で助けになんか貴方が来たのよ!」

私に好意を抱いていなかったはずの貴方がどうして私を助けに来るのよ。責めるようにそう言えば帽子屋が冷たく笑う。

「何だ? 白ウサギの方が良かったか? それともチエシヤ猫の方が良かったか?」

「違う! そうじゃない! 何で私なんかを助けたのよ!」

「何だその言い方は? まるで助けてほしくなかったみたいだな  
!」

「その通りよ!」

かっとなって言ったその一言に帽子屋は足を止める。

帽子屋は振り返り、無表情で私を見つめる。

「どづい事だ?」



その目が今まで以上に冷たく、私は思わず恐怖を抱いた。

いかれた帽子屋      その6（前書き）

色々と忙しかったり、体調を崩したりして更新が少し遅れてしまいました。すいません。

なるべく早く更新できるように頑張ります。

いかれた帽子屋      その6

「どづいう事だ？」

責めるように帽子屋は問い返す。その声がいつもより若干低くめに聞こえる。

心なしかその目も先程までものとは違い、冷たいどころか殺気さえ感じる。

どうやら私はとんでもない地雷を踏んでしまったようだ。しかし今さらひけるはずがない。

「言葉のとおりよ！      いつ殺されるか、わからずに怯えながら生きるくらいなら、死んだ方がましよ！」

しんと辺りが水を打ったかのように静まりかえる。

帽子屋は私の言葉に何も言わないし、何も反応しない。

耳が痛いほどの沈黙が続いた後、帽子屋がそうかと静かに呟く。それとほぼ同時に帽子屋の手が動く。

あつという間の出来事だった。気づいた時には帽子屋はすでに私に向かって、剣を振りおろしていた。

よけることなどできるはずもなければ、悲鳴を上げることさえできない。

驚くほどあっさりと剣は振り下ろされ、刃が当たる。

目の前が真っ暗になる。世界がぐにやりと歪んだ。

あつ…… 私……今、泣いてるんだ……。

涙によって視界が歪み、世界がぐにやりと歪む。あんなに死にたい言っていたのになんて様なんだろう。

体から力が抜け、ゆっくりとその場に座り込む。痛みはない。痛みも感じずに私は死ねたのだろうか？ そう思ったその時、ぱさりと何かが落ちた。

見れば見慣れたくすんだ茶色の髪が落ちている。

私の髪だ……。あつと思つて髪を触る。長かつたはずの髪がそこにはない。帽子屋が切つたのは私ではなく、私の髪だつた。

あの帽子屋が無抵抗な相手に対して外すはずがない。

恐る恐る顔を上げるとそこには帽子屋の冷たい笑みがあつた。私を静かに見下ろす帽子屋。その目がまるで私を嘲るかのように見える。

「死にたいと言つわりにはひどい顔をしているようだが？」

うるさい。そう怒鳴つてやりたいのに恐怖から体が凍りつき、うまく声を出すことができない。

それを見て、帽子屋またバカにしたように笑う。

「どうした？ 死にたかつたんじゃないのか？ 何故、そんなに怯えているんだ？」

まるで私をあざ笑うかのように発せられる言葉。それが悔しくて、でも何も言い返せなくて、私はただ唇を強く噛み締める。

「どうした？ さっきまでさんざん、わめき散らしていたくせに急に静かになっただな」

わざと挑発するような言葉。気づいたらその言葉に噛みついていた。

「何で……何でわざと外したのよ！ そうやって脅しのつもり？ そんな事して……殺すならさっさと殺せばいいでしょー！」

それを聞いて帽子屋は私の方を睨みつける。その目があまりにもきつく、私は押し黙る。

「そんな顔でよくそんな事が言えるな！ 貴様は死にたいなどとさつきから言っているが、実際そんな覚悟もないくせに、いちいち騒ぎたてるな！」

「あるわけないでしょう！ 少し前までは安全で平和な世界にいたのに、どこかのウサギを追いかけたせいでこんな事になるなんて、誰が想像するのよー！」

もう頭が混乱して訳がわからない。半ば八つ当たりに近いとは思いつつ、帽子屋を怒鳴る。

「アリスになんかなりたかった訳じゃないの……私はただ……ただ……」

言葉が上手く出てこない。やりきれない気持ち。自業自得と言われてしまえばそれまでだが、それをどうしても素直に受け入れる事が出来ない。

あつという間に涙があふれ、私は柄にもなく、その場で泣きじゃくる。それを帽子屋は黙って見ている。気のせいかその目が僅かに柔いだように見えた。

「何でよりによって私がアリスなのよ……何でこんなめにあわなきやいけないのよ……」

そう言つて、その場にうずくまり、泣きじゃくる私をしばらく帽子屋は黙って見ていたが、やがてため息をついて言う。

「そんなもの俺が知るか……さつきから、ごちゃごちゃとそんなもの全て白ウサギに自分で聞け」

帽子屋はそれだけいふと突然私の胸ぐらをつかみ、自分の方へと引き寄せる。

帽子屋の顔が目の前にくる。その瞳に私への苛立ちが見てとれる。

「何故外したのか聞いたな。わざと外そうとしたんじゃない。俺はどんなに殺したくてもお前を殺す事ができない。何故だと思う？  
お前がアリスだからだ」

「え……？」

どういふこと？

「お前はアリスだからこそ女王に命を狙われ、アリスだからこそ俺達に守られる。この世界はアリスを中心に動いている。だから俺達はアリスなしでは生きられない。アリスが存在しなければ俺達が存在する意味がないからだ」

帽子屋の指に僅かにだが力が入る。首もとが少しだけきつく締まる。

「俺達はお前を殺せない。アリスを失えばこの世界の存在が危うくなるからだ。だから俺達はお前をあの人に居させたいんだ」

城を見て帽子屋が言った一言を思い出す。アリスを守るための城とはこういふ事だったのだ。



「あの城の住人は皆、アリスを守るためだけに存在している。さつきトランプ兵を代わりのきく存在だと言ったな。それは俺達も同じだ。お前の命を守るために俺達は自分の命を犠牲にせずにはいられない。俺達も奴らと同じように代わりのきく存在でしかないからな」

「何言つて……そんな事……」

不意に首もとがさらに締まる。息苦しさを覚え、呼吸するのさえつらく感じられたが、それでも私は帽子屋の言葉に懸命に耳を傾ける。

「二度と死にたいなど言うな。この世界にはどうしてもアリスが必要なんだ。そのためなら俺達は何でもする。お前には悪いが、あの白ウサギが気に入ったアリスがようやく現れたんだ。早々、俺達はお前を帰らせる訳にはいかない。そのために俺達は多くの犠牲を払ってきたんだからな」

ゆっくりと首もとから手がはなれる。

私は驚いたように帽子屋の方を見つめる。最初に比べ、今はだいぶその表情が柔らかいで見えるように見える。

いや、柔らかいのではない。怒っていたはずのその顔がどこか苦し

げで悲しそうに見えた。

帽子屋がここまで表情をあらわにするとはいったい何があったと言  
うのだろつか？ 私はそれを聞かずにはいられなかった。

「犠牲って……いったい貴方達は何を失ったの？」

しかしこの質問はいけなかった。帽子屋は目を見開き、しまったと  
でも言いたげな顔をし、その場に立ち尽くす。

私の聞いた内容にあきらかに帽子屋は動揺している。

「帽子屋……？」

その場に固まり、身動き一つしない帽子屋を見て、私はどうしたら  
いいかわからず、おろおろとする。何だかいけない質問をしてしま  
ったようだ。

しばらくして帽子屋は無言のまま私に背を向ける。

「帽子屋……」

「何も言つな。答える気はない」

帽子屋は吐き捨てるようにそう言つと私を置いて、さっさと行つてしまふ。

「ちよっ……」

置き去りされる。そう思った時、帽子屋は立ち止まり、ゆっくりと振り返つた。

「何をしている？　まだ駄々をこねるつもりか？　俺に引きずられて城まで行きたくはないだろう。さっさと来い」

乱暴な言い方だが口調は先ほどより幾分か優しくなつたように思える。

私は慌てて立ち上がり、帽子屋の隣に並んだ。

いかれた帽子屋　その7（前書き）

あれ？　更新早くできるように頑張るとか前の前書きで書いてな  
かったっけ？

全然早くなってないよね。むしろ遅くなってるね。

すみません（泣）

## いかれた帽子屋 その7

無言で歩く、私と帽子屋。

ついさつき、とんでもない言い争いをしたばかりだったが、今はあの時ほど空気がきつくはなかった。私は帽子屋の横顔をぼんやりと眺める。

この国の住人は私が見るからには皆、美男、美女だ。白ウサギほどではないが帽子屋もまたその顔が整っている。中途半端に見える髭も見る人が見ればなかなかかつこよく見えるのだろう。

おじさんぐらいの年齢かと思っていたがもしかしたらもっと若いのかも知れない。まあ、どうせこの国では年齢など意味がないものなのだが。

しばらくそんな事を考えつつ、帽子屋を見てると私の視線に気づいたのか帽子屋がこちらを見た。

「何だ？ まだ何かあるのか？」

まだ何かあるのか？ ありすぎでしょっ……

まだまともに質問に答えて貰ってないし、これから私がどうなるかもわからない。

私はしばらく帽子屋の横を歩く。少ししてから私はゆっくりと口を開いた。

「私……婚約者がいたの」

唐突に何を言ってるんだとか言われるかと思っていたが、帽子屋は特に気にした様子もなく、そうかとだけ言った。

「私より3つぐらい年上で、姉さんの恩師の人の息子さんで……姉さんもいたく気に入ってるみたいだった」

そう、姉さんはその人を本当によく気に入っていた。何かとあの人の話を私にしては私に素敵な人だと紹介した。

「会ってみたら優しくして、明るくて、顔も良くて、私にはもったいないほどの人だった」

家柄もよく、裕福な家庭で将来を心配する必要もない。文句のつけようなど何一つなかった。

姉さんの意見もあって、すぐに私とその人は婚約することに決まった。

私もそれを承諾した。断る理由なんかなかった。

「姉さんは私に結婚して貰いたがってたの。結婚して幸せになってほしいって」

女性にとってはそれが一番いいことだと、それが一番の幸せだと返事を洩る私に姉さんは何度も繰り返し返してそう言い聞かせたのだ。

「本当なら来週あった私の誕生日パーティーで私は正式にその人と婚約するはずだった……」

どこか他人事のようにそう言つと帽子屋はそれに目を細める。

「何だ。自分のことなのにえらくどつどつでも良さそうじゃないか」

「そんなことはないけど……」

そうゆうつもりじゃない。ただ……

「嫌じゃなかった。ただ……本当にこれでいいのかなんてずっと思ってた……」

相手は姉さんが言うとおりとでも優しい男性だったし、私の事もすぐに気に入ってくれたようだった。でも、何だろう。何だか、その日が近づけば近づくほど妙な胸騒ぎにおそわれ、突然訳もなく不安にかられて、本当にこれでいいのかからなくなってしまつて、でもそんな事ももちろん姉さんには言えなくて、誰にも言えるはずがなく……

「今、思えばきつと結婚することが怖かったんだと思う……」

嫌な訳ではない。断る理由もない。でも不安で怖くて、だから逃げだしたくなって……

そんな時白ウサギが現れて……

私は白ウサギを追いかけてしまったのだ。

どこでも良かった。そこから逃げられるなら、本当はどこでもかまわなかった。



「今思えば何てバカなことしたんだろう……」

そんなことさえしなければこんな事にならなかったのに。

帽子屋はそれに何も言わない。その表情はやっぱり不機嫌そうなままで、何を思ってるかなんて私には到底読みとることができない。

ふとある事を思い出し、私は帽子屋に声をかける。

「何で迎えに来たの？」

私の言葉に帽子屋は不機嫌そうな顔をさらにしかめる。

「貴様……まだ言つか……」

帽子屋の声がやや低くなる。それに慌てて私は続ける。

「その……助けに来て欲しくなかったとかじゃなくて……私誰にも言わずに出てきちゃったし……」

遠慮しがちにそう言つと帽子屋はしばらく黙り込む。

また怒らせてしまったのかと思つてしていると帽子屋が忌々しそうに呟く。

「たまたまだ。あの女の気配を感じて出てきたら、お前がいた。それだけだ」

あの女？ いったい誰の事を言っているのだろうか？

「あの女って……」

「女王の事だ……」

「女王って……女王様!？」

一国の主をあの女よばわりにするとは……帽子屋のあまりの度胸の良さに私は言葉を失う。

「奴の気配を感じて追いかけてきたんだが、やはりそう簡単には姿を表さないな。俺がそこに行った時にはすでにあの女はどこにもいなかった」

「いなかったって……会ってどうする気だったのよ？」

「殺す気だった」

「なっ……！？」

事もなにげにそんな事を口にする帽子屋に私は驚きを隠せない。

「一国の女王をあんな女よばわりにしたかと思ったら、さらには殺そと  
さえしているだなんて……」

「帽子屋……貴方、大丈夫？」

「何がだ？」

「何がって……色々……」

普通、そんな事を口にしただけで罪にあたる。

「女王様なんでしょ？」

「たかが女王だ」

忘れてはいけない。相手は常識の全く通じない世界の住人なのだ。

当たり前だが、私の常識など通じるはずがない。

「貴方って、どうしてそこまで女王様を毛嫌いしてるの？」

若干、途方にくれつつそう言うと、帽子屋はかわいた笑みを浮かべる。

「毛嫌い？ 違うな。そんなもんじゃない。俺はあいつをこの手で殺してやりたいとずっと前から切望している」

帽子屋の目が冷たく光る。

「あの女をこの手で殺す……それが俺の最大の望みだ」

ぞっとするほどの殺意を浮かべて帽子屋はそう言って笑う。その笑みが恐い。

「帽子屋？」

恐る恐る、名前を呼ぶと帽子屋はすぐにいつもの不機嫌そうな顔になる。

私が口を開きかけるとそれよりも早く帽子屋が言う。

「言うておくが、あの女と何があったかなんて聞くなよ。あの女の事など話すだけで苛々してくる」

帽子屋はそう言って、話は終わりだとばかりにさっさと歩きだす。しばらくすると森がはれて、見慣れた城壁が見えた。

「結局戻ってきちゃったな……」

私は特に深い意味もなくそう呟く。それに帽子屋は呆れたようなため息をつく。

「全く……あんなさんざんなめにあっておきながらよくそんな事が言えるな」

呆れたような帽子屋の一言に私はにやりと笑う。

「神経が太いのは生まれつきなの」

「度胸がすわっていて何よりだ。それぐらいでないとこれからは乗り切れないからな」

「度胸がよくて悪かったわね……」

「いちよ、誉めているんだ」

全く誉められている気がしない。

ようやく城の入り口が見えてくる。ふと帽子屋が足を止めた。私も止める。

誰だろう？ よく見れば、城の扉に寄りかかるようにして、誰かが

そこに立っていた。

「やあ、アリス」

声をかけてきた相手があまりにも予想外で、私は目を丸くし、相手を見つめる。そんな私を見て、三月ウサギは楽しげに笑った。

いかれた帽子屋 その8 (前書き)

久しぶりの三月ウサギ登場。もしかしたら最初の頃と言葉づかいが違つかもしれませんが気にしないで下さい。気にしたら負けです。



いかれた帽子屋 その8

「やあ、アリス」

何故そこにいたのかよくわからないがそこには笑顔を浮かべた三月ウサギが立っていた。

「三月ウサギ？」

そんなところで貴方は何してるの？

「おい……そんなところで何してる？」

私が聞くよりも前に帽子屋が聞いた。

「何してる？ 見てわからないかい？ アリスを待っていたんだよ」

三月ウサギは爽やかな笑みを私に向けながら答える。私を待っていた？

「君が外に行くのが見えてね。ずっとここで帰って来るのを待ってたんだ」

「お前……アリスが外に出て行くのを黙って見過ごしたのか！？  
こいつはあと少しで死にかけたんだぞ？」

「別に心配してなかった訳じゃないさ。ほら、証拠に私はここでずっと君らが帰って来るのを待っていただろう？ 私も追いかけてよとはしていたんだが、途中で君が先に外に出ていた事を思い出してね。君なら一人でも大丈夫だと思ったんだよ」

そんな三月ウサギの言葉に帽子屋はひどく不快そうな顔をする。

「この俺がアリスを見捨てるとは思わなかったのか？」

「役割上、君だってアリスを守らなきゃならないだろう？ 現に君はアリスを助けてきたじゃないか」

それにと三月ウサギは付け足す。

「君は優しすぎるからね。アリスを見捨てる事なんかどうせできないと思っただよ」

三月ウサギのこの一言に帽子屋はますます顔をしかめる。どうやらそうとう苛ついているようだ。見ただけでわかる。

それでも相手にするだけ無駄だと判断したのか帽子屋は三月ウサギに何も言い返さず、さっさと城の中へと入って行ってしまふ。

「どうせお茶会の準備を眠りネズミに押し付けて、やることなどないんだろっ？ 後はお前が勝手にやれ」

そう言って立ち去りかけた帽子屋の腕を三月ウサギがつかむ。

「何だ」

「帽子屋……アリスの髪を切ったのは君かい？」

三月ウサギは静かにそう尋ねた。声はひどく穏やかだが、その目はキラキラと血に飢えた獣のように光っている。

「だとしたら何だ？」

「さあ、どうしようかね？」

そう言いつつ、その手はすでに武器を出そうとしている。私は慌てて二人の間にわって入る。

「ちょっと、やめてよ」

ここでまた乱闘になるのは嫌だ。何としても撃ち合いはさけたもらいたい。

そんな私を見て三月ウサギはひどく不思議そうな顔をする。

「アリス……何で君が帽子屋をかばうんだい？」

「別に……」

かばっている訳ではない。確かに髪を切られたのは少しばかりショックだったけど私にも非がなかった訳ではないし、別に髪の長さなどはつきり言ってどうでもいい。伸ばしてたのだって姉さんに言われたからだ。

「とにかくもついいから……」

それでもまだ不服そうな三月ウサギ。それを不機嫌そうに見る帽子屋。

この二人……仲が良いらしいがとてもじゃないがそうには見えない。

あれ？ でも確か三月ウサギは帽子屋に名前を名乗ってたんじゃないか？  
なかつたけ……

名前を名乗るといふ事はそれだけの仲のはずだが……

「あー……綺麗なアリスの髪が……こんなことになるなんて……」

三月ウサギは何故か私以上にショックを受けているようで何度もそう言い、やたらと悲しんでいる。

はっきり言って、何でそこまで気にするのかよくわからない。

「別にいいの。私、特に気にしてないし……」

「気にしてない？ 私が気にしているんだ！ どうするんだ、アリス？ こんなに短くしてしまって……」

どうすると言われても、今頃どうしようもない。

「ああ……私は長い方が好みなのに……」

そんな事であんなに悲しんだの！？ 正直どうでもいいですけど！

「いや、もちろん今でも十分可愛いが……ショートヘアが嫌いだとかそうゆう訳じゃないんだが……」

誰もそんなことは聞いていないし！

話が確実にそれてきたな……

はっとして周りを見渡せば、さっきまでいたはずの帽子屋がどこにもいない。

ま、まさか……逃げた!?

三月ウサギと二人だけとか、白ウサギとはまた違う怖さを感じる。

そんな事を考えていると突然、ぬれたハンカチを顔に押し付けられた。

「え?　　ちよつ、ちよつと!?!」

あまりのことに私が反応できないでいると、三月ウサギは容赦なく押し付けたハンカチで私の顔をごしごしとふく。

「いたつ!?!　　ちよつと、何!?!　　何なの!?!」

「動くじゃない。女の子が顔に血なんかつけるものじゃないだろう?」

何の事かすぐにわかった。帽子屋がトランプ兵を斬った時に飛んだ返り血のことだ。

そう言えばまだそのままだった。見れば服にも血しぶきがついている。

それにしてもどこでぬれたハンカチなんか用意してきたのだろうか？

三月ウサギは顔を丁寧に拭いてから私の手をひいて、歩き出す。

「どこ行くの？」

「血まみれのままじゃ、気持ち悪いだろう？」

確かに……

体を洗いたいし、できれば服もかえたい。

私は仕方なく三月ウサギの後に続く。別に手をつなぐ必要はない気がしたが、三月ウサギがそうしたいならそうさせた方がいい。

へたに怒らせてライフルでも構えられたらもう止めようがない。

「何があったんだい？」



「え？」

「君が血まみれだなんて、本来あっちゃいけないことだよ」

三月ウサギは静かにそう言った。城の外に出たのを怒っている訳ではなさそうだが、やはりどこかその声に責められている気がする。

「帽子屋は血まみれになってもいいわけ？」

「彼が血まみれなのはいつもの事だよ。彼の役割はどうでもいい奴らをこの城に近づけさせない事だからね。彼が血まみれなのは真面目に役割をはたしている証拠だよ」

三月ウサギがくすりと小さく笑う。

「なにせ、彼はいかれた帽子屋だからね」

何のためらいもなく少女を斬り捨てた帽子屋を思い出す。

無表情で剣を振るう帽子屋。しかしそんな彼に私は助けられた。

だからだろうか？ いかれた帽子屋というどこか蔑むような言い方に私は何故だかむっとして言い返す。

「いかれた帽子屋なんて言って……この世界の住人はみんないかれてるじゃない」

その一言に三月ウサギは目を見開き、次の瞬間声を出して笑い始めた。

「そうだな。この世界はとっくの昔におかしくなっているんだよ。アリスがいなくなったその日からね」

そう言って、また三月ウサギは笑い出す。その笑い声はしばらくおさまりそうになかった。

いかれた帽子屋　その9（前書き）

この章はこれで終わりです。次回より新章の予定。ここからは三月ウサギが中心です。

いかれた帽子屋      その9

三月ウサギにひきつられてやってきたのは城内にある、とある一室だった。

「これ、ひょっとして全部客室なの？」

端から端までずらりと並んだ部屋。いくつぐらいあるのかはわからないが、とりあえず見えるだけで60くらいはあるだろうか？

「いや、客室と言うよりは……まあ客人がきたら泊まるんだが客人じたいめつたに來ないからなあ」

そうだろう。こんな物騒な城にやって來る人などそうそういない。

「さあ、アリス。ここだ」

そう言って三月ウサギはある部屋の前で立ち止まり、扉を開けた。

高級ホテルの一室のような部屋に少したじろぐが三月ウサギは笑顔で手招きする。

「大丈夫だよ。ここはアリスの城だ。君が遠慮することなんかない」  
そうは言われても……普通は遠慮するだろう。とは言え、このまま入らないわけにもいかない。

「おじやまします……」

中は予想通りの豪華さで、当然そんなものに慣れているはずがなく、何だか落ち着かない。

そんな私をよそに三月ウサギはさっさと部屋の奥へと進み、部屋のすみに置かれていたクローゼットを勝手に開け、中を物色し始めた。

「ちょっと、何してるのよ?」

慌てそう言つが三月ウサギは別に気にした様子もなく、クローゼットの中をあさる。

「あんまりいいのがないな。やはりもっとフリルのついたやつの方が……」

「ねえ、聞いている？」

もちろん、あの三月ウサギが人の話を聞いているはずがない。

「色はどうする？　やはり青？　いや、アリスなら赤や黄色も

あいそうだな」

「もしもし？　三月ウサギ？」

全く聞いてない。

諦めかけてため息をつくとき三月ウサギがようやく私の方に顔を向けた。

「アリス、お風呂に入っておいで。あんな奴らの血なんかつけていれば、それだけで君の品性が疑われてしまう」

「品性って……貴方それはいくら何でも……」

言い過ぎだ。そい言おうとしたがすでに三月ウサギは私から視線をずらし、クローゼットの中に頭を突っ込んでいる。

そんな姿を見たら、話しかける気も失せる。

仕方なく、私はどうか三月ウサギがまともなセンスを持っているように祈りつつ、風呂場へと向かった。

「ちょっと三月ウサギ!」

「どうしたんだね? そんな大きな声を出して。まあ、君に大声で名前を呼ばれて、悪い気はしないがね」

どこかで聞いたようなきざなセニフをあえて無視し、私は精一杯三月ウサギを睨みつける。

しかしやはりと言っべきか、何と言っか、そんな事で怯むような相手ではない。

睨みつける私を見て、三月ウサギが目を輝かせる。

「やっぱり、私のセンスは間違いない！ いや、さすがはアリスだ。いや、実に良く似合っているよ！」

体を洗い、風呂場を後にし、出てくると脱衣所に三月ウサギが用意した新しい服が置かれていた。

さすがは三月ウサギが選んだものだ。可愛らしい黄色のネグリジエ。正直、私の好みとは全く違う。

「似合っていない！ 全然似合っていない！」

「似合っていると私が言ってるんだから似合ってるに決まっているだろっ。」

「いったいどうゆう道理でそうなるんだ！？」

しかもこのネグリジエ、三月ウサギの趣味か、やたらとリボンなどがついているし、ひらひらとしている。

「やっぱりこんなの無理！ 他のにして！」



「君に選ぶ権限はない。あるのは私だ。君は黙って着るんだ」

「何よ、その勝手な権限！ 私が着るんだから普通決めるのは私でしょう!？」

「そうか、そうか、あれだな。文句言いながらも実は気にいってる。そうなんだろう?」

「何でそうなるの!？」

思いつきり問い詰めてやりたいところだが、だいぶ疲れいることもあり、そんな事するような元気はもう残っていない。

疲れた。今日1日でどれだけの力を使ったんだろう。色々ありすぎて、もう余力さえない。

しょうがない。私はため息をつき、すごすごと三月ウサギのところへ行く。

「ねえ、私の服はどうしたの？」

脱衣所に置いてあったはずの私の服がなくなってにいたのを思い出  
し、試しに聞いてみる。

「ああ、あれ。捨てたよ」

「捨てたって……ええっ!？」

「あれだけ血がついてしまったら、もう落ちないだろう?」

「そりゃあ……そうだけど……」

だからって何も下着まで捨てなくてもいいんじゃないの!?

探してみたが下着も新しい物が置かれていた。

私の下着……まさか……ね。

確かにあれだけ返り血がついていては洗ったとしても全ては落とせないだろう……下着に関しては……うん、捨てられてないと色々困る。

「アリス、君は何を着たって似合うよ」

三月ウサギはそう言うてにっこりと笑う。有無を言わせぬその笑みに無言の圧力を感じる。

ああ、もうどうでもいいや。どうせ寝るだけだし。

相当疲れたのか、だんだん眠気がやってくる。私は目をこすりながら部屋に一つ置かれていたベッドに近づく。

「私ちょっと寝るけど……貴方はどうするの？」

「そうだな。君の可愛らしい寝顔でも眺めていようかな？」

「自分の部屋に帰ってちょうだい」

はつきり言ってそんな事されても気持ち悪いだけだ。変態は一人いれば十分。これ以上変なものが増えるのはごめんだ。

「あはは。そんな冷たい事を言わないで。安心してくれ、私は白ウサギじゃないから君に変な気を起こしたりしないよ」

当たり前だ。おこされたら困る。

「冷たいって何よ。当然の主張でしょう？ 寝顔なんか人に見られ  
たって嬉しくもなんともないんだから」

「私は嬉しい」

「貴方が嬉しくても私はちっとも嬉しくないの」

普通言わなくてもわかるだろう。そう言えば三月ウサギはくすくすと笑う。

「すまないね。私は普通ではないんだ」

「そつね……」

確かに、三月ウサギに普通を求めるなんて無駄だ。それでもこのま

まほっという寝る訳にはいかない。

そう思っていたのに突然視界がぐるりと回る。

あれ？ 突然、強い睡魔に襲われ、立ってることもできず、気づいたら私はベッドに倒れこんでいた。

眠い……スッゴク眠い。

どうにもできない睡魔に戸惑っていると三月ウサギがくすりと笑う。

「アリス、寝なさい」

「でも……」

「大丈夫。私は本当に何もしないよ」

そう言って三月ウサギはベッドに寄り、私に布団をかけ、幼い子にするように私の頭を優しく撫でる。

「瞼が重い。頭がぼおっとする。どうしたんだろっ？ 本当に眠い…」

「ねえ、三月ウサギ」

「うん？」

「貴方は本当に寝ないの？」

瞼を閉じ、うとうとしながら気になってそんな事を聞いてみる。

「ああ、そうだよ」

三月ウサギが笑う。

「私は眠るのが大嫌いなんだ」

意識がもったのもそこまでだった。三月ウサギの声が遠のき、あっという間に私は眠ってしまった。

第五章 三月ウサギの戯言 その1 (前書き)

なんか章を重ねることにこの不思議の国の住人達の変態度が上がる  
気がします。

気づけばアリスの周りには変人ばかりですね。

第五章 三月ウサギの戯言 その1

カチャカチャと耳障りな音が聞こえる。

何だろう？ ゆっくりと音が聞こえてくる方へ顔を向ける。

真っ白なテーブルクロスに大きな大きなテーブル。そのテーブルに溢れんばかりに並べられたお菓子と可愛いティーカップ。

あれ？ これ……どこかで見た事ある気がする。

あっ、わかった。お茶会だ。三月ウサギが最初に招いてくれたお茶会の会場だ。

テーブルに目をむければ、そこにはやはり三月ウサギの姿があった。その隣には眠りネズミが、何故だかその向かい側には帽子屋の姿がある。

「全く、紅茶の茶葉を間違えるなんて……有り得ない。通常有り得ない失態だよ、帽子屋」



「お前がちゃんとメモしないからいけないんだろう？　俺はメモしろとちゃんと言ったからな！」

帽子屋はいつものように不機嫌そうにそう言い返す。

若干、ばつが悪そうなどころを見れば、間違えた事への責任はいちよ感じていようだ。

しかし三月ウサギはそれを責めるようにあるいは拗ねたようにぐじぐじと言う。

「ネズミはメモなんかしなくてもちゃんと買ってくる」

「なら俺じゃなくて、ネズミに頼めば良かったらうが！！」

「君が手伝うと言うから任せただ！！」

怒鳴りあう2人。さらに白熱する。

「お前が早口で次々言うから訳がわからなかったんだ！！」

「私のせいだと言つのかね!？」

「始めからそう言ってるだろう!！」

その言い方にいらつとしたのだろう。三月ウサギは手近にあった茶菓子ののっている皿をつかむとそれをあるところか、帽子屋に向かって投げつける。

帽子屋はそれを間一髪でよけ、皿は地面に落ち、音をたててわれる。

今度は帽子屋が負けじとそばにあったティーカップを三月ウサギに投げつける。

さつきした耳障りの音の原因はこれだ。何だかバカみたいに幼稚な争いだ。

「お、おい!？」 紅茶がかかったじゃないか! どこに紅茶の入ったティーカップを投げる奴がいるんだ!！」

「ここにいるだろう! お前だって茶菓子ののった皿を投げたじゃないか!！」 おかげでせつかくの茶菓子がぐちゃぐちゃだ!！」

「こんなにあるんだからいいだろう！ どうせいつでも食べきれなくて残すはめになるじゃないか！」

「食べ物は大事にしろ！ だいたい、食べないくせにお前がこんなに茶菓子を用意するからいけないんだろう!？」

「君だって紅茶を投げたくせに、今さら何を言うんだ!! だいたい、お茶会と言えばたくさん茶菓子がいるものなんだ！ 誰か来る可能性だって……」

「来るか！ 誰もこんなめちゃくちなお茶会来る訳ないだろう！」

「毎回君は来ているだろうが！」

飛び交う食器と怒声。何だろ……なんかいつもとちょっと違う気がする。

その時、今まで黙っていた眠りネズミが我慢できないという感じに大きな笑い声を上げる。

それに二人は食器の投げあいを止め、視線を眠りネズミへとやる。

「何が可笑しいんだ？　眠りネズミ」

帽子屋が不機嫌そうにそう聞くと眠りネズミは笑いながら謝る。

「ごめん、ごめん。でも可笑しくて……あはははっ」

声を出して笑う眠りネズミに帽子屋はいかにも不愉快といった顔をする。

「二人って本当に仲いいよな」

眠りネズミが笑いながらそう言うと帽子屋が顔を青ざめ、必死に否定する。

「いいわけあるか！　こんな奴と誰が仲いいものか……」

「ひどいじゃないか！　そんな言い方ないだろう！？　ああ、傷ついた。今ので繊細な私の心が傷ついたよ」

大げさにそう言い、三月ウサギは落ち込む素振りを見せる。

「お前のどこが繊細な心なんだ？　わかりやすく、端的に教えてもらいたいな」

「こんなにも繊細じゃないか！？」

「どこがだ？」

それにまた三月ウサギがわざとらしく泣き出し、それを見てくすくすと眠りネズミが笑う。

何だか……別人みたいだ。私の知ってる帽子屋はあんなふうに三月ウサギとじゃれあったりしないし、三月ウサギも帽子屋に対してあんな態度をとったりはしていなかった。

前にもお茶会に呼ばれたが、その時だって帽子屋と三月ウサギはこんなふうに親しげではなかった。

それに眠りネズミの印象も何だか違う。前見た時は三月ウサギに対して怯えたような態度をとっていたのだが、今はひどく仲よさげに

見える。

本当はこの三人こんなにも仲が良かったのだろうか？

不意に三月ウサギが顔をこちらへと向けた。私の方を見て笑う。

「やあ、アリスじゃないか！ 遅いよ！ 実に遅いじゃないか！」

「遅いって…… たった30分だろう？ 全く、うるさい奴だ」

「うるさいのは君だ。さあ、アリス。こっちにおいで。君のために美味しい茶菓子をたくさん用意したんだ」

三月ウサギが笑いながらそう言うと眠りネズミが笑顔でつけたす。

「半分以上、帽子屋と三月ウサギが投げってしまったがね」

その言葉に三月ウサギはややむっとして言い返す。

「悪いのは帽子屋だ！」

「黙れ、もとはと言えばお前が……」

「こらこら、アリスの目の前でケンカなんかするなよ」

眠りネズミがくすりと笑い、私を手招きする。

「おいで、アリス。君の好きなチーズケーキを用意してあるんだ」

私は誘われるがままに一步、足を踏み出した。

「…?」

ゆっくりと目を開く。見慣れない部屋に一瞬ぎよっとしたが、すぐ

に客室に連れてきてもらった事を思い出した。

ということはあれは夢だったのだろうか？

楽しげに笑いあい、お茶会をする3人。

そうだよね……普通あんな3人、有り得ないよね。

ついに夢まで不思議の国の住人達の影響を受け始めたようだ。

ため息をつきつつ、もう一度寝直そうと布団にくるまる。

そう、この国に来て良かった事は例え何度寝直したとしても誰も怒る人がいない事だ。

いくら寝ても誰もとがめないし、そう思って抱き枕にしがみつく。

あれ？　抱き枕なんかあったけ？

閉じかけた目を開け、抱き枕だと思っていた物を見る。



「……………」

頭が真っ白になった。

「きゃあああああつ！」

抱き枕だと思っていた存在が私の叫び声にむっくりと体を起こす。

「そんなに叫んでどうしたんだね？ アリス？」

何がどうしたんだねだ！？

私は隣にさも当然のようにいる三月ウサギを信じられない思いで見つめる。

抱き枕だと思っていたのは勝手に布団に入り込み、隣に寝ていた三月ウサギだった。

「いやあああ！」

私は力の限り、三月ウサギを殴りつけた。

三月ウサギの戯言　その2（前書き）

誰かに髪を切ってもらおうのって不安になりませんか？　特に知り合いに切ってもらおうのは怖いですね。アリスもきつと色んな意味で怖かったんだと思います。

## 三月ウサギの戯言 その2

「アリス、知っているかい？ 私の呼び名の由来はね、三月のウサギは発情期で狂ったように周りを跳ね回っているらしく、三月のウサギのように狂っている奴という意味で私の呼び名は決まったんだ。三月のウサギのように狂っている……だから三月ウサギ。全く失礼な話だと思わないか？ 三月ウサギだなんてしかも初対面いきなりそう呼ばれたんだぞ？ いきなり初対面で狂っていると言われたようなものだ。全く、あの子には本当に頭が上がらない。あの子のネーミングセンスときたら……まあ、そんなところがかわかったのだが、それでだ、アリス。私が何を言いたいかって言うとなあ。とりあえずそのスタンドを下ろしてくれないかね？」

三月ウサギは額から血を流しながら、そう言って笑う。

「いやー！」

はつきりそう答えて私は持っているスタンドで再び三月ウサギを殴る。

「あたたたっ！！ アリス！ 痛い、痛いぞ！ 君という奴

は少し乱暴じゃないか！？」

「うるせー！」

変人なんか情けをかけてやるほど私は優しくない。

私の寝ているうちに三月ウサギはあろうことかベッドに潜り込み、隣で一緒に寝ていたのだ。

もちろん、男の人と一緒に寝た事など今まで一度だってない。

私は驚きとショックのあまり、ベッドのすぐそばに置かれていたスタンドをつかむとそれで三月ウサギを殴りつけた。

もちろんそれぐらいで相手が死ぬような奴ではないと想定したうえで行動だ。

最初の一撃こそまともに三月ウサギは受けたものの、その後はよけられている。おそらくその気になれば三月ウサギは私を抑えつけ、スタンドをよこどる事ができるだろう。

そうしないところを見れば、少しは悪かったと思っているという事だろうか？

それでも……

「許せる訳ないでしょうが！」

いくらなんでもデリカシーが無さ過ぎでしょう！

「信じられない！　本当に信じられない！　普通女の子の隣で寝ないでしょう!?!?」

「無防備に女の子が寝てるんだぞ！　男として普通、一緒に寝た  
いとか思うものだろう!?!?」

「それじゃあ、たんなる変態じゃない!」

「安心してくれ。私は君の体に指一本触れていない。君の体には全く興味ないからな」

笑顔で宣言されれと逆にむかつく。

「何よ！　どうせ私は胸が小さいわよ!」

「胸がいくら小さいからって落ち込む事はない。少しない方が子供っぽくて好きだという男性だって世の中にはたくさん……あ、アリス！ そんなに強く叩かないでくれ！ 頭が痛い！」

「うるさい！ 三月ウサギのバカー！」

人の気にしてる事をよくもずけずけと本当にデリカシーのない。

とりあえず、腕が疲れてきたし、三月ウサギも本気で痛がってようだから殴るのは止めてあげた。

それでもまだ恨みがましく見ていると三月ウサギは困ったように笑う。

「そんな顔するもんじゃないよ。君には笑顔が一番似合うんだよ」

誰のせいでこんな顔してると思ってるのよ！

三月ウサギは立ち上がるとソファアーの上に置かれた真新しい服をつかみ、それを私の方に差し出す。

「何……それ……」

「君の着替えだ。前のは捨ててしまったからね」

着替えて……。私は差し出された物にちょっとたじろぐ。寝間着として出されたこれもどうかと思ったが差し出されたものはそれ以上だ。

「これって……エプロンドレスってやつ？」

「そうだよ。大丈夫。私が選んだ服だ。絶対に似合うよ」

だからその根拠は何なのさ。

フリルがやたらとついた青いエプロンドレス。私には全く合わないような可愛いらしいドレスだ。どうしてこつゆうものばかり三月ウサギは選ぶのだろうか？

私に対しての嫌がらせか。それとも本気で服のセンスがないのか。

そうは言ってもここまでされて着ない訳にもいかない。私は諦めて、



それを受け取る。

「こんなの着たことない……」

「アリスはそれを着る。そうゆうものなんだ」

「どづいつものよ」

相変わらず、話が上手くつながらない。

「わかったわよ。これを着ればいいんでしょう？　そうすればいいんでしょう？」

半ばやけくそになってそう言う。どつせ相手は私がいくら反論しようと聞きもしないだろう。

「じゃあ、着替えるからさっさと部屋から出て」

当然人前で着替えるような趣味は私にはない。

しかしそう言っても三月ウサギはなかなか動かず、じっと私の顔を

見つめている。

「な、何？」

なんか嫌な予感がする。

「せつかくだから私が手伝ってあげようか？」

爽やかに笑ってそう言った三月ウサギの顔を私はぐーで思いっきり殴った。

「……」

「いや、なかなか似合っじゃないか。さすがはアリスだな。とてもよく似合っている」

「それはどーも」

はつきり言っつて全く嬉しくない。だいたい三月ウサギの言っつてる言葉なんて信用できるはずがない。

ちらりとやや強引に着せられたエプロンドレスを見る。青という色は嫌いじゃない。ややひらひらしてるがそれさえ気にしなければなんとか我慢できそうだ。

こんな姿を姉さんに見られなくて良かったと心底思う。

もしも見られていたら、大はしゃぎでカメラを構えられ、永遠と写真をとられるに違いない。

想像するだけで疲れる。

「アリス、ちょっとおいで」

三月ウサギは手招きし、洗面所へと私を連れて行く。

「何？」

鏡の前に私を立たせると三月ウサギはどこから取り出したのかハサミを取り出し、構える。

「ちょっと!?!? 貴方何して……」

「髪、そろえた方がいいだろう? 帽子屋に切られたままじゃ、中途半端でカツコ悪いだろう?」

そう言って三月ウサギは笑顔でハサミを私の髪にあてる。

「待つて! そんなのやってもらわなくたって自分で……」

「遠慮するんじゃない。それぐらい私がやってあげるよ。私を誰だと思っっているんだ? 三月ウサギだぞ」

だから必死に止めてるのよ!

「そんな……別にこれぐらい私は気にならないし……」

「君が気にならなくても私が気になる！」

「何で!？」

「そういうものなんだよ。私は中途半端が大嫌いなんだ」

そんな事知らない。って言うが、正直どうでもいいんですけど……

「やつ、その、貴方がやらなくなっちゃって……誰か別の人に……」

じゃきん。

「ぎゃああー!本当に切った!? 本当に切ったの!？」

「動くんじゃない。手が滑って耳を切り落としてしまっよ」

「お願いだから、もう止めて! いいから! もうこの髪のままでもいいから!」

「任せる！ 私はほとんどの事においては器用だ！ ほとんど大丈夫だと思ってもらっていていい」

ほとんど大丈夫って、逆に不安になるんですけど！？ さっき中途半端は嫌いって言ってなかった！？ 自分が一番中途半端ですよー！

「お願い！ もう止めて！！」

「せっかくだから今風にアレンジしてみようか？ いや、人の髪を切るのは楽しいな。最後に切ったのはたしか眠りネズミの髪だから、あいつは切り終える前に泣きながら逃げ出していたよ。全く我慢のない奴だ。いくら私のカットがあまりにも芸術的だからと言ってあそこまで感動しなくてもいいのに」

「お願い！ 今すぐに止めて！！ 私を助けて！！」

「どうしたんだ、アリス？ 眠りネズミみたいな事言って」

誰だってそんな話を聴いた後に自分の髪を切ってほしいなんて思わない。

そうこうしているうちにも私の髪は切られていく。

「ぎゃあー!!」

「大丈夫だよ、アリス。逃げ出した眠りネズミはその後ちゃんと見つけたして、お仕置きしておいたから」

そんな事どうでもいい！ 誰か私を助けて！

帽子屋に髪を切られた事をここにきて、激しく後悔した。

三月ウサギの戯言 その3 (前書き)

三月ウサギがいよいよ本気になったようです。きっと、本気になった  
ら一番危ないタイプですよ。



三月ウサギの戯言　その3

「帽子屋！」

廊下を歩いていると突然後ろから呼び名を呼ばれ、帽子屋は眉間にしわを寄せる。

あきらかに不機嫌そうな顔をして、帽子屋が振り返る。その顔を見て、声をかけた方はすぐに後悔したような表情になる。

それが気にいらなかったのか。ますます帽子屋は嫌そうな顔をする。

「何のようだ？　眠りネズミ」

どこか苛立ったような声で帽子屋は眠りネズミを問いたです。

眠りネズミはびくびくと怯えたように体を震わせながら、小さな声で言う。

「その……三月ウサギを見かけなかったか？」

「あんな奴知るか」

力の差は歴然。帽子屋はますます不機嫌そうな顔をし、眠りネズミを睨む。

眠りネズミはそれに後ずさる。

帽子屋の機嫌が最高潮に悪い。

眠りネズミは冷や汗を流し、数歩下がって距離をしっかりとる。

「そうか……邪魔して悪かったな……」

そう言って逃げるように立ち去るとする眠りネズミを帽子屋が鋭い声を発して止める。

「待て！」

「……っ!？」

急に呼び止められ驚く眠りネズミに帽子屋はずかずかと歩いて行く。

あっという間に離れた距離が縮む。

帽子屋はじろりと眠りネズミを睨みつける。

「……」

「……何だよ」

「お前……あんな事されてよく三月ウサギを心配する気になれるな」

どこか呆れたように帽子屋がそう言つと眠りネズミが驚いたように目を見開く。

「何言つて……」

「自分を殺そうとした男の心配をするなんて、愚かだと言ってるんだ」

「私は別に……心配なんか……」

「そうか？　じゃあ何故そうやって必死になって三月ウサギを探しているんだ？」

帽子屋の問いかけに眠りネズミは言葉を詰まらせる。

「それは……」

困った顔をし、言いよどむ眠りネズミに帽子屋はため息をつく。

「あの男はお前に平気で銃を発砲したんだぞ？」

「そうだが……本気では……」

「そうか、あれが本気じゃないか？　楽しそうにお前を撃つていたあいつが、あの顔が本気じゃないと？　そう、お前は言うんだな？」

「いや……それは……」

完全に眠りネズミは返す言葉に困り、おどおどと黙り込む。

そんな眠りネズミに帽子屋は静かに言う。

「眠りネズミ、悪い事は言わない。あいつに必要以上に近づくな。あいつは狂っている。いかれた俺が言うのも何だが、あんな奴といたって、ろくな事がおきないぞ？ あんな奴心配するだけ……」

無駄だ。そう帽子屋が言う前に眠りネズミが叫ぶ。

「うるさい……」

突然出された大声に驚く帽子屋に構わず、眠りネズミは早口で続ける。

「お前に三月ウサギの何がわかるんだ！ 三月ウサギは別に何も悪くない！」

眠りネズミはそう言うときっと帽子屋を睨む。

その目は涙目で、体も小刻みに震えている。それでも眠りネズミは帽子屋を真つ正面から睨みつけた。

「三月ウサギは悪くないんだ！」

眠りネズミはそれだけ言うとすぐに背を向け、その場から走り去る。

帽子屋は黙ってその背中を見おくり、眠りネズミが完全に立ち去ると小さく舌打ちをする。

「三月ウサギは悪くないだと？　もとはと言えば全てあいつのせいじゃないか」

帽子屋はかぶっている帽子を深くかぶり直すと眠りネズミが立ち去った方向とは逆の方へと歩み出した。

「終わったよ！　アリス、見てごらん！　なかなか素敵じゃないか！」

そう言って子供みたいに三月ウサギが騒ぎ立てる。

そんな三月ウサギを見て、いい年した大人が何をとか、何で貴方が嬉しそうにするのとか思ったがそれを口にする元気がもうない。

がつくりとその場にしゃがみこみ、自分が無傷でいれた事に心の底から安堵する。

良かった。本当に良かった。

言いようのない喜びを噛み締めていると何を勘違いしたのか、三月ウサギが嬉しそうに言う。

「どうだね？　素晴らしいだろう？　素晴らしくて言葉も出ないだろう？　完璧だ！　さすがは私が切っただけはある。実に見事だと思わないか？」

「そつね。見事ね」

とりあえず、耳を切り落とされなくて良かった。本当に良かった。

ちらりと鏡を見れば、綺麗に揃え直された短い髪をした自分が写っている。

短くなった髪。こつ見ればなかなか似合っている。

あながち三月ウサギのセンスも捨てたものじゃない。

まあ、調子にのるだろうから絶対に言わないけど。

「私、長い髪似合ってなかったからな……」

姉さんに言われて伸ばしていたのだが私には合っていなかった。

姉さんも母さんも髪が長かった。二人ともよく似合っていた。

似合っていないのは私だけ。私は一人に全く似てないから……



「そんな事はなかったよ。長い髪の君もとても素敵だった。ただこう見ると短い髪の君もなかなか可愛いらしい」

三月ウサギは笑顔でそう言って、私の髪に触れる。

私はそんな三月ウサギを見て、にやりとする。

「そんな事言って、私を口説き落とす気？」

ちょっと皮肉って言ったのだが三月ウサギはそれに笑顔で答える。

「おや、今頃気づいたのかい？ 私はさっきから、ずっと君を口説き落とそうと頑張っているんだがな」

え？

ぼかんとして三月ウサギを眺める。

三月ウサギは笑って、触れていた私の髪にそっとキスする。

「私は何とも思っていない子の隣に寝たりなどしないんだ」

にっこりと笑う三月ウサギ。

その顔に不覚にもどきりとした。

「な、何してるの!？」

変態!」

そんな顔でいきなり真面目な事言うものだから、白ウサギよりもた  
ちがわるい。

白ウサギのはどちらかと言うとどこか冗談じみた、どこか嘘っぽく  
聞こえてきたのに対し、三月ウサギの言葉には偽りが無いように聞  
こえる。

そう、話がいくら噛み合わないだろうがなんだろうが、三月ウサギ  
の言葉は常に真実だ。

三月ウサギは白ウサギのようにごまかしたりはけしてしない。

「からかわないでくれる?」

「私が君をからかうはずがないだろう？　私は本気なんだが？」

「私の反応をいちいち面白がってるようにしか見えなんだけど？」

「困ったな。やはり唇にしなければ伝わらないものなのか……」

はい？　何だって？

唇にしなければ伝わらない？　何を？

迫ってきた三月ウサギの顔に私は慌てて唇を手で隠し、守る。

それを見て、三月ウサギは楽しげに笑う。

「アリス、何をしてるんだい？」

こ、こいつ……

絶対に私の反応見て、面白がってる！

「もう、ふざけないでよ！」

「はははっ、アリスは紅茶にミルクを入れる派か。私はストレートが好みだが君の好みになら合わせてもいいな」

「どこからそうゆう話になったのよ!？」 何の前ぶれもなく、

話を変えないでくれない？」

「そうかそうか。さあ、アリス。君の好きなチーズケーキでも食べに行こうか」

全く話を聞いていない。

呆れる私をよそに三月ウサギは私の頭を撫でると扉へと向かう。

まさか本気でチーズケーキを食べにいく気だろうか？

「全く……何なのよ……」

突然とんでもない事を言い出したかと思っただらすぐにいつももみた  
に帰って……

「不思議の国の住人なんてみんなこんなものか……」

私は仕方なく、三月ウサギの後に続いて部屋を出た。

三月ウサギの戯言 その4 (前書き)

ウサギVSウサギ。

アリスをめぐって遂に争い勃発。しかしこの勝負、最初から勝敗が見えてますね。

三月ウサギの戯言 その4

「それでどこに行くのよ？」

「どこに行きたい？ 君の要望ならいくらでも受け付けるよ？」

何か考えて、出て来た訳じゃないのね。

「要望って、ここに来たばっかなのに……」

わかるはずがない。そう言つと三月ウサギは笑つて頷く。

「そつだね。じゃあ、またお茶会でも開くかい？」

「お茶会って……」

あれは間違つてもお茶会なんかではないだろう。

少なくともお茶会の会場で普通銃なんか構えるもんじゃない。

どうせそんな事今さら言っても三月ウサギは気にも止めないだろうが。

その時、思考が不意に中断される。

「アリス！」

懐かしい声が聞こえた。私はあえて声の聞こえた方を見ない。いや、見たくない。あれは幻聴に違いない。絶対にそうだ。

ぐいっと三月ウサギの腕を引く。

「おや、アリス。どうしたんだ？　えらく積極的じゃないか」

「何か嫌な幻聴が聞こえて……」

気のせいか、誰かが走ってくる足音が徐々に聞こえてくる気がする。

私は慌てて、三月ウサギの腕をつかむとそのまま走り出す。



「うん？ どうしたんだい？ アリス、そんなに素敵な笑顔を浮かべて」

笑顔なんか浮かべてない！

この顔が笑顔に見えるなんてそうとうの重傷だ。

「幻聴が……幻聴が聞こえて……」

そう、ここにいないはずのあいつの声が聞こえる。あいつの声がする。

「幻聴が……やけにリアルに……」

「アリス」

三月ウサギがにっこりと笑う。その笑顔が眩しい。

「それは幻聴じゃなくて本物さ」

一番聞きたくなかった一言を残酷にも口にする三月ウサギ。

三月ウサギが足を止め、振り返る。仕方なく私も足を止め、意を決して振り返る。

「アリス！」

そこには予想通りにと言うか、最悪と言うか、白ウサギが満面の笑顔を浮かべてこちらに向かって走ってきていた。

もう、何でいるのよ!?

がっかりとうなだれる私に三月ウサギはそっと囁く。

「大丈夫だよ、アリス。私が悪いウサギから君を守ってあげるよ」

甘い声でしかもそんな顔で言われたら女の子なら誰でもすぐにくらっとしてしまうだろう。

もっとも私は例外だが。

「その悪いウサギに貴方も入ってると思うんだけど……」

「あはは、面白い冗談だ。さすがはアリス！　こんな状況でも余裕だな！」

そう言っつて声を出して笑いだす三月ウサギ。

笑えない。全く笑えない。しかも冗談じゃないし……

「アリス！」

飛びついてきそうな勢いで走ってきた白ウサギだが、私達よりも少し手前の位置でぴたりと止まった。

てっきり抱きつかれると思って身構えていた私は拍子抜けし、驚いたように白ウサギを見る。

白ウサギはさっきと打って変わった険しい表情で私達の方を見る。

正確には私達と言うより、三月ウサギを冷たい目で見据えている。

もうこの後なにが起こるかなんて容易に想像がつく。

「白ウサギ。いちよ言っておくけど私と三月ウサギの間には貴方が思っているような事は何も無いから」

白ウサギが騒ぎだす前に釘をさしてそう言う。

しかし白ウサギはそれでも納得できなそうにこちらを見る。

「さっき、手繋いでいませんでしたか？」

「繋いでない！ 腕をつかんでただけ！ しかもそうゆう意味でやってた訳じゃなくて……」

とその時、三月ウサギがそっと私の肩に手を回す。

それを見て、白ウサギの目が見開かれる。

ああ、まぶしい……

慌てて振り払うが三月ウサギはにこにこ嬉しそうな顔をする。

「何も払わなくてもいいじゃないか、アリス」

「何、誤解されるような事してるのよ!？」

人の気も知らないで。誤解したままだとこの後、あのバカはとんでもない事をやらかすんだから!

しかし私のそんな思いも虚しく、三月ウサギは笑ったまま言う。

「誤解だなんてそんな言い方しないでくれ。私と君は一夜を共に過ごした仲じゃないか」

終わった。

恐る恐る白ウサギの方を見れば、その目が完全に見開かれ、呆然とこちらを見ている。

「一夜を……共にした？」

今にも倒れてしまいそうな表情で白ウサギは謔言のように三月ウサギの言葉を繰り返す。それに三月ウサギは嬉しそうに笑う。

「そつだとも！　いいだろう？　羨ましいだろう？　私はアリスと一緒に寝て、あんな事やこんな事まで……っ！？」

それ以上言う前に三月ウサギの足を思いっきり踏んで、黙らせる。

あんな事やこんな事って何よ？　誤解を招くような言い方しないでもらいたい。

「アリス、痛いじゃないか……」

「何が痛いよ。ありもしない事を言わないでくれない？」

「一緒に寝たじゃないか！」

「貴方が勝手に私の布団に入ってきたんでしょっ！？」

「キスだつてした！」

「それも貴方が一方的にしたんでしょうが！」

しかも髪だ。たいした意味もない。

「嫌がつてなかつたじゃないか」

「そう見えたとしたら貴方の目は節穴よ。今すぐ医者に見てもった方がいいと思う」

二人で言い争っているときふと何かが切れるような音が聞こえた。

慌てて白ウサギを見れば、そのあまりの様子に私は言葉を失う。

もともと白ウサギは短気な方だと思っていた。小さな事ですぐに怒って、剣を振りまわす。

しかしその考えは改めなければならない。

それは白ウサギにしてみたらいぶおさえていた方だったのだ。今の白ウサギを見れば、それがよくわかる。

まさに鬼だ。それほど今の白ウサギは恐い。

血走った目が獲物を求めて動き、一瞬にして彼の剣が姿を表す。

ゆっくりとそれが構えられる。勿論、その標的は私の隣にいる男だ。

声さえ出ない。白ウサギも何も言わず、ただ剣先が光る。

緊迫した状況。下手に動けばやられるというやつだ。

どうしよう？ どうするの？

ちらりと隣に目を走らせる。三月ウサギは私のその視線に気づくにつこりと笑う。

「大丈夫だよ、アリス。ウサギなんかには私は負けないさ」

彼をウサギと言うなら、貴方もウサギでしょう!?



しかしそんな事言う前に白ウサギが遂に動いた。

目にも止まらぬ速さで一気に間合いを詰められる。

「三月ウサギ!？」

心配して名前を呼んだと同時に三月ウサギは私を引き寄せ、後ろから抱きしめた。

「なっ!？」

こんな時に何してるの!？

文句を言う暇もなく、白ウサギの剣先が向かってくる。

この瞬間、私は全てを理解した。

こいつ……私を盾にする気だ。

慌てて逃げようとするががちりと三月ウサギは私を抑えつけて放さない。

笑う三月ウサギ。ま、まさかこんなところで死ぬなんて。

頭が真っ白になる。目の前に剣先が迫った。

三月ウサギの戯言　その5（前書き）

今回、三月ウサギがちよい怖いです。根はいい人なんですがね。笑  
ってる人ほど実は怖かったりしますよね。

三月ウサギの戯言 その5

剣先が迫り来る。

もっ……駄目だ。

あきらめかけたその時、目の前で剣先がぴたりと止まる。

白ウサギが怒りに満ちた目でこちらを睨む。もちろん視線の先には三月ウサギがいる。

「何のつもりだ？ 三月ウサギ……」

白ウサギが低い声で尋ねる。どっちら本気で怒っているようだ。

「悪いね、白ウサギ。私は君や帽子屋のように優しくないんだよ」

三月ウサギが笑ったその刹那、勢いよく三月ウサギは私の体を突き飛ばした。

受け身もとれず、倒れ込む私を床に着く前に白ウサギが手を伸ばし、

抱き留める。

「アリス!？」

白ウサギが心配そうに私を覗き込む。しかし、私の心配などして  
いる暇はなかった。

「白ウサギ!」

慌てて叫んだが、もう遅い。白ウサギが気づいた時には既に三月ウ  
サギがその背後に回っていた。

にやりと冷たく笑う三月ウサギ。

そして振り返った白ウサギを三月ウサギは勢いよく蹴り飛ばした。

みしりと嫌な音がし、三月ウサギの足が白ウサギの無防備だった腹  
部に深くめり込む。

あと思った時には白ウサギの体が宙を舞い、横に三メートルほど  
飛び、凄まじい音とともに全身を床に打ちつける。

「……」

さすがの白ウサギでもこれはこたえた。

痛そうに顔をしかめ、うめく白ウサギ。

しかし三月ウサギの攻撃はまだ終わらない。

蹴り上げられた時に衝撃で飛ばされ、床に転がった白ウサギの剣を拾い上げると三月ウサギはその剣を構え、容赦なく白ウサギの肩を貫く。

「……っ！..!」

剣が白ウサギの肩を貫通する。おそらく想像を絶する痛みがするのだらう。

白ウサギの顔が痛みで歪む。それでもプライドがそうさせたのか、上げかけた悲鳴を必死に歯を食いしばって、耐える。

そんな白ウサギの様子を見て、三月ウサギが楽しげに笑う。

「あははっ、そんな顔してどうしたんだい、白ウサギ？　せっか  
くの男前が台無しじゃないか」

三月ウサギは何がそんなに可笑しいのか、声を出して笑いだす。

今なら彼がみんなに避けられていた理由がよくわかる。

三月ウサギは完全に可笑的い。

「さて、どうしようか？　このまま心臓をえぐられるのと首をは  
ねられるの、どっちがいいかね？　長年の友人に権威を払って、  
特別に君に選ばせてあげよう」

「お前なんかと……友達だったことなんか……ない」

白ウサギがつらそうな表情でそう言う。

肩から生々しい血が流れだし、彼の服をあっという間に真っ赤に染めあげる。

このままではいくらなんでも危ない。

白ウサギだってそれぐらいわかっているだろう。それでも白ウサギは決して弱気な態度を見せない。

三月ウサギは相変わらず楽しげに白ウサギを見下ろす。

「あはは、そうだったかな？　だが、君が言うならそうなんだろう。仕方ない、君がそこまで言うなら首をはねてあげるよ」

三月ウサギが笑う。

笑ったまま、三月ウサギは白ウサギの肩に刺さっていた刀身の部分を一気にひき抜く。

「くっ………！」

引き抜いたと同時に肩から血が吹き出す。



そうとう痛いのだろう。白ウサギは目を見開き、ただただ唇をきつく噛みしめる。

そんな白ウサギの態度を見ても、三月ウサギは少しも表情を変えない。残酷にもそのまま剣を振り上げる。

本気だ。本気で三月ウサギは白ウサギを殺す気だ。

「やっ、止めてー！」

とっさに三月ウサギのその腕にしがみつき、振り下ろすのを何とか阻止する。

三月ウサギは一瞬きよとした顔で私を見たが、すぐにまた笑顔を浮かべる。

「アリス、どうしたんだい？　そんなに慌てて、大丈夫、君の好きなケーキならちゃんととってあるよ」

「ケーキはどうでもいいから、とにかくもう止めて！」

このさい、何も気にならない。このまま三月ウサギが剣を振り下ろしたら、いくら白ウサギといえど死んでしまふ。

駄目だ。やっぱりそんなの駄目だ。

必死になってそれを止めさせようとする私に対し、三月ウサギは何とものんびりと答える。

「どうして？」

君は白ウサギが嫌いだったんじゃないのかい？」

「嫌いなんて言っていない！」

そりゃあ嫌いになるぐらい鬱陶しい奴だとは思っていた。それでも別に嫌な奴だとは思わない。

「じゃあ、好きなのかい？」

「……………」

それとこれとは話が違ふ気がする。

若干、頭が痛くなったが、ここでひくわけにはいかない。三月ウサギの腕をおさえたまま、私は三月ウサギに言い聞かせるように言う。

「嫌いだとかそういう理由で貴方は人を殺すの!？」

「いけないのかい？」

素でそう聞かれてしまえば、思わず言葉に詰まってしまつ。

そんな私を見て、三月ウサギは優しく微笑む。

「アリス……君はとっても優しい子だね」

三月ウサギはそう言いながらもけして剣を下ろしたりはしない。

「三月ウサギ……剣を下ろして……」

「何故？ まだ、首をはねてないよ」

「もう、十分でしょう。これ以上やる必要なんかない」

私が懸命にそう言っても三月ウサギはなかなか剣を下ろそうとしない。

「そんな泣きそうな顔して、どうしたんだい？ 大丈夫だよ。どうせ我々は代わりがきく存在だ。一人いなくなっただとしても明日になればすぐに元通りになる」

「元通りになる？」

どういふ事？

ふと、ある事を思い出す。そう言えば同じような話を誰かに聞いたことがある。

あれは……確か……

「帽子屋も……同じ事言ってた……」

そう言うと三月ウサギの顔が少しだけ嬉しそうになる。

「そうかね。あの帽子屋がそんな事を言ったのか。あははっ、彼にしては珍しい事もあるものだ」

でもと三月ウサギは続け、私の方を興味深げに見る。

「どうやら大事なところは何も知らされてないようだね」

大事なところ？ それって………いつたい？

「やはり、帽子屋は優しすぎるな」

三月ウサギは少しだけ表情を和らげる。

ふと夢の中の二人を思い出す。

やはり二人はそれなりに親しい仲なのかもしれない。

三月ウサギの戯言 その6 (前書き)

まだまだウサギ2人の対決は続きます。三月ウサギと一緒にいるとだんだん白ウサギがまともに見えてくる気が……

しないか。

三月ウサギの戯言 その6

「どつという意味？」

「そのままの意味だよ」

三月ウサギが笑って答える。だんだんその笑顔に腹がたってきた。

「私達は死んだとしてもすぐに代わりが現れるんだ」

代わり？

「何よ……それ……」

さっきから訳がわからない。三月ウサギはいつたい何が言いたいのだろう？ もっとわかりやすく、言っただけ欲しい。

三月ウサギの説明にはいつも言葉が足りない。

「わからないかい？」

そんな答え方でわかるはずがない。

「わからないわよ……」

素直にそう言えば三月ウサギは仕方ないと言って少し言葉を補う。

「私が今、白ウサギを殺したとしても次の日には代わりが現れる。それだけだよ」

代わりが現れる？　それだけ？

何がそれだけなのよ！？

さっぱりわからない……

「代わりって何よ！？」　　白ウサギが死んだら代わりが現れるって……」

混乱する私を見て三月ウサギがしょうがないなと呟く。



何がしょうがないんだ。ちゃんと説明してくれなきゃわかるはずがない。

ただでさえ私の世界とは全く違う世界なんだから、しっかりと説明もなしに理解しろと言う方が無理な話だ。

「もっとわかりやすく言うとだね、今ここで白ウサギが死んだとするだろう？　しかし次の日になれば白ウサギと全く同じ外見の男が現れる。それが代わりだ。我々は死んでも死体も残らずに消え失せる。そして次の日、代わりが現れ、そのいなくなった穴をつめる。それだけの事なんだよ」

わかったかい？

そう言っつて三月ウサギが笑いながら問いかてくる。

しかし私はそれに笑い返すどころか、その場に固まり三月ウサギの顔を凝視する事しかできない。

何、それ？　代わり？　自分が死んだら代わりが現れて、自分の抜けた場所をつめる？　それがこの世界での常識？

無意識に体が震える。

「代わりって……白ウサギと全く同じ外見の人なの？」

そんな人いるはずない。世界には自分と似た人が三人はいるらしいがそれはあくまでも似た人だ。

そっくりそのまま同じ人なんか、いるはずがない。

だが、三月ウサギはさも当然そうに答える。

「そうだよ。外見どころか声も、好みもほぼ同じだ。ただ、これまでの記憶だけはないがね」

三月ウサギが私の顔を見て、くすくすと笑い出す。

「そんな顔しなくてもいいだろう？ 君には信じられないだろうがそれがこの不思議の国では常識なんだ。死ねば、代わりが現れて、自分のいなくなった場所をうめてくれる。だから我々一人一人には価値がない。どうせ代わりのきく存在だから、価値なんかあるわけもない。それがこの国の常識。この世界はそうゆう所なんだよ」

私は何も言えず、ただただ呆然と三月ウサギを見る。

どうせこんな可笑しな世界なんだから、私の持つ常識なんか役にたつはずがない。通じない。

こんな可笑しな世界なんだからその世界の常識だって可笑しくて当たり前。

そうわかっていたはずなのに、それに納得できない自分がいる。

「それだけって何よ……全然それだけじゃない……」

「それだけじゃないか。何が気にいらないんだい？」

気に入らない？　違う。そうじゃない。気に入らないとかじゃなくくて……

「そんなの……可笑的いじゃない……」

可笑的い。代わりがいるから簡単に殺していいなんて、そんなのっ

て可笑しい。

そう思うのは私だけなの？

「我々が年をとらないのは知っているね？　我々は年をとらない。最初のアリスがそれを望んだからだ。彼女は我々に変わらない事を望んだ。その結果、我々は年もとらないし、死んでもすぐに代わりが現れる。どんなに時がたつても変わらない。この世界の時間がいまいなのもそのせいだ。永遠に彼女の帰りを待ち続ける存在。それが我々だよ、アリス」

三月ウサギがひどく穏やかにそう告げる。

変わらない世界。変わらない住人達。変わらない、変わらない。アリスが望んだ世界。それがこれなの？　本当にこんなのでいいの？

その時、倒れていた白ウサギが動いた。

白ウサギの足が三月ウサギの足を素早く蹴り飛ばす。

私と話していたせいか、三月ウサギは気づくのに遅れ、よければ

そのまま床に倒れた。

形勢逆転。白ウサギは素早く立ち上がると三月ウサギの上にのり、自分の剣を奪い返し、その切っ先を三月ウサギの喉へと押しつける。

「……ひどいじゃないか、白ウサギ。いくら君でも卑怯じゃないか」

「うるさい。お前にどう思われていようと私は平気だ」

白ウサギが不適に笑う。

「よくもアリスを傷つけようとしてくれたな」

「傷ついているじゃないか」

「お前なんかアリスに触る事さえおこがましい」

「それは君が判断する事じゃない。アリスが判断する事だ」

「うるさい！ 私にはアリスの……」

白ウサギは最後まで言わずにそこまでで中途半端にきる。

しばらく何か考えこみ、それから首を軽く振る。

「まあ、いい……鬱陶しいウサギをさっさと始末してやる」

白ウサギは剣を構え直す。

白ウサギの目が鋭くなり、それが本気かどうかなんて聞かなくてもわかる。

三月ウサギのあの話が本当なら、ここで三月ウサギを白ウサギが殺しても、明日にはその空席をつめるための代わりというのが現れる事になる。

顔も声も背丈も全て三月ウサギと同じ男が三月ウサギの代わりにやってくる。

そしてまた何にもなかったようにこの世界は動き出す。

それがこの世界では当たり前。常識の事。

でも……

それで本当にいいの？

「止めて！」

気づいたら有らん限りの声で叫んでいた。

白ウサギが剣を構えたまま、ちらりと私の方を見る。その顔が若干困惑している。

まるで何故止められたのかわからないような、いや実際、何で止められたのか白ウサギにはさっぱりわからないのだろう。

私、何でこんなに必死になってるんだろう……

確かに目の前で誰かが殺されるなんて嫌だが、昨日会ったばかりの男達の心配をここまでするなんて……

わからない。でも、止まらない。

「もう……いいから止めてよ……」

瞳から涙が溢れだす。

一度流れ出すともう止まらない。

流れ落ちた涙が頬を濡らす。

声が漏れる。

我慢しようと思えば思うほど泣いてしまう。

何で？　何で私、こんなに悲しいの？

悲しくて、悲しくて、小さな子供のようにみっともなく泣く。

もう自分では止められなかった。



「アリス!？」

白ウサギが剣を放り出して、慌てて私に駆け寄る。

泣いている私を見て、白ウサギはこれでもかというほど慌てふためく。

「アリス!？ 落ちついて下さい!？ な、何があったんですか!？ 何で、で、泣いてるんですか!？」

私より白ウサギの方がずっと落ちついた方がいい。

私の周りをさつきからやたらと動きまわっていて、スッゴク挙動不審だ。

「あなたの……せいじゃない……」

もとはと言えば全て白ウサギのせいだ。

そつだ全部白ウサギがいけない。

白ウサギがこんな世界に私を連れてくるから……こんな事になったんだから。

三月ウサギの戯言　その7（前書き）

一週間に一度更新しようと思っているんですが最近1日ずつズレて  
いつてる気がします。いや、ズレていつてますね。確実にズレてま  
すね。

本当にすいません。1日、2日は誤差という事で許して下さい。

三月ウサギの戯言 その7

「は？ あ、いや、アリスそう言うなら私がいけないんですね。すいません。謝りますから泣き止んで下さい」

私の理不尽なその言葉に白ウサギはそう言い、謝ってくる。

本当にバカな奴。少し考えれば自分が悪くない事ぐらいすぐにわかるのに、それなのに謝ってくるなんて……

「泣き止んで下さい……アリス」

そおつと白ウサギが手が伸び、私を抱きしめる。

「貴方は私の……」

白ウサギのものとは思えないほどの優しい声。

何故だろう？ その声を私は聞いた事がある気がする。

あれはいつだったけ……

あれは……確か……

「そうか、なるほど。そうゆう事か……」

三月ウサギが私と白ウサギの様子を見て、何やら一人で納得している。

視線をやれば、三月ウサギはニヤリとした笑みを浮かべ、私の方を見返した。

「そうか、だから白ウサギは君に執着していたのか」

全てわかったよ。

晴れ渡ったような笑みを浮かべて、三月ウサギはそう言う。

それに対し、白ウサギは何も言わない。たださっきまでの優しい雰  
囲気が消え、冷たい目で三月ウサギを睨みつけている。

何がわかったと言っのたろうつか？

私にはさっぱりわからない。

自分を睨みつける白ウサギに三月ウサギはにこやかに笑いかけつつ手を一回叩く。するとその手に当たり前のように彼の武器が現れた。

もちろん彼の武器はあの立派なライフルだ。銃口がぴったりと白ウサギの額に向けられる。

「何のつもりだ、三月ウサギ」

「見ればわかるだろう？　そうとわかれば君に用はない。そこを退いてくれ。私はアリスとまだ一緒にいたいんでね」

「冗談じゃない！　お前みたいな変態とアリスを一緒になんかいさせるか！」

貴方がそれを言っのた？

白ウサギの言葉に苦笑する。変態なのは彼も同じだと思っのたのは私だ

けだろうか？

「いくら君でもアリスを縛るのは感心しないな。アリスがどうするかは君が決める事ではない。アリス自身が決める事だ」

「アリスが私よりもお前のような奴を選ぶと？」

「ああ、選ぶさ。世の中優しいだけの男はもてないんだよ、白ウサギ」

「何の話をしてるのよ……」

もてるとかもてないとか、話が大幅にずれてる気がする。

「もちろん、君の好みについて話し合ってるんじゃないか！」

何故そうなる！？

訳がわからない！

「アリスがお前を選ぶはすがない。アリスは……私はアリスの……」  
白ウサギが優しく私を抱きしめる。あまりにも優しく過ぎる抱擁に私はその腕を払いのける事もできなかった。

「白ウサギ……?」

何だか今までと雰囲気が違う。

今までだったらいくらでもその腕を払いのけられたのに。

白ウサギはまるで私を壊れ物でも扱うように抱きしめる。

少しでも力をいれたら、壊れてしまうかのように、優しく、優しく。

白ウサギのそんな様子を見て、三月ウサギは笑う。

「悪いけどね。アリスはやっぱり、私を選ぶよ」

何故か自信満々にそう言う三月ウサギ。何の根拠があると言っただ



ろうか？

「アリスが貴方を選ぶはずがない……」

「選ぶぞ」

三月ウサギが私を見て言う。

「人というものは真実を知りたがるものだからね。当然、アリスもそうだ」

真実？ どういう事？

困惑ぎみに私は三月ウサギを見つめる。

「白ウサギは君に優し過ぎる。白ウサギは君に真実を教える事なんかないよ。例え、どんなに自分が辛いとしてもね」

白ウサギが辛い？ 何で？ どうして？ 何で辛いのか？

その答えをいくら求めても誰も与えてはくれない。

違う、答えはすぐそばにある。手を伸ばせば届く距離。白ウサギは何かを必死に隠し、三月ウサギはそれを暴こうとしている。

三月ウサギは嘘を言わない。彼が真実を教えると言うなら、本当に真実を教えてくれるのだろう。

答えはある。そして私はそれを選べる。

ゆっくりと私は立ち上がった。

白ウサギは引き止めたりせず、腕を力無く落とす。

白ウサギは何も言わない。彼は何もしない。いつだって彼はそう。

彼は何もしない。

最初の時だって白ウサギのせいだと私は言ったけど、彼は本当は何もしていない。

私は自分で選んでその背を追いかけてきたのだ。

アリスもそう。気づいたらなっていたんじゃない。アリスが嫌なら否定し続ければ良かったのに私は自分からその名前を肯定してしまっただけだ。

私は自分でこの世界にやってきた。自分でアリスになった。自分で選んでここにいる。

三月ウサギの目の前に立つと三月ウサギが優しく微笑んだ。

綺麗な微笑みだと思う。しかし暖かみのかけらもない微笑み。これなら白ウサギのあのバカみたいな笑顔の方がずっといいと思う。

「アリス……真実を教えてあげるよ」

三月ウサギのその言葉に私は答えず、三月ウサギの頭を叩いた。

軽く叩いただけだがなかなかいい音がする。

ライフルを持つ相手に対していきなりその頭を叩くなんて、私もえらく度胸がついたものだ。

三月ウサギはいきなり叩たかれたにも関わらず、怒ったりせず、私を静かに見つめる。

私はその目を真つすぐと見返す。

「女の子を盾にするような奴になんかついていく訳ないでしょう?」

私は結構根に持つタイプだ。一度された事は絶対に忘れない。

それを聞いて三月ウサギはニヤリと笑う。

「何だ、拗ねてるのかい? 可愛いな」

拗ねてない。拗ねてない。

「言っただろう? 私は優しくもないって、だからこそ君に真実を教える事ができる。君は真実を知りたいはずだ」

確かに知りたい。でも私は人の言う事を素直に聞くようなたちじゃ

ない。

「別に貴方になんかに聞かなくなっただっていい」

「私以外には教えてくれないよ？」

「それでもいい」

教えてもらわなくなっただっていい。

「自分で探す」

誰かに教えて貰うなんて私らしくない。

「自分で知りたい事ぐらい、自分で探す」

らしくもなくポカンとした表情で三月ウサギは私を見る。

「何よ……」

そんなに可笑しい事を言っただろうか？ 三月ウサギがあまりにも私の方をじっと見てくるので、少したじろぐ。

不意に三月ウサギが大きな声を出して笑いだした。

何がそんなに可笑しいのかお腹を抱えて笑っている。

前々から思っていたけど三月ウサギは一回笑いだすとなかなか止まらない。

私は唾然としつつ、笑う三月ウサギを眺める。

しばらくしてようやく三月ウサギの笑いがおさまった。

「いや、アリス。やっぱり君は面白い。さすがは白ウサギの選んだアリスなだけあるよ」

三月ウサギはそう言ってまた笑い出した。

三月ウサギの戯言 その8(前書き)

誤差です。1日、2日は誤差です。

どんどん更新日がズレてますが誤差なので笑って許して下さい。

次回新章…かな？

三月ウサギの戯言 その8

「そんなに笑わなくてもいいじゃない!」

私は思わず、三月ウサギを怒鳴りつける。

しかし三月ウサギは笑い止むどころか、ますます可笑しそうに笑う。

何故だかわからないけどなんかスツゴくバカにされてる気がする。

「ちょっと、いい加減にして!」

「いや、すまない……そうか、そうか、自分で探すか、なるほどね。君らしい。実に君らしいよ、アリス」

何が私らしいよ。会ってまだ1日、2日で私の事なんかろくに知りもしないくせに。

三月ウサギはようやく笑うのを止めると、手元が光り、持っていたライフルが消える。



どつちやらもつ白ウサギを撃ち殺す気はないようだ。

良かったと内心ひそかに安堵する。

目の前で誰かが死ぬのはもうこりこりだ。

「アリス、君はやはり変わっているね。自ら困難な道を選ぶとは、いや、だがだからこそ上手くいくのかもしれないね」

何を言ってるのか相変わらずよくわからない。

聞く間もなく、三月ウサギはゆっくりと私に背を向ける。

「まさか君が一夜をともにした私よりもその白ウサギを選ぶとはね  
……」

「違う!?!」

誤解を招く言い方しないで!

一夜をともしたってただ一緒に寝ただけじゃない！

しかも貴方が勝手に一緒に寝ただけだし！

三月ウサギに文句を言おうとしたが、三月ウサギは私の事なんか気にせずしゃべり続ける。

「やはり……には私じゃ勝てないと言っ事か……」

「はい？」

何て言ったのだろうか？ 三月ウサギらしくもなく、小声で言うものだから上手く聞こえなかった。

「いや、何でもない。こちらの話だよ」

中途半端に何よ……そんなふうに言われたら嫌でも気になるじゃない。

慌てて、その背を追おうとしたら後ろから腕がのびてきて、私をがっしりと捕まえた。

誰の腕かは振り返らなくてもわかる。

「はなしなさいよ！　白ウサギ！」

「アリス！　やっぱりアリスは私を選んでくれたんですね！  
そうですよね！　あんな変態で狂っているような奴を貴方が選ぶ  
はずがないです！」

痛いぐらいの抱擁。はつきり言って暑苦しいし、うざりたい。

さっきまでのあの優しい抱擁は何だったのよ！？

腹立つほどの笑顔でさらに白ウサギは私を強く抱きしめる。

「っっ……」

死ぬ。はつきり言って、このままだと私は本気でこの男に絞め殺される。

「アリス！　やっぱりアリスは私の事が……」

「いい加減にしろ!」

私は思いっきり肘を後ろから抱きついぐる白ウサギの顔に叩き込んだ。

「ぐっ……」

くぐもった声とともに白ウサギは床に倒れ、ようやく解放される。

「相変わらず貴方の愛は痛いです……」

「そう? 言うておくけど今回は貴方がいけないから」

これはあくまで正当防衛だ。あのままだったら私の方がやられていた。

「貴方がいけないのよ」

おまけに三月ウサギにケンカを売って、死にかけているし……

ここで私ははっとなって、慌てて、白ウサギの体を見る。

三月ウサギに負わされた肩の傷から血が流れ、白ウサギの服を赤く染めていた。

それなのに白ウサギは痛そうにもせず、にこにこ私の方を見ている。

これは……ある意味怖い。

「アリス？　どうしましたか？」

「動かないで！　止血しなきゃ！」

止血できるものがないか探すがあいにく何も見当たらない。

仕方ない。どこかで探してくるか。

「ちょっと、そこで待ってて。私、何か止血できそうなものを探してくるから……」

「駄目です、アリス！」

私が行こうとする前に白ウサギが素早く私の腕を掴む。

「何するのよ？ 早く止血しなきゃ……」

「止血なんかどうでもいいです！」

「いい訳ないでしょうー！」

何故、こんな事を言い争う必要があるんだろうか？

怪我をしたら手当てする。そんな事、当たり前的事でしょう？

「はなさないよー！」

「嫌です！」

「貴方、このまま死んでもいいの!？」

「いいです」

またバカな事を言っている。いい加減にしてほしい。

怒鳴りつけてやるつもりと思って白ウサギの顔を見れば、その顔があま  
りにも真剣で言おうと思っていた事が全て消えさる。

「お願いです。どこにもいかないで下さい」

白ウサギはそう言って寂しげに微笑んだ。

「三月ウサギ!」

三月ウサギは聞き慣れた声にそれまでの無表情が嘘のような笑顔を

浮かべ、声のした方へと振り返った。

「やあ、眠りネズミ」

三月ウサギが振り返るとそこには眠りネズミの姿があった。

笑う三月ウサギとは対照的に眠りネズミは顔をしかめ、怒ったような表情をしている。

「いったいどこにいたんだ!? お茶会の準備を全て私に押し付けていくなんて……」

「何を今さら言ってるんだ? そんなのいつもの事だろう?」

「偉そうに言うんじゃない! お前という奴は全く……」

「何だ?」

三月ウサギの目が鋭くなり、文句でもあるのかと言いたげに眠りネズミを見る。



眠りネズミはそれに言いかけた文句をのみこむ。

上下関係はすでにできているのだ。

三月ウサギは納得いかなげではあるが文句をいわずに黙りこむ眠りネズミを見て、機嫌良さげな表情をする。

「さて、お茶会の準備でもするか」

「どうせまたすぐに私にだけ準備をさせて、どこかに行くくせに…」

珍しく食い下がる眠りネズミに三月ウサギは眉をしかめる。

「何だ？　文句あるのか？」

「別に」

そうは言いつつ眠りネズミの顔は不機嫌なままだ。

三月ウサギはいったん首を傾げ、それから何かを思いつきニヤリと笑う。

「さては置いていかれたのが寂しかったな？　私が君を一人にして置いていったから、それで拗ねてるんだな？」

「……っ！？　どうして、そうなるんだ！？」

「なるほど。なら、素直に寂しかったと言えばいいじゃないか」

「ふざけるな！　誰がそんな事を……」

一人顔を真っ赤にさせて怒る眠りネズミに三月ウサギはくすくすと笑い、さっさと歩きます。

「どこに行くんだ？」

「お茶会の会場に決まっているだろう？　あそこが一番落ち着くんだ」

三月ウサギはそれだけ言うとお茶会の会場へと向かう。

眠りネズミはその背中をこれでもかと睨んでいたが、しばらくすると三月ウサギの後を追いかけて行った。

## 第六章 白ウサギとのワルツ その1(前書き)

タイトル通り白ウサギの章です。意外と白ウサギは人気で作者としては非常に安堵しています。なにせ色々やっちゃってるので……

嫌われなくて本当に良かった。

第六章 白ウサギとのワルツ その1

「ちょっと!?!? 離れなさいよ!」

「嫌です!」

白ウサギはそう言つと余計に私にしがみつく。

もう、いい加減にして欲しい。はっきり言つてうざったい事この上ないし、いい大人が子供みたいに駄々をこねるなんてカツコ悪い。

「いい加減にしなさい! そんなにひどい怪我してるのに治療しないなんてバカじゃないの? 三月ウサギと同じくらい狂つてる!」

「なつ!?!? あんな奴と同等なんて嫌です! 私はあそこまでいつちやつてないですよ!?!?」

「うるさい、うるさい! 同等が嫌ならさっさと治療する! 早く医者でも何でも行きなさい!」

「世の中の医者なんかどうせやぶですよ。これぐらいの傷、しばらくほおっておけばそのうち……」

「言っておくけど治らないわよ?」

「そんな事わからないでしょう?」

誰がどう見てもわかるでしょう!?

肩の傷は深く、血がいつぱい出てるし、下手すれば腕だって動かなくなるかもしれない危ない状況だ。それなのにこのバカウサギは治療したくないと子供みたいに駄々をこねる。

これだけ深い傷、絶対に痛いはずだ。それなのに、このままでいいとか、どんだけ治療したくないのよ!?

「貴方ひよつとして、医者が嫌いとか言わないわよね?」

「医者は平気です。誰かに触れられる事が嫌いなんです」

「あのね……」

そんな怪我して、嫌いも何もないでしょう？

呆れると同時にあまりの情けなさに涙がでてきそつだ。

本当に癖があるというか変な性格というか……

とにかく白ウサギは可笑しい。それだけは私にもよくわかる。

本当に変な奴。

まだ何か私に隠し事をしているみたいだし、完全に信用なんかできない。やっぱりこんな奴に構わず、さっさと三月ウサギについていけば良かったかもしれない。

そうすれば……

「私も可笑しくなったのかも……」

何故だかこのまま白ウサギをほっといてどこかに行くなんて、私にはできない。

「もっいっい」

どうせそんな事考えていても無駄だ。

どうせ白ウサギに何を聞いたって、いつものようににはべぐらかされるのがおちだろっ。

ここは前向きにいっ。

「貴方の部屋はどこ？」

私の一言に白ウサギが固まる。

目を見開き、驚きに満ちた表情で私の方を見る。

「な、何？」

私、そんなに変な事言った？



「わ、私の部屋ですか？」

白ウサギは何故かうるたえながら問い返す。

「そうだけど……何？　　聞いちゃいけなかった？」

「あ……アリス！　　私の部屋にきたいということとはつまり、その……」

「………言っておくけど貴方の考えてるような意味で言ってるんじゃないから」

妄想の世界に飛びかけた白ウサギをぎりぎりのところで引き戻す。

単純と言っか、何ですぐにそうゆう考えにつながるのか、私にはわからない。

「私の考えてる事がわかるんですか？」

「わかるわよ……」

その顔を見れば嫌でも何を考えてるかわかる。

「言葉にしなくても思いが伝わるなんて……やっぱり運命ですよ、アリス！」

何が運命よ。勝手に人を巻き込まないでほしい。

「バカな事言っていないで、早く教えて。貴方の部屋で治療するから」

「治療する？」

まだわからなそうにする白ウサギを私は怒鳴りつける。

「だから、医者嫌なら私が貴方を治療するから早く部屋を教えてください。少なくともここよりは何かあるでしょう！？」

「ああ、なるほど。それはいい考えですね」

白ウサギはにっこりと笑って、頷いた。

「どうですか？ 私の部屋は？」

「意外に……」

「意外に？」

「まとも……」

そう、白ウサギの部屋は意外にもまともだった。

シンプルなデザインの家具、きちんと片付けられた室内、ややおとなしい色合いのカーテンやベッド。

はつきり言って予想外のまともさだ。

「まともって……もつと派手な方が好みでしたか？ 貴方がそう  
ゆづのを好むと言うなら全て変えますよ？」

「うづん、これでいい」

むしろすつきりとしていて、この部屋自体は好きだ。

問題は部屋じゃなくて、そこに住んでいる人間の方だ。

とりあえず白ウサギをベッドに座らせ、私は辺りを見渡す。

「包帯とか消毒液とかどこにある？」

「その机の引き出しの一番上に全て入ってますよ」

白ウサギに言われた通り、壁際に置かれていた机に近づき、引き出しを開ける。

中には確かに包帯やピンセット、ガーゼ、消毒液など治療に必要な物が全て綺麗に入れられていた。

何か本当に意外。

もしかしたら白ウサギはかなりの几帳面な性格なのかもしれない。

「これ、使ってもいい？」

「どうぞ。アリスが使いたいならいくらでも使ってください」

私はとりあえず持てるだけそれらを持つと、白ウサギのもとにいき、すぐそばの床にならべて置く。

「どれも新品だけど開けちゃっていいの？」

「どうぞ。どれも新品なのはあっても、私が使っていないからです」

「何で使わないの！？」  
医者にも行かないくせに自分で手当てもしないの！？」

「そんなふうに言わないで下さい。治療しないのはしたら何となく

悔しい気がするからで、医者に行かないのはそいつに借りをつくるのも触られるのも嫌だからです。理由があるんです。ちゃんとした理由がね」

そのどこがちゃんとした理由？

呆れて言葉も出ない。

「貴方……変なところが子供みたいね」

「アリスにそう言われると……何だか照れますね」

「言っておくけど誉めてないから。むしろ逆の意味だから」

「逆の意味！？　それって……アリスが私の事を好きだという意味ですか！？」

「何でそうなるの！？　貴方の頭の中はどうしてそう……ああ、もういい。とりあえずしばらく話しかけないで！　これ以上話したら治療するどころか、また貴方を殴りたくなる！」

「貴方に殴られるなら本望です！　これも貴方の愛情の示し方だ

と私はわかっていきますよ、アリス！」

どうしてそうなるのよ!？

早くも私の右腕が殴りたくてうずうずします。

「もう私がいって言うまで何も言わないで！　いって言う前に何か言ったらもう二度と貴方となんかしゃべらない！」

勢いに任せて言ってしまったが、こんな事で白ウサギが私の言う事を聞くはずもなく……

なく……

あれ？

ちらりと見れば顔を真っ青にさせてぶるぶると震えながら口を閉じます。白ウサギの姿が見えた。

……きいたみたいだ。

「貴方って本当に訳のわからない人ね」

白ウサギは言われたとおりにも何も言わない。

まさかあんなにもうざったい奴がこんな事で大人しくなるとは……

「いい事、知っちゃった」

今度何かあったらこの手で脅そう。

勝ち誇った気分で私は白ウサギの傷を治療し始めた。



白ウサギとのワルツ      その2 (前書き)

初めてこの作品を投稿してからすでに一年と数カ月。何でこんなに話の展開が遅いんでしょうか？

全然物語が進まない (泣)

自分の力不足を最近ひどく痛感させられます。

白ウサギとのワルツ その2

「はい、もうしゃべっていいわよ」

手当てを終え、私は白ウサギに声をかける。

白ウサギはしげしげと私が手当てしたところを見つめる。

しばらくそうしていたかと思うと突然、口を開く。

「アリス、貴方って……」

「何？」

「何でもできるんですね」

感心した様子で白ウサギが言う。

「まあ」

手当てする時に使った道具を片付けながら私は小さく頷いた。

「他人に任せるのが嫌なの。自分でできる事は何でも自分でしたい主義なのよ」

「さすがはアリス！ 素晴らしい考えです」

「そっ?」

別に誉められるような事ではない。ただ自分でできる事は自分でしたいと思ったただけだ。

幼い頃に母を亡くしてから私は姉さんに迷惑をかけっぱなしだった。

私と同じくらいの年に姉さんは友達と遊ぶ事をやめ、夢をあきらめ、家の事を全て一人で行った。

姉さんはいつでも笑顔でいたけど本当はつらかったに違いない。

姉さんに少しでも迷惑をかけなくなかった。自分が子供であるいじよう、どうしてもその力を貸して貰わなきゃいけないけど、せめてできる事は姉さんに頼らずに自分でしたい。

ただそう思っただけ。

少しでも姉さんの手を煩わせないように。そう思って色々な事を勉強した。

「それでも私、学校じゃあなかなかの優等生だったんだから」

ふざけてそう言えば白ウサギは真面目に返してくる。

「ええ、そうですね。貴方に勝る人なんてこの世界に存在しませんから」

「それはちよっと……」

言い過ぎじゃない？

世の中には私なんかより優れてる人がいっぱいいる。

白ウサギはもつとその視野を広げるべきだ。あまりにも狭いと言  
か、本当に私しか見えていない。

何で私みたいな人にそこまで執着できるのか本当に不思議。

まあ、いくら不思議に思って、疑問を口にしたとしてもその理由は  
けして教えてくれないだろう。

ため息をつき、私は話題を変えた。

「傷は大丈夫？　いちよ手当てしたけどこんなの応急処置だから  
後でちゃんと医者に行きなさい」

念のためそう言つと白ウサギが笑顔で答える。

「いえいえ、これだけやっていただければ十分……」

「行かなかつたら、もう二度と口きかないから」

「……行きます」

しおしおとそう告げる白ウサギに私の気分は良くなる。

まさかあの白ウサギがこんな事で言うことをきくようになるとは…  
…いい気味だ。

「他に怪我はない？　　だいぶ蹴られたりしてたけど、どこか他に  
痛むところとかある？」

私がそう聞くと白ウサギはじつと私の顔を見つめてくる。

「何？」

何か変な事でも聞いた？

「アリスが……」

「私が？」

「優しいだなんて……やはり愛ですね、愛！　　普段は冷たくても  
いざとなるとこう優しく看病しちゃったりして……」

「ねえ、少し黙ってくれる？　じゃなきゃ二度と口をきかないどころか、これからその存在じたい無視するから」

妄想の世界を勝手に展開しかけた白ウサギだったが、私がそう言う  
と慌てて、口を閉ざす。

ぶっ飛んだ思考もだいぶ慣れてきたが、正直どうしてここまでポジ  
ティブに考えられるのか私にはわからない。

まあ、わかりたくもないんだけど……

「貴方ね……人が真面目に聞いてればバカにして……」

「アリスをバカにするなんてとんでもない。私はいつだって真面目  
ですよ」

その何処が真面目なのよ!?

人をおちよくつつてるようにしか見えないんだけど。

「他に痛いところはないのね？」

「全身痛いですが、アリスが頬にキスしてくれたらすぐに治ります」

「バカ言っていないで、早く医者に行きなさい」

「アリス」

本当に鬱陶しい。こんな奴助けなきゃ良かった。

今さらそんな事を言っても遅いとわかっていながらも、そう思わずにはいられない。

そう言えば、聞きたい事があったんだ。

「ねえ、白ウサギ」

「何ですか？　私は暴力的なアリスも優しいアリスも好きですよ？」



誰もそんな事は聞いていない。

早くも、まともに質問しようとした自分が馬鹿らしく思えてくる。

駄目、こんな事でめげないで。そうよ、いらなところは聞き流すの。鬱陶しいところは無視していけばいいんだから。

平常心、平常心。相手は怪我人。頭のネジが数本外れていたとしても、それでも怪我人なんだから手を上げちゃ駄目。

自己にそう言い聞かせ、私はできるだけ平常心を保ちながら白ウサギに話しかける。

「さつき、この世界には代わりがいるって話してたでしょう？ あれ……本当なの？」

「本当ですよ。この世界では誰かが死んでもすぐに代わりが現れる。私だって今日死ねば、明日には代わりが現れて、またこの不思議の国の案内人になる。その繰り返しですよ」

特に気にした様子もなくそう語る白ウサギに何故だか私は苛立つ。

「貴方……それでいいの？　少しは可笑しいとか嫌だとか思わな  
いわけ？」

私のこの問いかけに白ウサギがきよとんとする。

「可笑しい？　そうなんですか？　私達にはこれが常識なので  
何とも言えないのですが、嫌だとは思いませんよ。私が死んだ後代  
わりが現れなきゃ、アリスが悲しんでしまう」

おそらく白ウサギの言うアリスとは私じゃなくて最初のアリスの事  
なのだろう。

「代わりって言うてもしよせんそんなの代わりでしかないじゃない  
！　白ウサギ自身ではないんでしょう！？」

「ええ、でも基本的に同じです。姿も声もそしてアリスを思う心も  
全て同じです。代わりにはそれまでの記憶はありませんが本物であ  
った人物の一番強かった思っただけが代わりに引き継がれるんです。  
私はアリスを何よりも誰よりも思っていますからきつと代わりに引  
き継がれるのはこの思いでしょう」

どこか嬉しそうにそう言う白ウサギを私は全く理解できず、それど

ころかそれを見て、さらに混乱する。

何でそんなに嬉しそうにするの？ 代わりは代わりで貴方ではないの。

しかしその言葉を口にする事はけしてしない。

あまりにも幸せそうにそう語る白ウサギにそんな事、とてもじゃないけど言えなかった。

白ウサギとのワルツ      その3 (前書き)

白ウサギとアリスは結局のところ仲がいいです。

二人のやりとりは和やかで書いてて楽しいです。

まあ、大抵白ウサギがアリスに殴られてるだけなんですけどね。

## 白ウサギとのワルツ

### その3

「納得できませんか？」

「え？」

嬉しそうな白ウサギの顔を黙って見ていたら、突然笑顔をけして白ウサギはそう言い、私の方を不安げに見てくる。

顔に出していないつもりだったのに、でていたのだろうか？

私は慌てて否定する。

「そんな事は……」

ない、そう言いつつもりだったのにその前に白ウサギが言う。

「私のために嘘を言わないで下さい。貴方のその顔は納得しているものではない。私の言ってる事が理解できない、そう思っているんですよ？」

何故そこまで白ウサギはわかっているのだろうか？

私は昔から本心を隠すのがうまかったはずなのに、どうしていつも白ウサギにはわかってしまうのだろうか。

「何で……」

何で貴方にはわかるの？

白ウサギが笑う。

紅い瞳が優しげに細まる。

「私は白ウサギですから貴方の事なら何でもわかります」

相変わらず、意味のわからない答え。

その答えを今回ばかりは何故だか許せる気がした。

「変なの……」

「理由がこれじゃあ不満ですか？　じゃあ、愛の力って事にしておきましょう」

「そっちの方が嫌」

「アリスはやっぱり照れ屋ですね。じゃあ、私には特殊な能力があつて何でも貴方の事がわかるとでも思つて下さい」

「それは……」

それで気持ち悪い。

でも、それ以上詰め寄るのもあれだと思い、何も言わずに静かに頷く。

「代わりは所詮代わりだと貴方はさっき言いましたね。代わりは所詮代わりで私ではないと」

白ウサギはそう言って、確かめるように私を見る。

そう、確かにそう言った。

「それはとても正しい考え方です。代わりは所詮は代わり。それはもちろん私達だってわかっていきます。その証拠にこの城では代わりよりも本物の方が権力があるんです。三月ウサギがどんな事をしても、誰も止めたりしないのはそのためです。彼は本物ですからある程度の事は規則を破っても許される」

だから彼はあんなめちゃくちなお茶会を開いても、夜な夜な城を改造していても、誰も本気で止めたりしないのか。

「それに私もルールを破って、貴方を連れてきましたが運がいいのか未だに罰せられてはいません」

やっぱり私を連れて来るのはいけない事だったのか。

住人達の会話からもしかしたらとずっと思っていたが白ウサギのその言葉で確信した。

「本物は何をしても許される訳ではないんですが、代わりよりもずっと優遇されているんです」



「そうなんだ……」

何だろう？ 何を白ウサギは言いたいのだろうか？

何のためにそんな話を今さら私にするのだろうか？

「白ウサギ……」

貴方は何が言いたいの？

「でも、よく考えてみて下さい。代わりは本物である私達と全く同じ姿なんですよ？」

白ウサギは何故だか必死にそう訴える。

「外見だけでしょう？」

「いいえ、例え記憶がなくても心は同じです。だからこそ本物の一番強い思いを引き継ぐ」

「でも……」

だから何なんだ？

白ウサギを困惑ぎみに見つめると白ウサギが笑う。

「アリス……だから、だからもし私が死んだとしてもその時は決して悲しまないで下さい」

白ウサギのその一言に私は固まる。

呆然と白ウサギを見れば白ウサギが笑う。

「私がどんな怪我をしたとしても、例えばどんな事になろうと貴方が傷つく必要はありません」

ああ、わかった。

白ウサギが何を言いたいのかわかってしまった。

「例え私が死んでもすぐに代わりが現れます。だから貴方が泣く必要なんかありません」

真剣な表情で白ウサギはそう言う。

バカみたい。生きてるうちに自分が死んだときの心配をするなんて本当にバカみたい。

「貴方は優しいから私が死んだら泣いてくれるんでしょう？」

私が優しい？

違う、優しいのは私じゃなくて白ウサギの方だ。三月ウサギが言っていたように白ウサギは優しい。

「でも泣かないで下さい」

優しいからこんな事を平気で言う。私ばかりを気にして、全く自分の事を省みない。

「私は……」

「もじいしー!」

白ウサギの言葉を遮り、私は思いっきり白ウサギの頬をつねると引く張る。

「あつ、あ、いす!?!? ひゃ、めて、くやさい!」

頬を引く張ってるため、さっぱり何を言ってるかわからないが、たぶんアリス、止めて下さいとか言っているのだろう。

もちろん止める気はない。

ぐいぐいと引く張るとあたふたと白ウサギが両腕を動かす。

「痛い? でも貴方が悪いのよ?」

「ひゃいつ!?!?」

そんなバカみたいな話を突然するから、だから白ウサギがいけない。

「貴方が死んで、誰が泣くって？　悪いけど私は絶対に泣かないから」

むしろ嬉し泣きしそうだとわざと白ウサギに言ってやる。

「だいたい、死んでもないくせにそんな事心配するなんてバカ？  
せめて君を悲しませないために絶対に死なないとか言えない訳？」

ぐいぐいと白ウサギのほっぺたを伸ばす。

意外と結構のびるもんだ。

「そんなんだからいつまでたっても変態のままなのよ！」

ぱっと手をはなす。

白ウサギのほっぺは真っ赤にはれ、見るからにじんじんと痛そうだ。

それでも白ウサギは泣き言も文句も言わない。

「言っておくけど私を落とす気なら、それぐらい簡単に言えるべからいの覚悟がなきゃ駄目だから」

白ウサギは呆けたように私を見つめる。

そんなにこっちを見ないでほしい。

ただでさえらしくもない事を言っただけで恥ずかしいのに、そんなふうに見られたら、たまったもんじゃない。

「アリス……」

「何よ……」

「成長したんですね……」

「はあ?」

白ウサギの一言に今度は私が目を丸くする。

何が成長したよ!? 貴方と会ってまだ3日も過ぎてないのに、

何でそんな事言われなきゃいけないの!?

その事に関して私は文句を白ウサギに言うが、白ウサギは全く気にせず、声を出して笑う。

「何、笑って……」

「アリス、せつかくだからこのまま一緒に寝ませんか?」

「はい!?!?」

何でそうなるの!?

「せつかく私の部屋に来たんです。このまま一緒に寝ましよう?」

いや、せつかくも何も訳がわからない。

何で白ウサギと一緒に寝なきゃいけないわけ?

可笑的いでしょ?!

「アリス、さあ」

何がさあよ、この変態。これじゃあ貴方を心配した私がバカみたいじゃない。

逃げだそうとしたら、その前に白ウサギに腕をつかまれた。

「どこに行くんですか？」

ヤバい。何か本当に危ないんですけど。

「どっつて、ねえ？」

「三月ウサギとは寝たのに私は駄目なんですか？」

「あれは三月ウサギが勝手に……」

「そうですか。じゃあ、私も勝手にします」



白ウサギは私を突然抱き寄せるとそのままベットの中に潜り込む。

「ちよっ!？」

慌てて暴れるが、白ウサギは私を抱き枕のように抱きしめたまま動かない。

「さっき、寝たばかりなのに寝れる訳ないでしょう!？」

「大丈夫ですよ。この国は時間がとても曖昧なんです。だから時間の流れが速かったり、遅かったりして……まあ、その説明はまた今度として、とにかく寝ようと思えば意外と簡単にいつでも寝れるんです」

「それは寝ようと思えばでしょう!？　　私は寝たくない!」

「駄々をこねないで下さい。仕方ないですね、私が子守唄を歌って差し上げますよ」

「いらない。絶対にいらない」

こう言ったらあれだが、なんだか白ウサギは下手そつだ。

「まあ、そう言わずに」

私の意見など全く無視して白ウサギが歌い始まる。案の定その歌は酷いものだった。

何だこれは……

聴けない程ではないが聴いていたいものでもない。

はっきり言って、不快。

「下手くそ、せめて歌うなら、もう少し上手く歌いなさいよ……」

「嫌ですか？　嫌なら止めますよ？」

白ウサギは笑いながらそう言う。

その顔が何だか無駄にいらっとくる。

ここで止めさせたら負けだ。私は覚悟を決めた。

「別にそこまで言っていない。さっさと続きを歌いなさいよ」

「はい」

また白ウサギが下手な子守唄を歌う。

下手くそだ。本当に下手くそだ。

だからだろうか？

何故だか胸が熱くなって、瞳から涙が流れ落ちた。

しばらくすると瞼が重くなってくれ。

まさかこんな状況でも眠れるとは。私は一人自嘲気味に笑うと目を閉じた。

白ウサギとのワルツ      その4（前書き）

白ウサギは親切心で子守唄を歌ったのですが、アリスに酷い言い方されてますね。

アリスが言う程白ウサギの歌は下手じゃなかったと思われませう。

## 白ウサギとのワルツ　その4

ふんわりと漂う甘い香り。誘われるままに目を開けるとそこには一面、見たことがない花が咲いていた。

ほんのりと赤い、小さな小さな花。それがこれでもかというほどにしきつめられ、まるで上等な赤い絨毯のように見える。

綺麗……

思わず私は息を飲み、手入れの行き届いた庭を見つめる。

姉さんと一緒に私も庭の手入れをした事があつたからわかるがここまで綺麗に仕上げるとなるとそれこそかなりの労力が必要となつた事だろう。

誰がここまで綺麗に手入れをしたのだろうかと考えていると、不意に人の声が聞こえてくる。

この庭を手入れしている人のものだろうか？

声が出た方へと振り返り、庭の手入れをしたと思われる人物を見て、私は思わず驚きの声をあげる。

体格の良い身体に焦げ茶色の髪、顎の下にのばされた髭。

侯爵？

予想外の人物に私は目を丸くし、呆然と庭手入れをする侯爵を見つめる。

あの上等な上着が無造作に地面に投げられ、ズボンはすでに土がつき、汚れてしまっている。さらにめくり上げられたワイシャツにも土が若干ついていて、せつかくの高い服が台無しになっていた。

侯爵ともあるう者が手を泥だらけにして庭の手入れをしているなんて……

侯爵ぐらいの地位なら、いくらだって使用人を雇えるだろうし、誰か別の人に頼んで、やって貰えばいいのに。

確かに侯爵は地位を持っていても威張ったりしない、素朴な人なのだが、ここまでするのはどうだろうか。

心配して見ていると、地面に落ちていた上着を誰かが拾い上げた。

「あんださあ、自分が侯爵って事自覚してる？」

上着についた土を払いながらチエシヤ猫がそう言って、せっせと作業をする侯爵に近づく。

どこから現れたんだろう？

全く音がしなかったから、チエシヤ猫が視界に現れるまでその存在に気づかなかった。

「あ？ 当たり前だろう？ 俺は侯爵だ。他の何者でもないぜ」

「普通、侯爵は土いじりなんかしないだろう？」

私の考えていた事と全く同じ事をチエシヤ猫は侯爵に言う。

侯爵はそれに笑顔で答える。

「決めつけは良くないぜ？　侯爵だからって庭の手入れをしちやいけない訳じゃないだろう？」

「まあ、そうだけどさ」

チエシヤ猫は侯爵の隣に立って、興味なさげに作業を眺める。

「この花、あれだろう？　ご主人様の好きな花」

「おう！　一人で全部植えたんだぜ。すげーだろう？」

「あはは、侯爵様はご主人様の気をひくのに躍起だね」

チエシヤ猫はそう言って笑う。

しかしその言葉を聞いて、侯爵の顔が若干ひきつる。

「悪いかよ……」

どこかいじけたようにそう言う侯爵にチエシヤ猫は苦笑する。



「あのね、いくらその花が好きだからってそんなに植えてどうするのさ。せっかくだったら色んな花と一緒に植えれば良かったのに」

「そつゆづものなのか？」

「あんだ、本当にどつか抜けてるよね」

チエシヤ猫は呆れた顔をしつつも、作業から目を離さない。

「よくめげないよね」

「ああ？ 何の事だ？」

「プロポーズ。さすがに10回も断られたら誰でもあきらめるよ」

チエシヤ猫が苦笑混じりでそう言うと途端に侯爵の顔が赤くなり、そのままやけくそ気味に怒鳴る。

「うるせえ！ そんなの人の勝手だろう！？ 10回どころか20回でも30回でも、プロポーズしてやるよ！」

「うわ……あきらめ悪っ」

「ああ！　俺はあきらめの悪い男なんだ！」

「そこで威張られても困るんだけど……」

呆れるチエシヤ猫を後目に慣れた手つきで侯爵は作業をこなす。

「そうか……一種類じゃ駄目か。今度は別の種類の花も用意するかな」

「えっ！？　まだ植える気なの！？」

「ああ。目標はこの庭全体を花で埋め尽くす事だからな」

「うわぁ……まだやる気なんだ。本当にあきらめの悪いと言っか、暇人と言っか」

「お前！　俺は侯爵だぞ！　暇な訳ないだろうっ！？」

「じゃあ、仕事したら？」

「お前って奴は……仕事と恋、どっちが大切かなんて、聞かなくて  
もわかるだろう？」

「わかんない。あんたが何でそこまでするか俺にはわからないよ」

チエシヤ猫は侯爵の上着をたたみ、土のつかなそうな場所にそっと  
置いてから呟く。

「だいたい相手が侯爵夫人だからって、そんなのどうせ名前だけの  
関係だろう？　　実際、夫婦になんかならなかつたっていいじゃんか」

チエシヤ猫のその言葉に侯爵は作業を止め、チエシヤ猫の方を見る。

「よくねえからこんな事してんだろ？」

侯爵はぱつと手についた土を落とすと立ち上がる。

「お前もあいつと同じ事を言っただな。呼び名だから別にそんな関  
係にならなくていい。あいつもプロポーズの度にそう言いやがる」

「でしょう？　そうゆうもんなんだよ。あんただけだよ、そうやってこだわるのは」

「かもな。いや、確実に俺だけだろうな」

そうやって、侯爵がにやりと笑う。どこか勝ち誇ったようなその笑みをチエシヤ猫はきよとした表情で見つめる。

「確かにそうなんだが1人ぐらい、こんなバカげた男がいてもいいだろう？」

そうやって、侯爵は自分の作った庭を見渡す。

まるで侯爵のその言葉を肯定するかのように小さな赤い花達が風に揺れる。

風に吹かれ、数枚の赤い花びらがひらひらと宙に舞い上がった。

その花びらをチエシヤ猫は眩しそうに目を細めて、見上げた。

「……あれ？」

ゆっくりと数回、私はまばたきをしてから辺りを見渡した。

そこは先ほどまでいた美しい庭ではなく、見慣れない部屋の中だった。

また、夢？

最近やたらとリアルな夢をみるようになってきたな。昔なんか見た夢の内容なんて、全然覚えてなかったのにここ最近の夢は妙にはつきりと覚えてる。

しかも決まってそこにはこの不思議の国の住人達が出てくる。

なんだかどんどん侵食されてきている気がする。

私はため息をつき、もう一寝入りしようと目を閉じた。

幸い、あのうるさい雑音は消えたみたいだし、これでゆっくりと眠れる。

うん？ 雑音？

はっとして、私は飛び起きる。

「私のバカ！ 何、二度寝なんかしようとしてるのよー！」

すっかり忘れてたけどここは確か白ウサギの部屋だったはずだ。

あのまま強引に眠る事を強要されたとはいえ、まさか本当にそのまま寝ちゃうなんて、いくら何でも私ってば無防備すぎでしょう！？

しかも白ウサギいわく、子守唄というあの雑音の中でよくもこうも熟睡できたものだ。

自分に呆れはてて、言葉も出てこない。

「私のバカ……」

嫁入り前の娘が二回も男の人と同じ布団で寝るなんて……姉さんが知ったら卒倒するかもしれない。

「そうよ。ここは不思議の国。これぐらいしたって別に……」

別に……

別に……

良くないか。

私がつくりとつなだれながらも、ベットからどっにか抜け出し、部屋の中を見渡す。

あれ？　　そう言えば白ウサギはどこ？

隣に寝ていたはずの白ウサギの姿がどこにもない。

「白ウサギ？」

私の呼びかけに答える声はなかった。



白ウサギとのワルツ      その5（前書き）

大事なものはなくなってから気づく。

白ウサギがいなくなってアリスは寂しいようです。

白ウサギとのワルツ その5

「白ウサギ？」

どんなに呼んでも答える声はない。

どこ行ったのよ……

何だか妙な感じだ。いつもは呼ばなくなっただけでとんで来るくせにこういう時に限っていないなんて。

「白ウサギ？ いないの？」

念のため、もう一度呼んでみるがやはり返事はない。

もう、どこに行ったのよ……

どこかに行くなら行くって一言言ってから行けばいいのに。

しばらくここで待っていていようかとも考えたが、部屋の主がいないのにそこにいるのはなんだか可笑しい気がする。

仕方なく、私は部屋の扉を開け、白ウサギの部屋から出る。

さて、どうすればいいんだろう？

部屋からとりあえずは出たものの行くあてもないし、かと言って廊下にただ立っているのもあれだ。

「白ウサギのバカ……」

どこに行ったの？

いくら考えてもさっぱり白ウサギがいそうな所が思いつかない。

あんな事した後じゃ、三月ウサギの所にはいないだろうし、帽子屋はどこにいるかわからないし……

よくよく考えれば白ウサギはどうしていつも私のいる所がかわかったのだろうか？

こんな広い城の中で、例えいくら住み慣れてるとは言っても、たった一人を探し出すのは相当骨がおれる作業に違いない。

白ウサギは私がいなくなる度にこの広い城内を探しまわっていたのだろうか？

何だか少し罪悪感らしきものを感じる。

「とりあえず……どうしよう……」

どこかに行かなければ。

そう思って歩き出した、その時、突然後ろから誰かに抱きしめられた。

「ぎゃあああ！」

「うわっ！？」 意外と勇ましい悲鳴

あれ？

この声、聞いた事がある。

慌てて振り返れば、すぐそばに相手の顔があった。

にんまりとした笑顔。見慣れたその顔に私はほっと安堵する。

「チエシャ猫……」

「正解。久しぶりだな、アリス」

満面の笑みを浮かべ、私の問いかけに嬉しそうにチエシャ猫は答えた。

「アリス、会いたかったよ」

チエシャ猫はそう言って、私を再び抱きしめる。

「ちよっ、ちよっど!?!」

前々から思ってたけどこの住人達はいきなりすぎる。チエシヤ猫にしる白ウサギにしる、出会いがしらにいきなり抱きしめるなんて、普通ありえない。

慌てて私はチエシヤ猫の腕の中でもがくが細く見える腕には意外に力があり、びくともしない。

もっともこれぐらいの力がなきゃ、銃を扱えないだろうし、こんな危ない世界では生きていけないだろう。

もがく私を見て、チエシヤ猫は楽しそうにする。

「そんなに顔を赤くしちゃって可愛いな。あ、ひょっとして俺に気がある？」

そんな訳あるか！

ただ同年代の子にこんなふうに抱きしめられたのは生まれて初めての事だった。

婚約者になるはずの人だってこんなふうに私を抱きしめたりはしていない。

唯一、私をこんなふうに抱きしめた事がある人と言えば……

脳裏に目に痛いほどの白に鮮やかな紅が浮かぶ。

そう、私をこんなふうに抱きしめたのは白ウサギくらいなものだ。

ちらりと辺りを見る。

やはりその姿はどこにもない。

いつもならこんなところを見て、すぐに怒って、剣を振り回しながら怒鳴りこんでくるのだ。

「ひょっとして……もう白ウサギのものになっちゃった？」

考え事に没りかけた私の意識をチェシャ猫の言葉が一気に引き上げる。

「はい……？」

白ウサギのものってどういう意味よ!?

信じられない思いでチエシャ猫を見ればチエシャ猫が面白くなさそうに言う。

「だって、そこ。白ウサギの部屋だろう?　　白ウサギの部屋に今までずっと居たんだろう?」

誤解だ。確かにずっと居たがたぶんチエシャ猫の想像しているような事は何もしていない。

「あのね……私はただ白ウサギの怪我の手当てをしただけで……」

「怪我の手当て?　　本当にそれだけ?」

「うっ……」

チエシャ猫の鋭い言葉に私は思わず反応してしまい、チエシャ猫がそれを見逃すはずもない。



「他にも何かあったんだ？」

「いや、その……」

駄目だ。隠しきれない。

私はついに諦め、チエシヤ猫に何があったか話した。

「え！？ あんた、白ウサギとやっちまったの！？」

「やってない！ 一緒に寝ただけ！ 添い寝程度よ！」

「じゃあ、三月ウサギとやっちまって……」

「ない！ 絶対にそんな事はないから！ 有り得ないから！」

私がいくらそう言ってもチエシヤ猫はまだ疑り深そうに見ている。

まあ、2人の男性と寝たなんて言われたら疑うのが普通か……。

言っておくがどちらも不可抗力だ。私のせいじゃない。あっちが私の意志に関係なく、勝手にやったんだからね。

チエシヤ猫はしばらく私の顔を見てから、小さく舌打ちする。

「何だよ、みんなして抜けがけしやがって」

チエシヤ猫はしばらく黙ってから私の腕をひく。

「チエシヤ猫？」

「よし、俺もアリスと一緒に寝る」

はい？ 何ですって？

「一緒に寝る？」

「ああ」

「誰が？」

「決まってるだろう？ 俺とアリスだよ」

何でそうなるのよ!？

私は慌ててチエシヤ猫の腕を振り払う。

「じよ、冗談じゃない！ 絶対に駄目！ 何でこれ以上面倒な事に巻き込まれないといけないの!？」

「何だよ、ウサギとは寝れて、猫とは寝れないのかよ?。」

いやいや、そこは関係ないから。実際、どっちもウサギじゃなかったし、チエシヤ猫だって猫には見えないから。

「ひょっとして、猫が嫌い？」

「いや、猫は好きだけど……」

「じゃあ、いいよな」

いや、よくないでしょう？ 貴方はどう見ても猫じゃなくて人間じゃない。どこがいいのよ。

いくら反論しようとしてもチエシヤ猫はちっとも相手にしてくれない。

結局、半ば強制的にチエシヤ猫と行動をともにする事になってしまった。

白ウサギとのワルツ      その6 (前書き)

今回、まさかのアリスが出てきません。予想外にアリスがいないサ  
イドが長くなってしまいました。

白ウサギとのワルツ      その6

「君は本当に使えない奴だな……」

三月ウサギはわざと嫌みつたらしくそう言って、テーブルをひとなでする。

指の先にわずかについた汚れを見て、三月ウサギは顔をしかめ、眠りネズミに責めるような視線を向ける。

「見る。こんなに汚れているじゃないか。君の目は節穴かい？ろくに掃除もできないとはなんて嘆かわしい事なんだ」

三月ウサギは大げさにそう言って、やれやれと首を振る。

「全く使えない奴め」

三月ウサギの最後の言葉にさすがの眠りネズミも頭にきたのか三月ウサギをきつと睨みつける。

「お前……何を偉そうに……人にお茶会の準備を全て押しつけて、自分は今まで遊んでいたくせに私に文句を言うとは……」

「遊んでいたんじゃない。アリスの相手をしてたんだ」

「同じだろう!! 結局のところ、アリスで色々と遊んでたんだろっ!」

「そんな人聞きの悪い言い方をしないでくれ。私は善意でアリスに助言してただけさ」

「善意? お前に善意なんてものがある訳ないだろう」

今日はやけにつっかかるものだ。

三月ウサギはいつもより少々機嫌の悪い友人を見て、首を傾げる。

「君は何を怒っているんだ? あれか? そんなに私がいなくて寂しかったのか?」

「うぬぼれもたいがいにしろ! 誰が寂しがるか! むしろ、お前なんかいない方がせいせいする」

「そのわりには私をえらく探してたじゃないか」

三月ウサギの何気ない一言に眠りネズミはぎよっとする。

「なっ!?!? ちがつ、何でその事を……」

図星か。あまりにもわかりやすすぎる眠りネズミの態度に三月ウサギは思わず声を出して笑ってしまう。

「本当に探していたのかね？」

「!?!? お前!?!? はめたな!?!?」

「はめられた君が悪い。そうかそうかやはり私を探していたのか。どつりでお茶会の準備が中途半端なはずだ」

三月ウサギはちらりとテーブルを見る。

食器も茶菓子もお茶も用意はされてあるがまだテーブルには一つも並べられていなかった。



おそらく眠りネズミはそれらを放り出して三月ウサギを探しに出かけたのだろう。

そうわかってしまえば、責めるのも可哀想に思い、三月ウサギは笑いながら茶菓子をつかむ。

「さつさと準備しないとお茶会ができないぞ？」

「……っ、偉そうに」

「何だ？ 文句あるのか？」

三月ウサギが怪訝そうに問いかければ眠りネズミはむすりとないと答える。

相変わらず、どこか拗ねたような態度をとる眠りネズミを三月ウサギはひどく珍しそうに見る。

前にだって眠りネズミを置いていった事などたくさんある。

置いていくどころかもっととんでもない事をした事だってある。

例えば新型のトラップの実験体にしたたり、射撃の的にしたたり、何度が本気で撃ち殺そうとした事さえある。

もちろん実際殺しはしなかったが三月ウサギは手加減など一切しなかった。

それぐらいで眠りネズミが死ぬとも思っていなかったし、三月ウサギは手加減などするようなたちではなかった。

そんな事をする度、眠りネズミは飽きもせず三月ウサギを怒鳴りつける。

怒鳴りつけるだけ怒鳴りつけてから、結局最後はもういいと言って機嫌を直すのだ。しかし今回は違う。

その事が少し気になって、三月ウサギが眠りネズミに尋ねようかと考えていた矢先、珍しい客人が現れた。

大きめな帽子にだらしない服を着た男。

驚く眠りネズミをよそに三月ウサギは笑顔を浮かべる。

「やあ、帽子屋。君が一人でお茶会に来るとはいつ以来だろうね」

三月ウサギのその言葉に帽子屋は何も答えず、さっさと部屋の中に入ると相変わらずの不機嫌な顔で三月ウサギを睨みつける。

「そんな怖い顔してどうしたかね？　あいにくお茶会はまだ開かないよ？」

三月ウサギが冗談めかしにそう言つと帽子屋は眉間のしわをより深くした。

しばらくの間帽子屋は何も言わなかったが、しばしの沈黙後、帽子屋がようやく口を開いた。

「白ウサギを見たか？」

「白ウサギかね？」

「そうだ。さっき、城を出て行く影を見た。あれは白ウサギだっ

た  
」

真剣にそう語る帽子屋に対し三月ウサギは相変わらずぶざけた感じ  
でしゃべる。

「おや、白ウサギが？　よくあのアリスから離れたもんだ。何せ  
彼のあのアリスへのこだわりようったらなかったからね」

「俺はそんな事を聞きにきたんじゃない。あいつが何をしに出て行  
ったのか聞きたいんだ」

帽子屋のその言葉に三月ウサギはにやりと笑う。

「人に尋ねるときにはもう少し丁寧に頼んだらどうだい？」

「お前に丁寧な言葉を使う気はない」

「酷いな。そんな言い方しなくてもいいじゃないか」

「うるさい！　ちっさと教えろ！」

痺れを切らした帽子屋がどこからか自分の剣を取り出し、三月ウサギに剣先を向ける。

三月ウサギはそれに動じる事なく、静かに帽子屋を見る。

刃を向けられているというのにその顔はひどく落ち着いていた。

「三月ウサギ！」

眠りネズミの焦ったように声を出し、懐からナイフを取り出すと構える。

今にも飛びかかるとする眠りネズミを止めたのは帽子屋ではなく、三月ウサギだった。

「眠りネズミ、大丈夫だからナイフをしまえ」

笑ってそう言う三月ウサギに眠りネズミは困惑したものの、それでも大人しくその言葉に従う。

「帽子屋。何をそんなに焦っているんだ？　白ウサギが城を抜け出す事なんかいつもの事じゃないか」

「……つい前まではな。あのアリスが来てからは違う」

帽子屋はそう言い、三月ウサギを睨みつける。

「お前は知っているんだろう？　あのウサギはいつたいあの娘をどうする気だ？　あの娘を巻き込んで何をしようとしている？」

帽子屋の問いかけに三月ウサギは何も言わない。

ただ帽子屋の顔をしげしげと眺める。

しばらく眺めてから三月ウサギはため息まじりに呟いた。

「らしくない。本当にらしくないよ」

「何だと？」

「らしくない。そう言ったんだよ、帽子屋。たかが一人のアリスに

「こだわるなんて君らしくないじゃないか」

三月ウサギはそう言って、無表情で帽子屋を見つめる。

「君らしくない。そんなにあの少女を気に入ったのかい？」

「アリスを気にかけるのは当たり前だろう」

「ああ。でも君は今まで一度もそんな事しなかったじゃないか」

三月ウサギの問いかけに帽子屋は答えない。

そんな帽子屋を見て、三月ウサギは笑う。

「白ウサギはこの国の案内人だ。彼が何をしようとしているかは彼自身にしかわからない。知りたいなら彼に直接聞いてくれ」

「お前は知っているだろう」

「知らないよ。彼が何を考えてるかなんて知りたくもないよ。だが、

一つだけ言える事がある。白ウサギはあの少女を傷つけたりは決してしないよ」

三月ウサギはそう言って、帽子屋に刃をどかすように促す。

帽子屋はあっさりとそれに従い、剣を鞘におさめるとさっさと三月ウサギ達に背を向け、お茶会の会場から出て行った。



白ウサギとのワルツ      その7（前書き）

前半はいつもの軽い感じに後半は少しシリアスになっています。

今回、とんでもないところできました。

白ウサギがどうなったかは次回をお待ち下さい。

白ウサギとのワルツ その7

「ねえ、どこ行くの？」

私の問いかけにチエシヤ猫はにやりと笑う。

「俺の部屋」

「うえええっ!?!」

「え？ 何、そんなに嬉しいの？」

嬉しいわけあるか！

これ以上そんな事したらもう姉さんに合わせる顔がない。

私は踵を返し逃げようとするも、チエシヤ猫は私が逃げるよりも早く、腕をがっしりとつかむ。

「何で逃げるのさ？」

「逃げるに決まってるでしょう！」

部屋に着いたら、何をするのかわからない程、私だってばかじゃない。

「もう私は眠くないの！」

私の精一杯の拒絶の言葉にチエシヤ猫は笑って答える。

「大丈夫だって。俺、あの2人より優しくするから」

「や、優しく!?!」

何を優しくする気なのよ!?

変態と叫び出しそうになるのをぐっとこらえて、私はチエシヤ猫から逃れる言い訳をあれこれ考える。

このままだと間違いなく、無理やり一緒に寝かせられる。

「だ、だからもう十分寝たから……もう眠るのは……」

「大丈夫だって、ベッドに横にさえなってくれば後は俺が全部やるから」

「全部？」

「アリスは何もしないで横になって、おとなしくしててよ。あ、服は自分で脱いでくれると嬉しいな」

「ふ、服を脱ぐ！？ 何で服なんか脱いで……」

「うっん、脱がすのも嫌いじゃないんだけどさ」

「脱がす！？ 脱がすつて、ええっ！？」

貴方は何をしようとしてるの！？

私は必死に捕まれた腕をふりほどこうともがく。

「何やってんの?」

「何って、見てわかるでしょう!？」  
凶悪な狼から逃れようとしてるの!」

「狼? ここに狼なんかいないじゃん」

「貴方が狼なのよ!」

「俺? 俺は猫だけど?」

「どこがよ!？ 貴方のそのどこが猫なの!？」

駄目だ。話が全く通じてない。

どうして!どうゆう時に限って、白ウサギはいないのよ!

「とりあえず落ち着けて、あんまり興奮すると体に悪いぞ?」

「誰のせいよ、誰の!」

「うーん、俺？　でもそんなに興奮させるような事言ったけ？  
あ、やっぱり俺と寝たい？」

誰が寝るか！

「貴方と寝るなんて身の危険しか感じない！」

「その感じがたまらないんだな？」

「何でそうなるのよ!？」

前から思っていたが不思議の国の住人達は皆顔がいい反面、頭がどこかおかしい。

白ウサギしかり三月ウサギしかりチェシャ猫しかり……

変人ばかりだ！

笑いながら誘ってくるチェシャ猫に私はぶんぶんと首を横に振る。

「いいじゃん。俺、かっこいいし」

「自分で言うな！」

「だってそうだろう？」

確かに顔はいい。だが、今の問題はそこじゃない。

「俺、意外と尽くすタイプだし。どう？　俺と今のうちにやっちゃえばもう白ウサギに追いかけれなくてすむだろう？　俺が守ってやるからさ」

そんな事したら間違いなく白ウサギはチェシヤ猫を殺しにかかるだろう。

容易にその姿が想像できて苦笑する。

「貴方になんか守って貰わなくても結構よ」

何だかんだ言っただけで白ウサギは私に甘い。

あれだけの力があれば私を押し倒す事も無理をしいる事も簡単にできるのに白ウサギはそんな事を一度もしなかった。

変態だけど変なところで紳士的なよね。

「へえ、案外白ウサギの事信頼してるんだ」

「別にそうゆう訳じゃないけど……」

「そう？　俺には信用してるようにしか見えないけどな」

そつとチェシヤ猫が私の腕を引く。

少し距離が近くなる。

「あんだ、無防備すぎ。そんなふうにすぐに人を信用してるとそのうち本当に食べられちゃうよ？」

「ち、近い！近いから!？」



何故だかチエシヤ猫は私にやたらと顔を近づけてくる。

とつさに身を引こうとしたが腕を強く捕まれている、全く身動きがとれない。

チエシヤ猫の笑顔が迫る。

これは……ひょっとして私、ピンチじゃない？

「チエ、チエシヤ猫！」

「何？」

「え、えっと、あっ、魚が空を飛んでる!!!」

「……」

私は何を言ってるんだろ。いくら何でもこんな嘘、騙される訳がない。

しかもチエシヤ猫は別に猫じゃないし。魚好きかどうかもわからないのにこんな事言ってる……

私はおそらく呆れているであろうチエシヤ猫を見る。

しかしチエシヤ猫は私の方なんか見ていなかった。窓の外を何故だか食い入るよう見つめている。

「チエシヤ猫？」

「どじ、どじ！？」

「え？」

「魚！ どこだよ！ 見えないぞ！」

ほ、本当に信じないでよ！？

「チエシヤ猫！ 貴方頭大丈夫！？」

私は思わず心配になってチエシヤ猫に尋ねる。しかしチエシヤ猫は

チエシヤ猫で魚を探すのに夢中だ。

「魚が見えねえ！　魚！　魚ああ！」

大声で魚を呼ぶチエシヤ猫に私は若干恐怖を感じて、押し黙る。

え？　大丈夫？　その頭で大丈夫なの！？

と、とりあえず、一度落ち着こう。

チエシヤ猫は窓の外を夢中で眺めている。

あ……

腕の力が弱まった事に気づき、すかさず私はその腕を振りほどき、逃げ出した。

「あ！　アリス！」

チエシヤ猫の慌てた声が聞こえる。

「待てよー」

「待たない！」

きっぱりそう言って私は廊下を走り抜けた。

妙な感じがする。

白ウサギはゆっくりと顔を上げ、鋭い目で周りを見渡した。

彼の両手には剣が握られ、足下には死体と思しきものがばらばらに散らばっていた。

彼の服には返り血がつき、剣の先から生々しい血が流れ落ちている。

しばらく呆けたように白ウサギがそこに立っていると地面に落ちていた死体が音もなく消え去り、死体があった場所には数枚のトランプが落ちていた。

赤と黒のトランプ。

白ウサギはそれを一瞥も見もせず、何かを探しているように周りを見渡す。

「気のせいかな？」

若干安堵したような声で白ウサギはそう言い、緊張した表情を崩す。

妙な胸騒ぎを感じたのはアリスが眠り込んですぐの事だった。

白ウサギはやや惜しみつつも部屋にアリスを残し、一人出てきたのだ。

城の外には案の定、トランプ兵の姿があった。

女王の忠実な僕達。

彼らをなぎ払うのは億劫ではあったがさほど大変な事ではなかった。

「たかがトランプ兵ならアリスを一人にしてまで来なくても良かったな……」

白ウサギは深くため息をつき、何も言わずに部屋に残してきてしまった少女を思う。

もう起きてしまったのだろうか？

自分がないベッドを見て、彼女は何を思うのだろうか？

「とりあえず寂しがつて泣いてくれたりは………しませんね」

あの意地っ張りな少女がそんな事をするはずがない。

おそらく一人置いていかれた事に対して怒っているに違いない。

白ウサギの表情が僅かに和らぐ。

「ああ、またアリスに殴られるかもしれないな」

どこか嬉しそうに白ウサギがそう呟いたその時、空気が僅かに揺れた。

その僅かな変化に白ウサギが気づいた時、すでにもう遅かった。

何の前触れもなく、鋭い刃が白ウサギの背中を貫き、深々と体に刺さる。

とっさの事に叫ぶ事もできず、白ウサギはただ目を見開き、その場に膝をつく。

白ウサギの血が肉を裂いた刃を伝い地面へとゆっくりと落ちていく。

滴り落ちる自分の血。

口を開けば血が口の中に溢れ、白ウサギは呼吸する事さえできず、苦しげにその場で咳き込む。

苦しむ白ウサギを見て、誰かが笑った。

「いい姿ね、白ウサギ。貴方にとってもお似合いだわ」

深々と白ウサギに刺さっていた刃が容赦なく抜かれる。

「うがあっ!」

白ウサギはあまりの痛みにも声を上げ、その場に力無く倒れた。

地面が白ウサギの血によって赤く赤く染まっていく。

「ねえ、私のアリスはどこ?」

赤く染まった刃が光る。

誰もが驚くような大きな鎌を片手に彼女は楽しげに笑った。



白ウサギとのワルツ

その8(前書き)

復活！

またゆっくりと更新していきますのでよろしくお願いします。

次回新章の予定。

白ウサギとのワルツ      その8

「うそ……」

目の前に広がった光景を見て私は息をのむ。

これってあの夢の……庭？

チエシヤ猫から無我夢中に逃げてきたものの行く当てもなく、目の前に見えた大きな扉を特に理由もなく開けた。

するとそこは夢で見たあの美しい庭につながっていた。

手入れの行き届いた綺麗な庭。

夢で見た時は赤一色だったが今は色とりどりの花々が植えられている。

侯爵が植えたのだろうか？

夢に出てきた侯爵の姿を思い出しているといつの間にかチエシヤ猫

が追いついてきていた。

「アリスの嘘つき」

少し拗ねた様子でチエシヤ猫はそう言った。

確かに嘘をついたりして悪かったとは思っけどあんな嘘に騙されるチエシヤ猫もどうかと思う。

「貴方、頭大丈夫？」

「いきなり何？」

だってあんな嘘で騙されるとか、普通ありえないでしょう？

「何で逃げたのさ？」

何でって……貴方がそれを聞くわけ？

「身の危険を感じたから」

「あのさ、危険、危険ってアリスは言うけど、俺、白ウサギのおっさんに比べればずっと危険じゃないからね」

「そっ?」

「いや、どう考えてもそっでしょう? あそこまでアリスにベタベタひつつかないし、あそこまでつきまったりとかさすがの俺もしないよ」

確かに。

白ウサギの数々の変態行動を思い出し、私は深くため息をつく。

悪気はない。たぶん本当に私の事を好いてはいるんだろう。

ただその好きは私個人に向けられたものではなく、アリスに向けられているものなだろう。

「ねえ、アリスは白ウサギの事が好きなの?」

「だからっ、何でそうなるのよ!？」

「さっきからどっか上の空だし、ずっと何か別の事考えてるし」

「別に白ウサギの事を考えてた訳じゃあ……」

「本当に?」

そう言われると白ウサギの事しか考えてなかった気がする。

何でだろう。

正直いるのが当たり前だと思ってたから、あっちから消えるなんて少しも思わなかった。

だから気になるのだ。そう、それだけ。

別に好きとかそうゆう訳じゃない。

「ねえ、白ウサギなんか止めて、俺にしときなよ」

「冗談は止めて」

「冗談じゃないって。俺、結構本気なんだけど」

「絶対に嘘。信じられない」

「一生懸命口説いてんのに何で信じてくれないかな」

「貴方の性格のせいじゃない？」

「性格？ 他の住人と比べれば俺だって案外まともな方だろう？」

「そりゃあ、そうだけど……」

「ただどやっぱりその言い方じゃ、冗談にしか聞こえない。」

「そんな私の心の内を悟ったのか、チエシヤ猫は苦笑する。」

「どやっぱりたらあんたは俺を信じてくれるのさ」

「そうね、どこかの誰かみたいに何十回もプロポーズするとかこの庭みたいに素敵な庭を贈るとか、そうゆう誠意を見せたらいいんじゃない」

夢で見た侯爵とチエシヤ猫のやりとりを思い出し、特に何も考えずにそんな事を言った。

するとチエシヤ猫が途端に表情を険しくする。

「チエシヤ猫？」

突然、怖い顔をしだしたチエシヤ猫に私は僅かに動揺する。

チエシヤ猫は何も言わずにしげしげと私の方を見る。

「誰から聞いたんだ？」

「え？」

「だからその事、誰から聞いたんだよ」

チエシャ猫は怖い顔をしたまま、私の方を見ている。

何か触れてはいけないものに触れてしまったらしい。

ここは下手にこまかしたりせず、正直に言わないと……

「聞いたんじゃないの。夢で見たの」

「夢で？」

「そう、夢」

今まで見た夢の話をチエシャ猫にするとチエシャ猫は不思議そうな顔をする。

「何でそんな夢見るのさ」

そんな事言われてもわからない。それこそ私が教えてもらいたいぐ



らいだ。

「アリス……だからか？　でも、今までそんな夢を見たなんてどのアリスも言っただけだったけど……」

それって……

つまり私だけがその夢を見てるってこと？

何で私だけ？

チエシャ猫もわからないのだろう。それ以上何も言わず、黙り込んでしまった。

難しい顔をしてしばらく考えこんでからチエシャ猫は私に再度向き合う。

「侯爵がこの庭を作ったのはずいぶん前の事なんだ」

「でしょうね」

前見た時の侯爵夫婦はひどく仲が良さそうだった。

「でも何か意外。昔は二人ともあんまり仲が良くなかったみたいね」

「いや、今の侯爵と侯爵夫人はずっと仲良しだよ」

「え？　だって、何十回もプロポーズを断られたって……」

「そう昔はね。今は違う」

昔は？　今は違う？

チエシヤ猫は何を言っているんだろうか？

よくわからないでいるとチエシヤ猫が言葉をさらに付け足す。

「今いる侯爵は本物じゃないんだ。あれは代わり」

代わり？

私達は死んでも代わりが現れる。

まざまざとその言葉が蘇る。

侯爵が代わり。それはつまり侯爵が本物の侯爵ではない事を示していた。

「うそ……」

「うそじゃない。本当」

「じゃあ私が夢で見たのは……」

「そう、本物の侯爵。本物はずいぶん前に亡くなってね。今居るのは侯爵の代わり。この庭を夫人に贈ったのは本物の侯爵なんだ」

仲よさげな二人の様子を思い出し、私は絶句する。

「代わり？」

代わりなの？

だってあの二人あんなに……」

仲が良さそうに見えたのに。

チエシヤ猫は特に表情一つ変えずに平然と言う。

「本物の侯爵から代わりが引き継いだのは夫人への愛情なんだ。あの人らしいと言えはそうだけど」

押し黙る私を見て、チエシヤ猫首を傾げる。

「どうした？ 代わりの話は聞いてただろう？」

「聞いてたけど……」

やっぱり改めて言われても納得できない。

わからない。何で夫人は代わりとあんなに仲よさげにしているんだらうか？

どうして本物をあんなに拒んでいたのに代わりを受け入れたの？

代わりだから？

でも夫人に何度も告白していたのは本物の侯爵なのに……それなのに……これって……

「アリス！」

突然名前を呼ばれ、私の思考が途切れた。驚いて振り返るとそこには見慣れた男が立っていた。

「帽子屋？」

いつここに来たのだろうか？

相変わらず不機嫌そうな様子で帽子屋は私達の方へと近づいて来る。

「あゝあ、アリスとせっかく2人つきりだったのにまた邪魔が入っちゃった」

残念そうにそう言うチェシヤ猫を帽子屋は一瞥し、すぐに視線を私にやる。

どうしたの？ そんな怖い顔して……

そう私が尋ねる前にチエシヤ猫が帽子屋に聞いた。

「今、アリスは俺といちゃついでる最中なんだけど、何？ 邪魔しないでくれる？」

いつ、私と貴方がいちゃついたので？

呆れる私をよそにチエシヤ猫はさらに続ける。

「言っておくけどアリスは俺の恋人になるんだからな」

私がいっそんな事言った？ 話を勝手にすすめないで！

帽子屋がそれを信じたかどうかわからないけど、そんな事どうでもよさそうだ。

「お前らが何をしようとか俺には関係ない。勝手に好きなだけやれば

いい」

「違う!?!? だからそうゆうんじゃないなくて……」

慌てて否定しようとするけど、そんなもの帽子屋は聞かない。

「だが今は止めておけ。 さっさと城の中に戻るんだ」

城の中に戻れ?

帽子屋の一言にチエシヤ猫が僅かに表情をかたくする。

「何かあったの?」

チエシヤ猫の問いかけに帽子屋は何も答えない。

何かあったんだ。

私も尋ねるよつに帽子屋を見る。

しばらくすると帽子屋は苛立ったような声でたった一言発した。

「白ウサギがやられた」

たった一言。その一言に私は頭を殴られたような衝撃を受けた。

「はあ？ 白ウサギが？ 何で？」

「さあな。カササギがそう言っていたんだ」

「カササギが？ じゃあ当てにならない」

「ああ。詳しい事を聞こうしたら訳わからん事を口走って、さっさといなくなった」

「あんたが怖い顔で睨んだからだろう」

「俺は何もしていない」

「だからその顔が怖いんだって、アリスもそう思うよな？」



チエシヤ猫はそう言って私に同意を求める。

しかし私はそれに答えなかった。

答えられなかった。

白ウサギがやられた？

それってどういう事？

めまいがする。少しだけ吐き気もする気がした。

帽子屋とチエシヤ猫はまるで天気の話でもするぐらいの軽さで話を続けている。

信じられない。どうして二人ともそんなふうに平気なの？ 白ウサギが死んだかも知れないのにどうして……

違う。きっとこの国ではこの反応が普通なのだろう。死んだって代わりがいるから別にそんなに深刻に考える必要がない。

容姿も声も同じなんだからそれが白ウサギ自身じゃなかったとしても別に平気……

気づいたら、私は走って城の中へ戻っていた。

慌てて私を引き止めるチエシヤ猫の声がしたけど私は構わず走る。

道順なんか覚えてない。

ただ夢中になって廊下を駆けて行く。不思議と迷うことはなかった。

運がいいのか。それとも無意識に道を覚えていたのだろうか。

私は城の入り口までどり着くと力任せに扉を開けた。

城の外に出るなと帽子屋が言っていたがそんな事どうでもいい。

私は何の迷いもなく城の外へと飛び出した。

呆気ないほど早く白ウサギは見つかった。

城からそう離れていない場所に白ウサギは倒れていた。

「白ウサギ！」

慌てて駆け寄り、その体を助け起こす。

白ウサギの傷はひどかった。鋭利なもので刺されたのだろう。胸が真っ赤に染まり、顔から血の気が全くなっていた。

意識朦朧としている今の白ウサギにはたぶん私の声も届いていない。

それでも白ウサギはまだ微かに息をしていた。

「お医者さん……早くお医者さんに見せなきゃ……」

そうしなきゃ白ウサギが死んじゃう。

気がついたら涙が流れ落ちていた。

どうしよう……

止まらない。

どうしよう。どうしよう。どうすればいいの？

その時、地面を踏みしめる音がした。

誰かきてくれた。

チエシヤ猫かそれとも帽子屋か。誰でも誰でもいいから白ウサギを助けて。

救いを求めるように私は顔を上げる。

「どうしたの、アリス」

うそ……。そんな事あるはずがない……。

「アリス、そんな顔してどうしたの？」

こんな事って……そんな……

「姉さん……」

血まみれの鎌を持つ女性。その人は姉さんと同じ顔をして、私に微笑んだ。

第七章 真つ赤な舞踏会 その1 (前書き)

遂に女王様の登場です。

タイトル通り、何だか危ない章になりそうです。

しばらく白ウサギ達との絡みはありません。

第七章 真つ赤な舞踏会 その1

「×××」

「何？」

「ほら、足をそんなふうにしては駄目よ。女の子なんだから」

姉さんはそう言って、私の足を軽く叩く。

私はすぐに足を直し、謝った。

「じゅめんなさい」

「謝らなくていいわ。今度から気をつければいいのよ」

そう言って姉さんは優しく笑った。

姉さんは昔から何かと私のめんどうを見てくれた。幼い私の母親の代わりになるつと一生懸命になってくれた。

その気持ちはとっても嬉しかった。

嬉しかったけど、心のどこかで姉さんの気持ちを重く感じてました。

それでも文句一つ言わずに姉さんの言う事を今までずっと聞いてきた。

姉さんが嫌いな訳じゃない。

姉さんが嫌な訳じゃない。

ただ……私は……

「そんな怖い顔をしてどうしたの、アリス？」



姉さんに良く似た女性はやっぱり姉さんと同じ声で私に話しかけてきた。

私はそれに答える事ができず、ただ呆然と女性を見る。

外見は姉さんと何ら変わりはない。姉さん本人だと言ってもいいくらいだ。

違うと言えば服装ぐらいだろうか。

その女性は目に痛いほどの赤い、豪華なドレスを着ていた。

姉さんはあんなドレスを着ない。

姉さんは自分が着飾るよりも私を着飾る方が何倍も好きだったから。

「……………貴方は？」

声がかすれる。

気のせいかな冷や汗さえでてきてる気がする。

「私？ 私は女王様よ。この不思議の国の女王様」

この人が……女王様？

血のついた鎌が光る。

おそらく白ウサギを切り裂いたのはこの女性だろう。

「何で……こんな事を……」

「何で？ そんなの白ウサギが私の邪魔をしたからに決まってるでしょう？ 白ウサギは貴方を独り占めしようとした。それだけで十分殺す理由になるわよ」

そんな理由で白ウサギを殺そうとしたの？

呆然とする私に彼女は笑う。

「そんな顔しないで。私だってアリスと一緒に遊びたいんだもの」

違う。姉さんじゃない。

姉さんはこんな嫌な笑顔を浮かべたりしない。

彼女は姉さんの外見をしているが中身はまるで幼い子供と同じだ。

「安心して。白ウサギだって殺してないわ。貴方がそんな顔すると思ったからわざと生かしておいたの。芋虫にでも見せればすぐにくなるわ」

彼女はそう言いながら鎌を持ち上げる。

「ただし貴方の返答によっては殺しちゃうかもしれないけど」

「……………どういう事？」

「私のお城と一緒に来て。そこで遊びましょう？」

「遊ぶ？」

「そう。お茶を飲んだり、本を読んだり、お話したり。いっぱい遊びましょう」

本当に子供みたいにそう言って笑う。

「お菓子もいっぱい作ってあげる。紅茶も入れてあげる。アリスの為なら何でもしてあげるわ」

何故だろう。

相手はとても笑顔で話しかけてくるのにさっきから震えが止まらない。

怖い。すごく怖い。

行きたくない。行きたくないかない。

「もしも……嫌だって言ったら……」

私のその一言に彼女の表情が変わる。

笑顔が消え、無表情で私を見つめる。

「嫌なの？」

嫌だ。

しかしそんな事言えなかった。

彼女の手が動いたと思ったら、あっという間に首筋に鎌が突きつけられる。

「嫌だなんて言わせない。そんな事言つたら殺してやる」

彼女の目は本気だった。

本物の殺意。

体が震え、今にも泣いてしまいそうになる。

それでも泣かなかったのは自分の腕の中にある僅かな温もりのおかげだろう。

血まみれの白ウサギの体を優しく抱きしめる。

もしも私が嫌だと言ったら彼女は間違いなく私を殺す。

もしもそうになったら白ウサギも助からない。

「行く……行くからその鎌を下ろして……」

私のその言葉に彼女は笑って、頷いた。

アリス……

アリス……

行かないで下さい。

貴方がいなくなったら私はどうすればいいんですか？

貴方のいない世界で私はどうすればいいんですか？

貴方がいないと毎日がつまらないんです。貴方がいた時はあんなに毎日が楽しかったのに今じゃ何にも感じないんです。

貴方が私を白ウサギと呼んでくれた時、どれ程私が嬉しかったか、貴方は知らないでしょう？

楽しみに笑う貴方を見て、私は心の底から安堵したんです。

私の選択は間違っていなかったと。

貴方を手放したのは正解だったと。

アリス、貴方さえ幸せなら私はそれでいいんです。

貴方さえ笑ってくれれば私はそれで十分なんです。

例えそばにいらなくても、貴方が全て忘れてしまっても、それでも貴方が幸せなら私はそれでいいんです。

「おい、聞こえるか!?　　白ウサギ!」

「もう駄目なんじゃ……」

「いや、重傷だがこいつなら何とかなるかもしれない」

「何とかって……」



「運ぶのを手伝え。芋虫のところまで運ぶぞ」

帽子屋はそう言って、ぐったりとする白ウサギの体を持ち上げる。

チエシヤ猫もそれに手を貸し、なるべく傷に響かないよう二人で慎重に運ぶ。

「白ウサギはいいけど、アリスはどうするのさ？ 女王様に連れて行かれたとなると殺される事間違いなしじゃん」

「わかってる」

「女王様に連れて行かれたって聞いたら、白ウサギなんか怪我しても城に乗り込むかもよ？」

「ああ、そうだな」

「ギジジすんのねっ」

事態が思わしくないとこのに表情一つ変えない帽子屋に若干苛立ちながらもチェシヤ猫は尋ねる。

帽子屋はしばらく黙り込んでから低い声で呟く。

「あの女がアリスを殺す前に俺が殺してやる」

それだけ言つと帽子屋は後は何も言わずに黙つて、白ウサギを運んだ。

真つ赤な舞踏会　その2（前書き）

また新しい住人が出てきました。

真つ赤な舞踏会 その2

どうして泣いてるんですか？

「泣いてないよ」

泣いて……ないんですか？

「うん」

でも……

「泣いてない！そう言ってるでしょー！」

……貴方がそう言うのならそうなんですわ。すみません。

「……白ウサギ」

はい。

「私の事嫌い？」

そんな訳ないでしょう。

「本当に？」

ええ、大好きですよ。

「でも、私さつきから白ウサギに酷い事ばっか言ってるし、怒鳴ったりしてるし……」

いいんですよ。それでも私は貴方が好きですから。

「……ごめんね、白ウサギ」

何故、貴方が謝るんですか？ 貴方は悪くない。

「違うよ。きつと全部私がいけないんだよ。だからお姉ちゃんがあんな……」

貴方は悪くない。悪くないんですよ。

「本当に？」

私の言ってる事が信じられませんか？

「信じられない」

……そんな。

「嘘、嘘！ 信じてる！ 信じてるよ！ だって白ウサギは私の一番の友達だもん」

はい。

私は貴方だけの騎士ですから。

「騎士？」

はい。

「じゃあ、私に何かあったら必ず助けに来てね」

もちろんです。

「私も白ウサギを助けに行くから」

「……っ」

「目が覚めたかい？」

目覚めとともに声が飛んできた。

ぼんやりとした意識の中、白ウサギは声の聞こえた方を見る。

「芋虫……」

「やあ！ 久しぶりだね、白ウサギ」

芋虫と呼ばれた男はにこやかに笑う。

しかしそれに白ウサギは実に嫌そうな顔をした。

あからさまなその態度に慣れているのか、芋虫は気にもしない。

「何で貴方が……」

「何でって、運ばれてきたのは君の方なんですけど」

その言葉にはっとして、白ウサギは自分の体を見る。

見れば、胸に包帯が何重にも巻かれていた。

白ウサギはしばらく何とも言えぬ表情でそれを見ていたが、思い出したように顔を上げ、芋虫に詰め寄る。



「アリスは！？ アリスは無事なのか！？」

白ウサギのその問いかけに芋虫は曖昧に笑う。

それを見た途端、白ウサギはベッドから起き上り、芋虫の胸元をつかみ、激しく揺する。

「お、おい！？ や、止めてくれ！」

「アリスは！？ 彼女はどうしたんだ！？」

「だから落ち着いて……」

「さっさと答えろ！ さもないとお前の体を跡形もなく、切り刻むぞー！？」

「落ち着いて……落ち着いてくれ、白ウサギ……」

芋虫が必死にそう言つとようやく白ウサギも揺するのを止め、胸元から手をはなした。

「ほいほいと咳き込む芋虫をよそに白ウサギはベッドからとび出る。

「お、おい！　止めてくれ！　せつかく傷を縫ったのにまた開いてしまうー！」

「うるさい！　アリスは！？　アリスはどこだ！？」

「アリスなら女王の城だよ」

芋虫のその一言に白ウサギの動きが止まる。

目を見開き、固まる白ウサギに芋虫はため息をつく。

「君のせいだよ。アリスは君を助けるために女王の言う事に従って、連れていかれちゃったんだから」

非難するような芋虫の言葉に白ウサギは何も言わない。

急に黙り込んだ白ウサギに芋虫は酷く訝しむ。

「おい、白ウサギ？ どうした？」

「た……れば」

「あ？」

「アリスを助けなければ……」

まるで謔言を言うようにウサギは何度もそう呟く。

「彼女を助けなければ……私は彼女の……」

「たった一人の騎士かい？」

どこか呆れたように芋虫はそう言つと白ウサギを見る。

「全く、君はバカみたいに一途だね」

どんなに君が彼女を思つても、彼女は君の事など思い出しはしない

のじ。

芋虫の呟きなどすでに白ウサギの耳には届いていなかった。

「ねえ、この子がアリスなの？」

「そうだよ。この子がアリスだよ」

「そうなんだ。この子がアリスなんだ」

「そうだよ。この子だよ。間違いない」

「でも昔はもう少し小さくなかった？」

「そうだね。昔は僕らより小さかったのにね」

「本当にアリスなの？」

「違うのかな？ アリスじゃないのかな？」

「だってアリスだって君が言ったんじゃないか」

「そうだけど……」

「じゃあ、試してみる？」

「どうするの？」

「そうだな……首をはねてみるのか？」

首を……はねる？

誰の首を……

「それはいいアイデアだ」

「さっそくやってみよう」

やる？ やるって何を？

「ねえ、でも首をはねっちゃったら女王様に怒られない？」

「大丈夫だよ。平気だよ」

「本当に？」

「じゃあ、半分くらいまでにしておけば？」

半分……半分！？

「……………っ！？」

そんな中途半端は嫌だ！

あまりに恐ろしい会話に私は飛び起きた。

曖昧だった意識が一気にしっかりとした。

首をはねる？

冗談じゃない。半分だろうが何だろうが首をはねられるなんて嫌だ！

慌てて、声のした方を見れば、そけには見慣れない少年達がいた。

「起きたね」

「起きちゃったね」

残念そうにそう言う少年達。

双子だろうか？

髪型も背も瞳の色も声も同じだ。

おまけに服までおそろいのものを着ているから、見分けが全くつかない。

どっちも同じに見える。

いや、今はそんな事どうでもいい。

問題はその子達が持っているものだ。

切れ味がよさそうな大きな剣。

小柄な体格に似合わず剣はかなり太い。

それを二人とも構えていて、今まさに私に振り下ろそうとしていた。

本気で私の首をはねる気が。

一気に血の気がひく。

「起きたけど、どっつする？」



「そうだね……とりあえず、首をはねるっ」

「そうだね。やってみよう」

「止めて！ 首をはねないで！」

とっさにそう言つと少年達は顔を見合わせる。

「止めるっ」

「そう言ってるね」

「…っねっ」

「あ、あ、止めようか」

「そうだね」

二人はそう言って、剣を下ろした。

良かった。とりあえず、首ははねられずにすんだ。

私の方を見て、にこにここと笑う少年達。

全く、見覚えはない。

「だ、誰？」

私の問いかけに少年達は顔を見合わせた。

真つ赤な舞踏会　その3（前書き）

諸事情により、更新を一時停止していましたがまたゆっくりと更新していきますので、宜しくお願いします。

真つ赤な舞踏会 その3

「どうしよう、僕らの事覚えてないって」

「どうしよう」

二人の少年は顔を見合わせ、どうしようと繰り返し呟く。

覚えてない？

違う。私はこの子達に会った事がないんだから、覚えがあるはずない。

「あの……」

「この子、やっぱりアリスじゃないんじゃない……」

「そうなのかな。違うのかな」

「だとしたらどうするっ……」

「どじょじょか？」

「やっぱり首を……」

「駄目！ はねないで！」

すぐさまそう言つと少年達は同時に首を傾げた。

「何で駄目なの？」

「そつだよ。痛いなんて一瞬だよ」

一瞬だろうが何だろうが痛いのが嫌だ。

必死に嫌がる私に少年達は困った顔をする。

「首をはねるのが駄目なら僕らはどうやって君がアリスなのか確かめればいいのか？」

「そつだよ。首をはねなきやわからないよ」

「首をはねったってそんなのわからないでしょう!?!」

「そんな事ないよね」

「うん、そんな事ないよ」

少年達はそつ言って、うんうんと頷きあう。

どうしてそつなるのか私にはちっともわからない。

と云うがこの子達はいったい何者なの？

とりあえず、普通の子供では……ないな。

普通の子供は首をはねようとなんかしない。

双子のうちの片方が何かを思いついたらしく、もう片方に「そつそつと耳打ちする。」

それにもう片方もああと答える。

「そうだね！　首が駄目なら腕を切り取ればいいんだね！」

「腕ならもう一本あるし！」

「そつゆつ問題じゃないでしょう！？」

「え？　駄目なの？」

何て奴らだ。

物騒な事を平気な顔して言うくせに悪意のかけらもなさそつな顔をする。

どうしてこんな事になったんだっけ？

確か、私は白ウサギを助けようとして……それで……

「……っ！？」　「っはっはっはっ。」

「どっつてお城だよ」

「ここは女王様のお城なんだ」

ああ、やっぱりそうなんだ。

あの人は本当に私を自分のお城に連れてきたんだ。

これが夢だとしたらなんていう悪夢なんだろう。

姉さんと同じ顔をした女王様。

姉さんと同じ顔なのに言ってる事もやっってる事も全く違う。

姉さんは例え白ウサギがどんなに嫌な奴でもあんな事絶対にしない。

あんな……あんな……



人を傷つけるような事……

あの姉さんがやるはずない……

双子はしばらく私を見てから困ったような表情をする。

「ねえ、じゃあどこなら切ってもいいの？」

「そつだよ。あれも駄目、これも駄目じゃ、僕達どうすればいいの  
な」

待って。その言い方だと何だか私が悪いみたいに聞こえるんだけど。

私、悪い事言った？

誰だって、自分の体を切られるのなんて嫌に決まってる。

と双子の片方がぱあっと顔を輝かせる。

「そつだ！　じゃあ、僕らと鬼ごっこしよう！」

「え?」

鬼「っっ?」

「それはいい考えだね!」

何がいい考えよ。さっぱり訳がわからない。

「じゃあ、始めるよ」

「僕らが鬼。アリスは逃げてね」

「ちょ、ちよっと!?!?」

「逃げ切ったらアリスは本物だって信じたあげる」

「でも逃げ切れなかった時は……ね」

双子の目が光る。

その目は本気だ。

私の話など全く聞いてくれる気がない。

色々と言いたい事はあるけど、とりあえず逃げないと。

慌ててベッドから出て、部屋の外へと飛び出す。

「30秒数えたら追いかけるからね」

「早く逃げないとすぐに捕まっちゃうよ」

脅しとも聞こえる言葉を聞きながら、廊下を走っていく。

と言ってもまだこの城に来たばかりでどこに逃げていいかなんて私にわかるはずがない。

とりあえず外に。この城の外に。

ここにずっといる訳にはいかない。

帰らなきゃ。

あそこに帰らなきゃ。

「どこに帰るんだ、アリス？」

「……………っ!？」

突然、私の声とは違う声が聞こえて、足が止まった。

「足を止めていいのか？　すぐに双子が追いかけてくるぜ？」

だ、誰!？」

辺りを見渡してみるが人の姿はない。

なのに声だけは鮮明に聞こえてくる。

まるですぐそばに誰かが立って、しゃっべってるみたいだ。

「あ、駄目駄目。見つけようとしても無駄だ」

たぶん、こっちには見えなくてもあっちには見えてるんだろう。

声はそんな事を言って、懸命に声の出どころを探す私を笑う。

「アリス、ほら足を止めるな。いい子だから俺の言うとおりに走るんだ」

「何で誰かもわからない貴方に従わないといけないのよ!？」

頭にきてそう怒鳴れば、声がまったくすくすと笑う。

「いいね。そうゆう強気な女は好みだぜ？　だが、いつまでもそっやって意地をはってられないぜ？　ほら、聞こえるだろう？　双子がお前を探す声がない」

そう言われ、慌てて私は耳をすました。

すると確かに遠くの方から子供の笑い声が聞こえてきた。

「このままだとあの双子に捕まるぞ？ 双子の持ってた剣を見たら  
うっ？ お前の首なんていとも容易く跳ねられるぞ」

「……っ」

「ほら、意地なんかはらないで、俺に従え」

確かにその声言ってる事は正しかった。

このままではあの双子から逃れられない。

このままあてもなく逃げるくらいなら誰だかわからない声に従った  
方がいいのかもしれない。

でも…それでも……

私は声を無視して、走り出した。

「おいおい、どこ行くんだ？」

どこに行くか？

そんなの私だってわからない。

わからないけどそんな誰かわからない声をあてにするよりは自分の感の方がずっとあてになる。

意地っぱりって言いたきゃ好きだけ言えばいい。

「私は顔を見せない相手なんか絶対に信じない事にしてるの！」

走りながらそう言えば、声がぴたりと消えた。

あきらめたのだろうか？

そう思ったその時、笑い声が聞こえた。

「みいつけた」

聞いた事のある少年の声にぞくりと背筋に冷たいものが走った。



真つ赤な舞踏会 その4（前書き）

また新たな変人が出ました。

真つ赤な舞踏会      その4

「みいつけた」

少年が笑う。

逃げようと慌てて振り向けば、全く同じ顔の少年がそこに立っていた。

「みいつけた」

少年が笑う。

2人の手に握られた剣が光る。

あっと思った時にはもう遅い。

剣が私に向かって振り下ろされる。

もう駄目だ。

そう思い、とつさに目を閉じたその時、ふわりと体が浮き、誰かに抱きかかえられた。

「白ウサギ……？」

どうしてそう思ったのかはわからない。

でもそんな事するのなんて白ウサギしか思いつかなかった。

もしかしたら心のどこかで私は来るはずもない彼が来る事を期待していたのかもしれない。

しかし耳に届いたその声は当然ながら白ウサギの声ではなかった。

「残念」

声のした方を向けば、見たことのない男が私を笑顔で見下ろしている。

その顔には全く見覚えがない。

しかしその声は聞いた事があった。

「貴方さっきの……」

そう、あのどこからか聞こえてきた声だ。

という事はあの謎の声の主はこの男なのだろうか。

「白ウサギじゃなくて残念だったな」

その声はどこか冷ややかで、何だかバカにされてる気がする。

「……っ、放して！」

「うわっ、暴れんな。せっかく助けてやったんだぜ？」

「うるさい！ 別に貴方に助けてなんて言っていないでしょうっ！」

「じゃあ、来たのが白ウサギなら良かったのか？」

別にそうゆう訳で名前を呼んだ訳じゃない。

それなのに……

何だか、妙に感に触る言い方をする。

悔しくて睨みつければ、男はすまないと案外素直に謝った。

「悪気はないんだ。ただちょっと白ウサギが羨ましくてな」

羨ましいかった？

白ウサギが羨ましいかったってこと？

もしかして、この男白ウサギの知り合いなの？

どついう意味か尋ねようとした時、少年達の怒った声があった。

「何でお前が邪魔すんだよ！」

「そつだよ！ 邪魔するなよ！」

少年達は剣を片手に振り回し、私を狙うように見る。

どうやらまだ鬼ごっこをする気のようにだ。

まずい。このままだと殺される。

そう思って暴れるのを止めた私をかばうためか、それとも自己満足のためか、男は自分の胸元へとさらに私を引き寄せる。

「うるせえ。勝手に鬼ごっこなんかやりやがって、遊びたいなら他の奴としろ。アリスを巻き込むな」

怒鳴っている訳ではないが男の不機嫌そうな物言いに双子達が僅かにたじろぐ。

少年達の態度や話のやりとりからして、いちよ男と少年達は知り合いらしい。

「まだアリスかどうかわからないじゃないか……」

「そうだよ。僕らの事を覚えてないって……」

「他の奴らみたいに偽物かも」

「こいつは本物だ。本物のアリスだ」

男は何を根拠したのか、迷いもなくきつぱりとそう言い切る。

これには私も驚いたが双子達はひどく納得できなさそうにする。

「何でわかるんだよ!？」

「そうだよ！ お前なんかにわかる訳ないだろうっ!」

「わかるさ。俺にはな」

そう言っつて男は笑う。

やはりその目に迷いはない。

「剣を下ろせ。じゃないとこっちも本気で相手するぞ?」

男の目が鋭くなる。

一瞬にして男のまどつていた空気が変わり、その事に気づいた双子達は怯えた表情をする。

「……っ」

1人が逃げ出すのと同時にもう1人も逃げ出す。

双子は2人一緒に駆け出し、あっという間に見えなくなった。

それを確認してから男から離れようと動く。

しかし腕が肩にがっちりつまわされ、離れることができない。

また変な男と2人きつり。

この国には本当に変な人達しかいない。



「貴方……どういっつもり？」

「うん？ 何がだ？」

何がって、見ればわかるでしょう？

黙って睨めば、男が嬉しそうな顔をする。

「そんなに嫌そうな顔するなよ。こっつされるの始めてじゃないだろ  
うっ？」

「名前も知らない男にこっつされるのは始めてよ。さっさと放して」

「アリスは冷たいな」

「貴方みたいな人に優しくする必要なんかないでしょう！」

さっさと放してほしくて暴れるが男はいとも容易く抑えこみ、私を  
なかなか放してくれない。

「いい加減に放して！」

「お礼」

「はい？」

「助けてやっただろう？」

だからお礼。

そう言っつて男は笑う。

確かに助けて貰った。

この男がいなければあの双子達に見るも無惨な姿にされていただろ  
う。

「……ありがとう」

いちよお礼ぐらいはと思って言えば、男はうんと少し不服そうな顔をする。

「何？」

「お礼の言葉だけか？」

感謝の口付けぐらいしてもいいんだぜ？」

「っ!？」

何でそうなる!？」

「絶対にしない!」

「何だ？ 嫌か？」

「当たり前でしょう!」

いくら命を助けられたからと言って、そこまでやる気はない。

「俺ぐらいの美男子はなかなか他にいないぜ？」

自分で美男子とか……

いったい何様のつもりだろうか？

何だかむかつく。

「そうかしら？ 私も最近までそう思ってたけどこの国の人はほとんどみんな顔がいいわ」

むかついて、ちょっとひねくれた答えをしてやる。

別に嘘ではない。本当にここの人達は皆、顔がいい。

無論、それはこの男もそうだが。

「俺よりかっこいい奴なんかいねえだろう？」

「自惚れ屋。他にいくらでもいるから」

「例えば？」

例えばと言われると少し困る。

つつい言ってしまったが特に誰がかっこいいとか考えてなかった。

「そ、それは…えっと……」

「例えば白ウサギとかな」

「そうそう白ウサギとか……」

うん？ 白ウサギ？

「白ウサギって……」

そう言えばさっきも白ウサギのことを言っていた。

「貴方、白ウサギのこと何で知ってるの……？」

「何ですか？ 知ってるに決まってるだろう？ あいつは裏切り者だ」

裏切り者？

「あいつはアリスを…お前を裏切った。裏切り者じゃないか」

男はそう言って、私を見つめる。

その言葉の意味がわからず、私は呆然とその目を見返した。

真つ赤な舞踏会 その5(前書き)

放置してました。ごめんなさい！

真っ赤な舞踏会 その5

「裏切り者ってどついつことよ？」

「どついつて？ そのまんまの意味だが？」

何がそのまんまの意味よ。意味がわからない。

白ウサギが裏切り者？

「白ウサギがアリスを裏切った？」

あの白ウサギが？

男のその言葉に思わず笑ってしまった。

「そんなことあるわけない」

白ウサギにとってアリスがどれだけ大切に特別な存在か私は知っている。



それこそ気持ち悪い程、私は彼のアリスへの思いを知っている。

アリスの為なら彼は何でもする。

アリスの為なら命を捨て、誇りを捨て、何もかも捨て、それでも白ウサギはきつと平気なふりしてアリスに優しく笑いかける。

きつと彼ならそうする。

「白ウサギがアリスを裏切るなんてありえない」

そう絶対にならないのだ。

そう言い切る私に男は何故だか不思議そうな顔をする。

「何でそう言い切れるんだ？」

「だって、白ウサギはアリスのことしか考えてないもの。彼がアリスを裏切るなんてありえない」

「ありえない…ね」

男は腕組みをし、じっと私を見つめる。

それから小さく舌打ちした。

「よっぽど白ウサギの事を信じてるんだな？」

「なっ！？ そ、そうゆう訳じゃ……」

「違うのか？」

「少なくとも名前も知らない貴方よりも信じられるだけよ！」

「なるほど」

私の言葉に男は何か考えこむ。

できれば考えこむ前に離れて欲しい。

この男からは白ウサギと同じ危ない気配を感じる。

「あの…できれば離れて欲しいんですけど?」

「ビルだ」

「はい?」

「名前だ。どこの誰かわからない奴じゃ嫌なんだろう? 俺の名前はビルだ」

「ビル?」

呼び名にしては始めてまともな名前だ。

別に変わった呼び名を期待してた訳じゃないけど、何だか拍子抜けしてしまう。

それが顔に出ていたのだろう。男は不満かと聞いてくる。

「お前が名前も知らない奴は信じられねえって言ったから教えただろう?」

「不満とかじゃなくて…普通だなんて」

「はあ?」

「だって白ウサギとか帽子屋とかチエシヤ猫とか今まで変わったのが多かったから…」

「そりゃあ、呼び名だからだろう。何だ? お前は俺の呼び名を知りたいのか?」

呼び名が知りたいかだつて?

それつてつまり、教えてくれたあの名前は呼び名じゃなくて本名だつてこと!?

「ちよつと、そんな事していいの!?」

「何だ? いけねえのか?」

いけないと言うか、今まで本名を名乗った者などいない。

あの白ウサギでさえ本名を私には名乗らなかった。

「だって、本名はそう簡単に教えていいものじゃないんでしょう？  
それなのに……」

「別に俺はいいぜ」

アリスになら教えなかったかまわない。

そう言っつて男は笑う。

その笑みが誰かと重なった。

「貴方……」

「あ？」

「白ウサギに似てる…」

私の一言に男の顔が明らかにひきつる。

それでも言わずにはいられなかった。

「何で俺があんな奴なんか…」

「だって…」

似ている。そうやってどこか寂しそうに笑う姿やアリスの事を大事にしているところとか、よく白ウサギに似ていた。

「あのな…俺はあいつと違う」

違うって何が？

私の言葉に男は笑う。

「アリスなら誰でもいい訳じゃねえ。お前だからそう言っただよ」

「……私だから？」

何で？

「だって貴方、私となんてさっき会ったばかりじゃない」

「ちげえよ」

俺は前にもお前と会ってる。

男の一言に私は目を見開いた。

だってそんな事ありえない。

私は白ウサギに連れられて始めてここに来たのだから。

私が彼と会っているはずがない。

だって最初に会ったのは白ウサギのはずだから。

そのはずなのに男の目は酷く澄んでいて、嘘をついてるようにはとても見えなかった。

「私…いつ貴方に会ったの？」

「覚えてねえならそれでいい」

今はそれでいい。

男はそう言つとそつと私に手を差し出す。

「何……？」

「何って、見てわからねえか？ エスコートしてやるつもりだと思つてな」

エスコート？

「な、何で貴方にエスコートをされなきゃいけないのよ…」



「嫌なのか？」

「当然！」

「そんな事言っでいいのか？ お前、死ぬぜ？」

「なっ……」

死ぬ？ 私？

いや、今さら驚くことなんかじゃない。今までだって散々命を狙われてきたんだからそんなことになったとしても何も不思議じゃない。

このままこの男と別れてまたあの双子に会ったら…今度こそ首をはねられるかもしれない。

それにこの城が女王の城だと言うのならあの姉さんによく似た女王様にも会うかもしれない。

血まみれだった鎌を思い出し、背筋に冷たいものが走る。

無邪気に鎌を振るう彼女。白ウサギを倒した程の彼女が次会った時、私に何をするかはわからない。

結局私に選択の余地なんか最初っからなかったのだ。

男もそれをわかっていて、笑ったまま、まだ手を差しだしている。

「……………ただだから」

「何だ？」

「一度だけだから！」

そう投げやりに言って、その手を乱暴につかむ。

半ば八つ当たりに近いそれに男は怒ったりせず、むしろ嬉しそうに微笑んだ。

「何よ……………」

「いや、悪い。つい嬉しくてな」

「嬉しい？」

「アリスとずっとこうしたいと思ってたんだ…」

「何よ、それ……」

「アリスはいつも白ウサギと一緒にいたからな」

男はそう言って笑う。

笑っていたがその顔はあまりにも寂しげだった。

それがまた白ウサギと重なる。

「だから白ウサギが嫌いなの？」

「ああ」

男が私の手を強く握りしめる。

「あいつはいつでもアリス独占してた」

寂しげにと言うか、どこか悔しげにそう言う男に何故、彼が白ウサギに似ていたのかようやくわかった。

「貴方もアリスが好きなんだ」

私の言葉に男が苦笑する。

「この世界でアリスを嫌いな奴なんていないさ。みんなみんなアリスが好きだ。さっきの双子達だって悪気はない。ただ、アリスに構って欲しかっただけだ」

それにしても容赦なかった気がするけど。

そう言うと男は声を出して笑う。

「まあ、愛情表現は人それぞれだからな」

「そのせいで私は死にかけたのよ！」

「あれも愛情や」

あんな愛情は絶対いらない。

私の言葉がよっぼどおもしろかったのか男はまだ笑ってる。

「ちょっと、貴方はいつまで笑ってるのよ!？」

「貴方じゃねえだろう？ 俺はビルだ」

男はそう言って、私の手をひき、歩き出した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1648h/>

---

アリスと不思議なティータイム

2011年12月11日10時51分発行